

黎明期の日本のスポーツと その導入に尽力した人々 (特にストレンジ氏について)

鈴木 正

目 次

1. はじめに
2. スポーツの概念
3. 海軍兵学寮の競争遊戯会 (Athletic Sports)
4. 札幌農学校の教育と遊戯会
 - A. 教育
 - B. 札幌農学校の遊戯会 (Athletic Sports)
5. 慶応義塾の体育とスポーツ
6. 東京大学の運動会 (Athletic Meeting)
7. 明治初期日本スポーツの導入に貢献した人々
8. ストレンジ氏について
 - A. 氏の来朝までの略歴
 - B. ストレンジ先生の授業振り
 - C. ストレンジ氏の著書
 - D. 先生の大講演
 - E. 体育・スポーツへの貢献
 - F. ストレンジ氏の急逝

はじめに

明治以前における日本のスポーツは、現在に至って考えて見ると、殆んどなかった、あったとしても極めて貧弱なものであったという外はない、特に一般庶民にとっては、スポーツが皆無であったと言つてもよい。⁽¹⁾

これは封建制度のもとにあつて、個人の自由があまり重んぜられず、経済的にゆとりが少なかったために、人間の本性として持っている遊戯とか競争、競技というものは非生産的なものとして、抑圧されてい

たからであると言えよう。

しかし、明治以前においても、日本の国民生活の中に、スポーツ的要素とか、レクリエーション、遊戯といったものが全く存在しなかったわけではない⁽²⁾。

例えば、野見宿称と当麻蹴速との間に角力が行われたとか、中大兄皇子が「蹴まり」の最中に靴が抜けとんで、藤原鎌足がそれを拾って、近づきのきっかけをつくったとか、各時代に、それぞれ武術の試合が行われ、それが多分に武道奨励の意味をもっていたとしても、スポーツの傾向をもっていたことは確かである。「蹴まり」が長い間、宮廷の間で行われ、近くは明治天皇も40歳過ぎまで楽しまれ、日清戦争の際、広島大本営の中でも行われたことが、齊藤実の日記にも、明治28年1月18日「御前ニ於テ蹴まり」2月4日「蹴まり被仰付、御菓子頂戴」と載っている⁽³⁾。

更に上流の間では打毬⁽⁵⁾（まりうち）も行われていた。

武士の間では、武道の発達のため、武術、水術、弓術、馬術、騎射、流鏑馬、通し矢、笠懸、犬追物、巻狩、鷹狩等が、今日のスポーツとは幾分様相を異にしたかも知れないが行われ、武士の鍛練、教養として平和時にはスポーツ的になされていた。

庶民階級の間では、力石を持ち上げるとか（現在でも方々の神社などには、重量などを刻み込んだ力石が遺っている）、すもう、腕押し、棒押しなどがスポーツ的要素をもっていた。

日本では、仏教思想などの禁欲主義の影響もあって、昔から楽しむことを罪悪視したり、非生産的、消費的として排撃したりする傾向が強かった、そのため人前で、正々堂々と楽しむことができず、人にかくれて楽しむという望ましくない風習が培われ、その結果、不健全な娯楽に走り、人にかくれて酒をのみ、女を買う、芸者遊びを他の町に行ってするという憂さ晴しが行われ、本来のスポーツとは全く相反する方向に進んでしまったうらみがないでもない。

さて、日本において近代スポーツが行われ始めたのは、明治になって、多くの外国文化が輸入されるようになってからのことである。西

洋文化に接してはじめて、近代スポーツを知ったということが出来る。

これらのスポーツが、輸入、紹介された年月は正確にわかっていないものが多い、中には明治以前に入って来たものもある。⁽⁷⁾ その伝わり方も、外国人から直接正式に指導を受けて入ったもの、直接ではあるが何人かの外人から、ある期間の間に漠然と伝わったもの、外遊した日本人が持ち帰って紹介したもの、外国の文献を翻訳して紹介されたもの等いろいろの過程を経ている。

明治の初期に入って来たものとしては、陸上競技、漕艇、蹴球、庭球、野球等があるが本稿では、陸上競技、ボート、運動会等と、その紹介に大きな貢献をした、ストレンジ (F. W. Strange) について述べることにする。

さて本論に入る前に、先ずスポーツという言葉の概念をはっきりさせ、その言葉が実際には何時頃から、日本に使用されはじめて一般的に用いられるようになったかを明らかにしておきたい。

スポーツの概念

スポーツという言葉は、今や世界のどこへ行っても通用するいわば万国共通語という言葉であり、したがって完全な日本語という形になってしまい、今更これを「運動競技」などと訳して用いるよりは、スポーツとそのまま用いた方が遙かにわかりよいし、親しみ易いわけである。日常の用語、新聞、雑誌にも、常時見かけられ、子供達でも何のためらいもなく使っている。

然し、その語源や概念をここでははっきりさせておく必要があると思うので、一応その大略を述べてみる。先ず最初に「Sport」なる語を、「the encyclopaedia britannica」で引いて見ると、「a contracted or shortened form of “disport,” to amuse, divert oneself, old French se disporter or deporter, to leave off work, hence to play, Latin dis-, away, and portare, to carry; the origin of the meaning

lies in the notion of turning away from serious occupations, cf. “diversion” play, amusement, entertainment or recreation. The term was applied in early times to all forms of pastime……”とある。

以下少し敷衍して述べて見よう。

Sports という語は、英語として世界に広まったのであるが、しかしその語源はラテン語にはじまり、次いでフランス語として用いられた、ラテン語の Disportare が、そもそもの語源であって、この原語の中の Dis というのは「分離」という意味を示す接頭語で、これは英語の away の意に相当する、Portare は「to Carry」のことで「運ぶ」の意がある、Disportare は「Carry away」ということになり「自分の本来の仕事から、心を他の面に運ぶ」ということであり、「仕事に疲れた時に気分転換に何か別のことをする」「気分転換に楽しく何かをする」というのが Disportare 本来の意味である。すなわち、Disportare の語の源は「turning away from serious occupations」真面目な本職から開放されることであり、amuse「楽しむ」とか、Divert oneself「気をまぎらす」という意味である。

このラテン語は、その内容を保存しながらローマに引きつがれ、そしてイタリア語のディポルト Diporto には娯楽、慰楽、喜悅、又これが動詞となって、自分を楽めます、愉快に出歩く、自分を喜ばす、休息する等の意がある。もともとこれは Disport から出たものである。

フランスでは、中世紀に「se disporter」又は「deporter」が、仕事から解放される (to leave off work, hence to play) の意に用いた。しかし 13 世紀頃から伝わっている詩などから見ると、その頃、スポーツ的訓練 (Sportlich übungen) とはいえ、鷹狩を指していたことがわかる。すなわち、スポーツという言葉が、競技運動に関連して使われだした初期には、その語は、狩猟 (Hunting) と漁獲 (Fishing) の二つの遊びを表す言葉でもあった。その後この言葉は、だんだん広く解釈されるようになり、ラブレール Francois Rabelais (1483?

—1553) は、この語をボールゲームのためにも使用した。こうしてスポーツという言葉は、単に、Hunting や Fishing だけでなく、フットボール、テニス、ホッケー等すべて野外で行われるゲームを含めて呼ぶようになり「野外運動」の別名を意味するように転じた。

ところが更にスポーツの範囲が拡大されて、遂に室内で行われる拳闘、卓球、レスリング等の競技までもスポーツの名で呼ばれるようになった。そのため一時はこの混雑を防ぐために野外スポーツ、屋内スポーツなどと区別したこともあった。

英国では、これをデスポート Disport または Desport といい、17世紀からは、口数の少ない英国人が、他の多くの語と同様に日常使っているうちに、この語の前綴をとって「スポーツ Sport」となってしまった。これと同様に、フェンシング (Fencing) は、ディフィンス Defence「防禦」という語の De が略されてできた言葉である。

元来、英国人は、スポーツが非常に好きな国民であったので、この気晴し的手段として特に運動競技を行った。そこでスポーツと言えば一般に運動競技を指すようになった。

このデスポートという言葉は、フランスからイギリスにデスポートという形で入り、19世になって、英国から「スポーツ」という言葉になって逆にフランスやドイツ、アメリカ等に伝わり、その意味、内容も英国流に解釈されるようになったわけである。「スポーツ」という単数形が、sをつけてスポーツ Sports と多数の運動競技種目を指すようになり、今日では誰でも何の疑問もなく運動競技に類するものを「スポーツ」と呼んでいる。

参考文献

Wesen und Lehre Des Sports 1949 Carl Diem；日本スポーツ文化史・昭和 31 年、木村毅；スポーツの社会学・昭和 26 年、加藤橋夫；オリンピック競技とアマチュアリズム・昭和 38 年、井上春雄外。

日本で、このスポーツ Sports という言葉を使用しはじめたのは、何時頃であるか明らかではないが、明治の末までは使われてなく、大正に入ってからである。武田千代三郎の著「理論実際競技運動」(明

治 37 年)にもスポーツなる言葉は全く使われてなく、最後の運動術語解の部分に Sports-man を運動家と説明してあるだけである。氏は競技運動としてこれに当てている。昭和 3 年発行の体育辞典(木下, 寺岡共著)のスポーツの項に, スポーツと同じ但し時として狭義に解釈して狩猟及び競馬の事を言う場合がある。とあり, スポーツの項に, アスレチックより広い意味にして凡ての運動を言う。陸上競技, 水上競技, 漕艇, 凡ての球技, 其の他体育的遊技は言うまでもなく登山, スキー, スケートング, 旅行, 帆走自動艇, 射撃, 遊猟, 乗馬, 釣, 自転車, その他凡ての戸外運動及び娯楽的遊戯も含まれている, とある。

スポーツが文字として日本に入った最初のもは, ツルゲーネフ(Turgenev, Ivan 1818—1883)の小説「A Sportsmans Sketces」であった。これは日本では「獵人日記」と訳されたことでもわかるように, その当時の日本人は, スポーツと言えば「狩猟」のことであり, スポーツマンは獵師だと解していたらしい。所が明治も過ぎ, 大正の初期になって, 新聞にスポーツという言葉が使われ始め, その意味が狩猟ではなく運動競技として用いられだしたので, はじめは意外に感じたらしい。このスポーツという言葉の最初の使用者は, 橋戸頑鉄(早稲田大学野球部の名遊撃手で, 明治 38 年日本最初の渡米遠征早大軍の主将)だったらしいと, 木村毅は述べている。⁽⁸⁾

そしてスポーツという言葉が一般に普及したのは大正後半期に入ってからである。

ロシアでもこの頃, スポーツを狩猟の意味に用いていたらしい。すなわち, エイルマア・モウドの「トルストイ詳伝」に青年時代のトルストイ(Lev Tolstoj 1828—1910)がスポーツに出かけることが書いてあるが, これは狩猟のことであった。

しかしヨーロッパにおいては, 古くから狩猟のこのみでなく, 広く運動競技を抱括していた。すなわち, シェクスピアからバイロン頃までのスポーツは, 競技の意味に用いられていることから明白である。

スポーツを日本語で運動競技と訳せば、競技であるからには、試合を行い優劣を争うものだけを指すように考える人もあるかもしれないが、このスポーツなる言葉の意味内容はだんだん広くなり、今日では登山、ハイキング、遠足などの如く試合のない運動をも指すようになり、更に釣、囲碁、将棋までも含めて解する人もある。こうなってくるとスポーツとレクリエーションの内容が重なり合う点もあることになる。

レクリエーションとスポーツとを区別するための要点を述べれば、「スポーツはレクリエーションの中でも大きな分野を占めるものであり、身体全体を活動させるレクリエーション活動が広義のスポーツである」ということができる。

海軍兵学寮の競争遊戯会 (Athletic Sports)

—日本陸上競技(運動会)の始まり—

日本に、体術とか体操の形でオランダ式の体操が入ったのは、文部省が初めて設置された明治4年(1871)であった。この年文部省内に医務局が置かれ、翌明治5年に学制が頒布された。そして小学校には「養生法」「体術」中学校には「体操」という科目が施行され、今日の体育、保健体育の第一歩を踏みだしたわけである。

一方スポーツ面においては、野球、フットボール、ホッケーなどが明治6年頃外人教師等によって、僅かに紹介された程度であった。

翌、明治7年に特記すべきものとしては、海軍兵学寮(後の海軍兵学校で明治2年9月18日海軍練所として、東京築地に誕生し明治21年8月江田島に移るまでは築地にあった)で、日本最初の競争遊戯を行ったことである。これは、日本における運動会の最初のものであるが、この時の内容は陸上競技会とでも称すべき形のものであった。

当時、兵学寮には、ドーグラス・ジョンズ、ペリー、サットン、ギッシング、ハーデング等34人の英人雇教師が招かれ教育内容にも新しい方法が取り入れられるようになっていた。例えば、明治7年1月

には「英国教師招聘以前ハ専ラ座学ナリシカ招聘以後ハ概シテ一日四時間ノ授業ニ午前二時間ハ座学午後二時間ハ外業ニ充ツル事トナレリ」とあり、更に、「生徒ノ為ニ球戯ヲ設置ス」として次の如き請願書⁽¹²⁾を海軍省に提出している。

「凡精神ヲ勞スル者ヲ雷ニ束縛致シ候而已ニシテ之ヲ慰樂スル事無之候テハ必ス鬱閉ノ害ヲ免レ不申或ハ竊カニ犯則不善ノ遊戯ニ溺ルルニ至ル近頃生徒ノ状態ヲ経験仕候ニ兎角汚行ニ流レ其儘差置候ハハ後來醜態ヲ醸スノ弊ヲ生スルニ至ルヤモ難計ト奉存候即今更ニ寮議ヲ遂候処畢竟身体ヲ束縛致シ雷ニ学業而已ヲ嚴責致シ精神ヲ勞セシメ他ニ鬱散慰樂ノ方無之ヨリ斯ル弊害ヲ醸サントスル義ト奉推察候依テ議按仕ニ欧米各国海軍学校ニハ遊戯ノ具ヲ備ヘテ講究ノ余暇常ニ生徒ヲ樂マシメ以テ勞ヲ慰ムルノ法有之故ニ心意ノ方向不善ニ移ラスシテ汚行醜態ノ弊ヲ醸スニ至不申隨テ學術益進歩身体愈健強相成申候但此ノ遊具ハ「ビリヤード」「クリケットボール」或ハ「ボーリングアレー」等ナリ此ノ儀ヲ教師「ドーグラス」ニ相謀申候処同人モ己ニ此意有之候共其ノ入費莫大相掛リ候故今日迄黙止罷在候由申候就テハ前文ノ通り右ハ至急良法ト奉存候間先ツ「ビリヤード」二器急速寮内エ御備相成候様致シ度尤代価ハ一器ニ付凡千五百円程ノ見込ニ御座候何分早々可否御指揮被下度此段申出候也

一月（明治七年）

兵 学 寮

海軍省 御中

」

この文書を見てもわかるように、学業の間に、遊戯、スポーツ、レクリエーションが必要なることを強調し、欧米各国の方法にならい、いち早くこれを取り入れようとした兵学寮の進歩的態度がここにかがわれる。

同年3月21日、「競争遊戯会」の種目は英人教師の指導による所が多く、この競争遊戯という言葉も Athletic Sports の訳語であった。その経過については、次の如く述べてある。⁽¹³⁾

生徒ノ遊戯ヲ行フ

生徒競争遊戯御許容ニ付テハ来十一日興行致候積ニ付樂隊御差出

相成度且水路寮軍医寮並ニ「プリンクリー」生徒モ御差出有之度旨
教師申出候間可然御詮議ニ候ハハ夫々へ御達相成度此段申出候也

二月廿七日

兵 学 寮

海軍省 御中

この上申文書中にある「プリンクリー」生徒については次の如き註
釈がつけてある。

上文「プリンクリー」生徒云々トアリー一見甚解シ難カラン是ハ
「マリーニ」即チ海兵生徒ナリ而シテ其教師ニ「プリンクリー」氏⁽¹⁴⁾
ヲ雇ヒアリシヲ以テ常ニ「プリンクリー」生徒ト称シタルナリ之ヲ
公文に掲ケタルハ如何ニモ奇異ノ觀アリ然レトモ当時百事創制ノ際
ニ於ケル濶大⁽¹⁵⁾ノ氣象ノ一斑ヲ呈露スルモノナリ小節ニ拘泥セサル所
真ニ欽スヘシ

と。

このようにして、兵学寮の競争遊戯会は、最初3月11日に実施す
る予定がたてられた。しかしこれは雨天のため再度にわたって延期さ
れ、結局は21日に実施された。即ち、

「然ルニ、3月11日ハ雨ヲ以テ果サス16日ニ定ム又雨ナリ依
テ左ニ生徒遊戯来ル21日興行仕候ニ付此段御届仕候也⁽¹⁶⁾

三月十六日

兵 学 寮

海軍省 御中

このようにして21日に行われた競争遊戯会の内容は後にも示すよ
うに大体は英国より招聘されていた教師によって計画立案されたもの
であったので、実施種目、方法等が殆んど英国流であったことは申す
までもない。そしてこれが、日本で行われた最初の運動会であり、種
目的に見れば陸上競技会的であったわけである。これについて「海軍
兵学校沿革第一巻」の169頁に、

「当時生徒ノ遊戯未タ行ハレス此遊戯ヲ以テ此種ノ遊戯ノ嚆矢ト
ス且本省ヨリ院省使並東京府へ通知シ又其ノ賞与ハ省ヨリ出セルニ
依リテ見レハ一官立学校内ノ生徒ノ遊戯ニハ非スシテ幾ント官府ノ
盛典ナルカ如シ蓋シ当時学生ノ風一般学事ヲ重ニスルノミヲ知り学

政ニ当ル者モ身体ノ重スヘキ事ヲ知ラス我校茲ニ見ル所アリ曩ニハ球戯ヲ設ケ今又此挙アリ以テ當時文弱ノ弊風ニ感染セサル事ヲ得タルナリ然レ共此ノ如キ盛挙アルヲ得タルハ招聘教師ノ助言モ蓋シ隠然力アリシナラン此時ヨリ数年ニシテ他学校ニテモ始メテ運動会ノ挙アリシモ微ニシテ振ハス二十年以後別シテ韓清之役以後ハ文部管轄学校ノ運動ハ著シク活潑トナリ我校ノ運動会ニ比シテ却テ激シキモノアルニ至レリ」

ここに見られる如く、当時の教育が知育偏重の傾向にあったことに早く気づき、兵学寮においては、外人教師の意見を重視して他教育機関に先んじて、体育面に心をむけ、先に球技を設置し、今また競争遊戯を実施して、運動会の先鞭をつけたことは、その後の体育、スポーツ発展のためあづかって力あったことは疑うことはできない。この時より数年にして他校にてもとあるのは、後述する札幌農学校、東京大学等の運動会を指しているものであろう。（この海軍兵学校沿革史は大正8年の編集発行であることからもうなづける）

この日実施した競争種目の内容は、大へん手廻しがよく用意周到にも、すでに3月1日に「遊戯番附」として、そのプログラムが作られている、このプログラムが「スポーツ八十年史」（日本体育協会編、昭和33年8月1日初版）の132頁に出ているが、その最初に「此度勝海軍卿ノ許可ヲ得テ来タル三月廿一日海軍諸生徒ヲシテ九場十八般ノ競闘遊戯為サシム但午後第一時ヨリ興行ス」と、また最後に、「皇紀二千五百三十四年三月一日（明治七年）、海軍兵学寮」とある。最初の方の「三月廿一日」とあるのは、三月十一日のミスプリントだと考えられる。それは既に述べたように、最初この競闘遊戯の期日は3月11日と定められ、雨天のため16日に延期されたが又も雨にて3月21日に実施したのであるから、3月1日に出来上っていたプログラムに最初から3月21日と記載される筈はない。遊戯番附の内容は以下の如くである。⁽¹⁷⁾

第一 十五歳以下ノ生徒三百ヤードノ距離ヲ平駆スル事 賞与ハ
一番二番三番ニ

- 第二 十五歳以上ノ生徒六百ヤードノ距離ヲ平駆スル事 賞与ハ
一番二番三番ニ
- 第三 十二歳以下ノ生徒百五十ヤードノ距離ヲ平駆スル事 賞与
ハ一番二番三番ニ
- 第四 長飛 賞与ハ一番ニ
- 第五 高飛 賞与ハ一番ニ
- 第六 玉投ゲ 賞与ハ一番ニ
- 第七 二人三脚駆 賞与ハ一番二番ニ
- 第八 十五歳以上ノ生徒十歳以上ノ生徒ヲ荷フテ二百ヤードノ距離
ヲ平駆スルコト 賞与ハ一番二番ニ
- 第九 竿飛 賞与ハ一番ニ
- 第十 整列歩行 賞与ハ一番ニ
- 第十一 五十ヤードノ距離ヲ目隠シニテ駆ケル事 賞与ハ一番二
番ニ
- 第十二 飛倚 賞与ハ一番二番ニ
- 第十三 三百ヤードノ距離ヲ限リテ見物人ニ競走セシムルコト（但
兵学寮管轄ノモノニ限ルベシ） 賞与ハ一番二番三番ニ
（其品ハ兵学寮ノ存意ニ任ス）
- 第十四 豚ノ走ルトキ其尾ヲ握ルコト，但豚ヲ放ツハ一度ニシテ其
尾ヲ握ルニモ時間ヲ限ル 賞与ハ一番ニ
- 第十五 三飛毎ニ立ツ事 賞与ハ一番ニ
- 第十六 頭上ニ水桶ヲ戴キテ平駆スル事，但五十ヤードノ距離内ニ
テ水ヲ持帰ルコト最速ニシテ其分量多キ者勝利トス 賞与
ハ一番二番ニ
- 第十七 鶏卵二十箇ヲ一ヤード毎ニ置キ平駆シテ之ヲ拾ハシムル事，
但シ二百ヤードノ距離内ニテ二十番，鶏卵ヨリ標柱ニ到ル間
ヲ四十ヤードトス 賞与ハ一番二番三番ニ
- 第十八 先ニ豚ヲ放ツトキ誰モ其ノ尾ヲ握ル者アラサレバ今又之ヲ
放チテ遊戯ノ大切リトス

右ノ遊戯ヲ興行スルトキハ海軍省ヨリ楽隊ヲ出ス

行司(審判員のこと)ハ英国中等士官「シントジョン」「シブソン」^(ママ)(18)
及「チップ」ト定ム⁽¹⁹⁾

この「海軍兵学校沿革史 第一巻」167 頁に記載されている遊戯番附と「スポーツ八十年史」の132 頁に載せられている競闘遊戯表の競闘標目には多少の違いがある。海軍兵学校沿革史は、大正8年に編集されたものであり、当時の海軍兵学校長鈴木貫太郎中将の緒言に「本校ノ歴史ヲ後昆ニ伝ヘンカタメ茲ニ過去五十歳ニ亙ル沿革ヲ繹ネ其ノ記録ヲ蒐集シ之ヲ二巻ニ纂輯セリ然リト雖其ノ資料タル古キ文書記録ニ至リテハ或ハ散逸シ或ハ欠損シテ蒐集容易ナラス加フルニ此ノ企画勿急ノ間ニ属シ辞句ノ洗練ヲ欠キ魯魚ヲ訂スノ暇ナクシテ上梓スルニ至リタルハ誠ニ遺憾トスル所タリ庶幾クハ諒セヨ」とある。スポーツ八十年史の原典は、「黎明期の帝国海軍」の著者である沢鑑之丞所蔵の競闘遊戯表によったとあるので、後者の方が確かであると考えられる故、重複するようであるが、載せておく。

第一般 雀雛出巢(すずめのすだち)

十二歳以下ノ生徒ヲシテ百五十ヤードノ距離ヲ疾駆セシム

第二般 燕子学飛(ツバメのとびならひ)

十五歳以下ノ生徒ヲシテ三百ヤードノ距離ヲ疾駆セシム

第三般 秋鴈群翔(あきのむくどり)

十六歳以上ノ生徒ヲシテ六百ヤードノ距離ヲ疾駆セシム

第四般 暁鶉乱飛(あけのからす)

看客ヲシテ三百ヤードノ距離ヲ疾駆シ且ツ諸般ノ遊戯ヲ競闘セシム、但シ本寮管轄ニ在ル者ノ外ヲ許サス

第五般 文鯨閃浪(とびうをのなみきり)

距離ヲ限ラズシテ前ニ飛躍シ少シモ遠ク踰越スルヲ務メシム(幅跳)

第六般 大鯢跋扈(ぼらのあみこえ)

高点ヲ定メズシテ上ニ飛躍シ少シモ高く地ヲ離ルルヲ務メシム(高跳)

第七般 老狸打磔(ふるだぬきのつぶてうち)

距離ヲ定メズシテ毬ヲ投擧シ少シモ遠ク達スルヲ務メシム（投てき）

第八般 乳猿避獵（こもちざるのたちのき）

十五歳以上ノ生徒ヲシテ十歳以上ノ生徒ヲ背ニ負ヒ二百ヤードノ距離ヲ疾駆セシム

第九般 蚊蝶趁花（てふのはなおひ）

二人ヲ並ヘテ左者ノ右脚ト右者ノ左脚トヲ緊繫シ二頭三脚ニシテ疾駆セシム

第十般 蜻蛉飜風（とんぼのかざかへり）

竿ヲ以テ地ヲ撥シ旋轉飛躍シテ以テ疾駆セシム（棒高跳）

第十一般 野鶴出籠（かごのにげづる）

脚ヲ伸シ少シモ其ノ体ヲ毀ル事ナク整肅シテ以テ急歩セシム

第十二般 挽馬脱鞍（ばしやのはなれうま）

布巾ヲ以テ両眼ヲ遮蔽シ五十ヤードノ距離ヲ晴々疾駆セシム

第十三般 白鷺採鱸（さぎのうをふみ）

或ハ一脚ヲ蹇シ或ハ大踏歩シ或ハ飛躍シ歩々交互シテ以テ疾駆セシム（三段跳）

第十四般 神鷹捉鯿（わしのいなとり）

豚ヲ放チ其ノ奔馳ヲ追ヒ尾ヲ捉シテ之ヲ獲ルヲ務メシム、但ダ其ノ豚ヲ放ツハ一回ニシテ之ヲ促スルハ時間ヲ限ルコトトス

第十五般 玉兎躍月（うさぎのつきみ）

躍ルコト三躍シテ以テ歩ニ代ヘ少シモ疾ク前進スルヲ務メシム

第十六般 獼猴偷桃（さるのももとり）

鶏子二十顆ヲ撒シテ一ヤード毎ニ置キ之ヲ拾収シテ疾駆セシム但ダ其ノ距離ハ二百ヤードニシテ第二十顆ノ鶏子ヨリ標柱ニ至ル間ヲ四十ヤードト為ス

第十七般 須浦汲潮（すまのうらのしほくみ）

頭上ニ水桶ヲ戴キ疾駆セシム但ダ五十ヤードノ距離ニ達シテ水ヲ溢耗スルコト少ク且速ニ還来ルヲ務メシム

第十八般 中原逐鹿（もろこしのしかおひ）

先ニ豚ヲ放チシニ若シ詮人ノ之ヲ捉獲疾スル者モ有ラズンバ再ビ
之ヲ放ツテ以テ一開シ以テ競戯ノ結局ト為ス

以上の種目の名称は、非常に穿った面白い名前をつけたもので、その漢字の用いかた、全部四字であること、更にその読ませ方など実にふるったものばかりで、当時の漢字の用法、読み方の様子がうかがわれ、国語学者などにとっても興味深いものがあると思う。種目の内容は娯楽的なものがいくらか入っているが、大体は陸上競技の、短中距離走、幅跳、高跳、三段跳、棒高跳、砲丸投等で、英国海軍士官から日本に陸上競技の種目がはじめて紹介されたと見ることができる。勝者に与えられた賞品は、景物という名のもとに、提革囊、懐冊（手帳）、^{セン}行旅杖、屈柄杖、書翰箋、書翰套（封筒）、套刃刀（サヤのある小刀）、手套（手袋）、面帕（ハチマキ・手拭）等の名が記されているのも面白い。

更に「増訂明治事物起原」557 頁に、この件につき、次のように記載されている。大部分は重複するが多少違っている点もあるので付記しておく。

運動競技会の始……明治七年三月、海軍兵学校構内に於て、同寮生徒をして「競闘遊戯」を為さしめたり、其プログラムの難解を併せ示さんが為に、ここに〔雑誌〕第一一五号の所掲を転載しておく。
 本月十六日勝海軍卿の許可を得て、九場十八般の競闘遊戯を為さしむ、本日午後一時より興業あつて衆庶の縦覧を許されたり、右興行の時に當つて、海軍楽隊樂を奏し、以て競場の色を添う、英国中等士官シントジョン氏、下等士官シブソン氏、チップ氏の三名競闘の行司を為せりといふ。（行司、今日ならば審判役などといふべし）
 ○一場、○第一般、^{すじめのすだち}雀雛出巢、十二歳以下の生徒をして百五十ヤードの地を疾駆せしむ、○第二般、^{つばめのとびならひ}燕子学飛、十五歳以下の生徒をして、三百ヤードの地を疾駆せしむ、景物一番第一号、二番第二号、三番第三号。（以下賞物を略す）
 ○二場、○第三般、^{あきのむくどり}秋鴈群翔、十六歳以下の生徒をして六百ヤードの地を疾馳せしむ、○第四般、^{あけのからす}曉鴉乱飛、看客をして三百ヤード

の地を速駆し、且つ諸般の遊戯を競闘せしむ、但本寮管轄に在る者の外を許さず。

○三場、○第五般、文魚閃浪とびのうまのなみきり、距離を限らずして、前に跳躍し少しも遠く踰越するを務めしむ。○第六般、大魚跋扈ぼらのあみごえ、高点を定めずして上に飛躍し、少しも高く地を離るるを務めしむ。

○四場、○第七般、老狸打磔ふるだぬきのつがうち、距離を定めずして毬を投撃し、少しも遠く達するを務めしむ、○第八般、乳猿避獵こもちざるのかけねけ、十五歳以下の生徒をして十歳以上の生徒を背に負い、二百ヤードの地を疾駆せしむ。

○五場、○第九般、狂蝶趁花ちやうのはなおひ、二人を並べて左者の右脚と右者の左脚と緊繫し、二頭三脚にして疾駆せしむ、○第十般、青蛉飄風とんぼのかざがへり、竿を以て地を撥し、旋転飛躍して以て早駆せしむ。

○六場、○第十一般、野鶴出籠かごのにげつる（以下抄略）、○第十二般、挽馬ばしやの脱鞍はなしうま。

○七場、○第十三般、白鷺探魚さぎのうをふみ、○第十四般、神鷗捉魚わしのいなとり。

○八場、○第十五般、王兔躍月うさぎのつきみ、○第十六般、獼猿偷桃ざるのももとり。

○九場、○第十七般、須浦汲潮すまのしほくみ、○第十八般、中原逐鹿。（景物略之）

今日の競技種類高飛・幅飛・棒飛・一人三脚・砲丸投など、多くこの十八般中に見ゆ。

又十六年六月十二日の〔開花新聞〕に、同十六日、陸軍諸将校の発起にて、戸山学校体操場に於て、体操共進会を催し、一等より三十等まで賞品を与ふる記事あり、共進会の名珍し。

とある。

この日本陸上競技あるいは運動会のくさわけとなった競争遊戯会は、ただ一回行われたのみで、翌年からの年中行事とはならなかった。その理由は不明であるが、前述した如く「……此時ヨリ数年ニシテ他学校ニテモ始メテ運動会ノ挙アリシモ微ニシテ振ハス二十年以後別シテ韓清之役以後ハ文部管轄学校ノ運動ハ著シク活潑トナリ我校ノ運動会ニ比シテ却テ激シキモノアルニ至レリ」とある。⁽²⁰⁾すなわち、数年にし

て他校にてもとあるがこれは明治 11 年 5 月札幌農学校の第一回遊戯会を指しているものであろう。更に明治 16 年に東京大学で陸上運動会が開かれ、続いて慶応義塾、高等師範等でも賑かに行われるようになっていった。

明治 7 年海軍兵学寮の競争遊戯会のあと、明治 10 年 (1877) になって、その兵学寮 (明治 9 年兵学寮は廃され、兵学校となる) の向側にあった運動場で、東京体育倶楽部の競技会が催され、二人三脚、百ヤード競走、ハンマー投などが行われた。⁽²¹⁾ これは 3 年前に兵学寮で行ったものに刺激されてその模倣であったものと思われる。

札幌農学校の教育と遊戯会

教育

海軍兵学寮の競闘遊戯会が、明治 7 年の一回限りで終わってしまった後、三年後の明治 10 年に東京体育クラブの競技が開かれたことは前述の通りだが、明治 11 年には札幌農学校 (北海道大学の前身) において、兵学寮の方法とやや似た形の第一回遊戯会が米人教師指導によって開かれた。

これより先、明治 5 年 3 月 14 日に、札幌農学校の前身である「開拓使仮学校」が東京芝増上寺内に置かれ、4 月 15 日に開校し、明治 8 年 7 月この仮学校を「札幌学校」と改め 8 月に教師生徒ともに札幌に移転し、9 月 7 日に開業式を挙げた。翌明治 9 年 8 月 14 日更に「札幌農学校」と改称して開校式を挙げた。この札幌農学校の開校の準備として、開拓長官黒田清隆は、明治 8 年 3 月に当時の正院 (内閣) に対して米人教師三名の招聘方を願出で、外務省を通して、その人選を依頼しておいた。⁽²²⁾ その結果、米国ワシントン在留中の全権公使吉田清成の依頼により、アメリカ政府から推薦された、アマストにあるマサチューセッツ州立農科大学 (Massachusetts College of Agriculture at Amherst) の学長ウィリアム・スミス・クラーク (William Smith Clerk, 1826—1886) が選ばれ、7 月 31 日札幌に着任した。氏は鉱物学、化学専攻の学者であると共に、南北戦争における抜群の勇

士で陸軍大佐であった。

すなわち吉田公使が、外務省からの依頼を受けて、その適任者を探した際、日本に深い理解と好意をもっていたノースロップ (Birdsey Grant Northrop, 当時コンネクチカット州の教育局長) 氏がクラークの識見と手腕に当代一流の人物であることを見抜いて推薦してくれたことは、日本にとって大変幸運なことであった。開拓使からは二ヶ年の勤務を希望したが、マサチューセッツ農科大学の現職にあるクラーク氏のこととて、長く外国に留ることは、許されず、一年間の賜暇を得て、日本の要望にこたえてくれる事となった。この際自分で二人の適任者を選んで連れて来た。それは、何れも Bachelor of Science の称号をもつ (自校出身) ウィリアム・ホイラー⁽²³⁾ (William Wheeler) とダビッド・ピー・ペンハロー⁽²⁴⁾ (David P. Penhallow) であった。三人は明治9年 (1876) 5月20日に出発し、太平洋を渡って6月29日、東京に到着した。

三人の招聘教師は、開拓使御用船玄武丸に乗って品川湾から出帆、小樽湾に入港し、7月31日無事札幌に着任した。この時、東京英語学校在学中の生徒中から、三人の教師が自ら口頭試問によって選んだ官費生11名が同道した。札幌学校在学者からは既に13名が選ばれていたので合計24名が、最初の入学者であった。

初代校長は、開拓少判官札幌本庁上局事務取扱調所広丈氏が兼任し、クラークは教頭 (副校長) 兼農場長の要職につき、農学、植物学及び英語を担当した。学校の組織はマサチューセッツ農科大学のそれにならって教則がつけられたので、従来の札幌学校の内容とは全く一変した。

すなわち、明治9年9月の札幌農学校規則には、学科目20の中に「体操、兵学及用兵学」なるものが含まれていて、各学年各学期とも、毎週2時間の練習が示されていた。

クラーク氏は、マ農科大学長の現職中一年の賜暇をもらって渡日したので、翌明治10年4月16日に在日僅か9ヶ月余で最初の契約通り (往復の旅行日程も含まれるので) 帰国の途についたのであったが、

創業の札幌農学校の基礎を築き、物心両面に遺した業績は決して少くなかった。立派な教育者であり、キリスト教信奉者として高潔な人格者であった氏は、歴戦の勇士として身を持つこと極めて厳格で、禁酒、禁煙、禁欲を学生に説き、学生はすべからく紳士たるべきことも教育の信条としていた。

ここでクラークの行った教育について少し述べるならば、彼の方針は鎖国が明けて間もない当時の日本に対しては、思い切った新しいものであった。その開校式の演説では「東洋諸国民を多年暗雲の如く包みし階級や因習の暴君の手より……解放……教育を受くる学生諸子の胸中に自ら崇高なる大志を喚起するに至るべし、……勤労と、信認と又それより生ずる栄誉の最高位置を得んがために努力せよ、……諸子が勉学の機会をもつ種々の学科につき能う限りの知識と熟練とを獲得せよ、……誠実勤勉にして活動的の人物を求めつつあるも、……諸外国と等しく日本においても、かかる人物は、需要を満たすに足らざる有様なり、……本校は独り北海道の住民のみならず、広く全国民より尊敬と支持とを受くるの価値あるものとなるべきことを信ず」と述べ「この新設農学校の基礎を築かんとして来たるものなり」とその所信を披歴した。⁽²⁵⁾

氏は基督教徒として聖書より外には道徳基準なるものがないと信じ、その前年まで基督教を国禁とし、犯すものには厳罰をもってのぞんでいた日本に、先ず魂の糧として学生に聖書を用意してきた。これに対し黒田長官はもちろん反対であった。しかし氏の信条と熱意には当局も遂に黙認せざるを得なかった。

クラークは毎朝、授業に先立って祈り、もしくは、聖書の章句を解説した。別に説教をしたわけではなかったが、新しい道を求めていた生徒達はその人格に傾倒し、その学問信仰を学び、祈りを習い、反省することを知った。そして、それがやがて信仰となり、翌年3月には、クラークの起草にかかる「イエスを信ずる者の契約」に署名し、間もなく洗礼を受け、後日クラークの援助によって「すべての点において独立した者のみが他に対して真に公平な寛大な態度をとり得る」と信

じた独立教会を建設し、わが国基督教に炬火をかかげただけでなく、新に入学してくる者を感化し、こうした環境に育った生徒が学校の幹部となるようになり、北海道大学の他と異なる独特のよい学風を作ったのであった。第一回卒業生中には、後に北海道帝国大学の初代総長となった佐藤昌介があり、第二期生の中に内村鑑三、新渡戸稲造（旧姓⁽²⁶⁾太田）、宮部金吾等の人物を輩出したのも故あるかなとうなずける。

独立心があり、自ら責任を持つ者を育てようとその最善をつくし、自らの向学心、研究心に訴えて現実の観察から学ぶことを奨励し、詰込み主義的教育を排し、宿題は自らの研究心を発揮する様な方法を選び、自ら率先して野外の観察を行い、学問のためには生徒のために如何なる労苦もいとわなかったという。授業は全く米国の College の方法を取り、講義は全部英語を用い、そのため生徒は鉛筆でノートをとるのが大仕事であり、クラークはこれに対して講義終了後ノートを提出させ、その誤りを正した。学生数が少いので理想的な教育ができたわけである。生徒は全部寄宿舎であり、帰ってから、その日のうちにノートを清書する。翌日は授業を始める前に必ず 5 分か 10 分位教師から生徒に質問をして、復習をかね理解を完全にした。教室で午前中 4 時間は講義、午後には実験、製図、測量等があり、その外農場実習と兵式体操があった。

講義を理解し知識を養うと共に、発表力にも重点がおかれ、言語の演説法が重要な科目でもあった。英米の有名な演説を暗誦して、その態度や抑揚を批判指導され、自らの創意による発表、討論も行われ、学年末には公開演説会が毎年開かれた。

農場実習には、一定の労賃を支給して独立勤労の風を養い、近代経済思想を植付けようとした。当時の学徒の気風として、立身出世を願ひ、大臣大将を夢み、空理空論に走る傾向が多かったが、そうした若人に真の近代人としての地に足のついた堅実な態度こそ重要であることを実地について教え込もうとした。単に教室においてのみならず、実習に、寄宿舎に、野外に、自宅にとあらゆる機会に生徒に接し、親しくこれを導いたのであった。基督教に基盤をおいた道德教育に力を

入れたのは前述した通りであるが、いたずらに規則によって縛ろうとはせず、生徒自らの良心にまかせ、紳士たれ (Be Gentleman), そうでないものは生徒としての資格がないとして退学を命ずるという毅然たる態度をとったこともあった。禁欲の必要を説き自ら率先垂範、好んだ酒を遠ざけ、遙々母国から持参した酒瓶に遂に手を触れなかったという逸話も残っている。真の教育者として敬服に価する実践指導者であった。

このようにして、札幌農学校の基礎を築く大任を果たして、学校を去るに当って、その教え子達に残した言葉

“Boys be ambitious, be ambitious not for money or selfish aggrandizement, not for the evanescent things men call fame. Be ambitions for the attainment of all that a men ought to be.”

「青年よ大志を懐け、されどそれは金銭のためならず、己が勢力を拡めるのためならず、はたまた、人の世のはかなき名声のためならず、人としてあらねばならぬすべてのものを成しとげんがためにこそ、よろしく大望あれ」

これはあまりにも有名であり、多くの人に今尚記憶され、人の胸をうち、青年の心を奮起させるものがある。かかる偉大なる業績は、その後も永く弟子達によって伝えられ、立派な学風を作り、育て、遺し幾多の人がこの学風をしたって集った。

この離別の辞は、札幌のクラーク会堂や記念胸像と共に、氏の高潔なる精神を伝えているものであり、事実現に至るまで若き青年の夢を鼓舞激励してきたものである。

さて、クラーク氏が、その赴任に当って一緒に連れて来た新進気鋭のホイラー (William Wheeler), ペンハロー (David Penhallow), また少し遅れて明治 10 年 2 月に来任したブルックス (William P. Brooks)⁽²⁷⁾ の三教師は何れもクラーク学長の自ら選んだ教師だけにその専門教科はもちろん、生徒の日常の生活指導にも極めて熱心であった。

札幌農学校の遊戯会 (Athletic Sports)

クラーク教頭は、学生の心身を健全・強壯にし、活潑な気風を養う教育方針をたて、僅か9ヶ月半の在留中に素晴らしい効果を挙げ、業績を残して帰国したが、残留した三人の愛弟子教師のうちホイラー先生が教頭の任を引き継ぎ、他の二人と共に学生を愛し、札幌の人々にも敬愛され、親しくなり、築かれた基礎の上にもますます研究と授業に精を出し、校風を発展させて行った。

明治 11 年 5 月 25 日には、この三人の米人教師の指導によって、マサチューセッツ農科大学の形式をとり入れた遊戯会が開かれることになった。三人の中特にスポーツに熱心だったのはベンハロー先生であった。この札幌農学校の第一回遊戯会こそ、先の海軍兵学寮の競争遊戯会に次いで、日本では第二番目に行われた運動会であったわけである。

遊戯会とは、「アスレチック・ミーティング (Athletic meeting)」の訳語で、当日の内容は全く初歩的な競技会であった。

明治 7 年海軍兵学寮での競争遊戯会は、兵学寮から海軍省を通じて正院 (内閣) に届け出で、公然と諸官省の長官や東京府長官等に招待状を出し、海軍省から軍楽隊を出すという中央での大催物の形であったのに対し、こちらは、中央から離れた未発展の北海道で、しかも開校後間もない生徒の少い農学校の催しであったので全国的には何等の注目を引かなかった。従って昭和 5 年に野口源三郎氏が、これを取りあげるまでは、殆んどスポーツ史的に注目する人はなかった。これについて、恵迪寮史では次の如く述べている。⁽²⁸⁾

「従来我国におけるスポーツの起りは、明治十六年の東京帝国大学の前身である大学予備門であるとされていたが、昭和五年我が体育界の元老でありスポーツ史の研究家野口源三郎氏が来札の折、種々調査した結果、札幌農学校では明治十一年スポーツを始めたという確証を得て、従来の日本スポーツ史を五年だけ過去に遡らせた、すなわち此の第一回の遊戯会は同時に我が国諸学校における運動会

の濫觴であったのである。」

と。

更にこの遊戯会のスポーツ的価値は、兵学寮のそれが、只一回の開催のみで終わってしまったのに対し、その後毎年春開かれ、更に学生数の増加もあり、年と共に規模も大きくなり、遂には札幌神社大祭とならんで札幌市民の誇る二大年中行事となったことである。

ささやかな第一回の遊戯会は学校前の道路や空地を利用して行われ、⁽²⁹⁾ しかも名称を力芸として警察に届けが出されている。すなわち、

警察課 ^(ママ)(30) 札幌農学校 ^(ママ)

来る二十五日頃本校生徒一統運動の為校前明地に於て力芸施行致候
間予て此段御届に及置候也、

⁽³¹⁾
とある。

兵学寮の届出は「生徒競争遊戯」⁽³²⁾であったのに対し、こちらは「生徒一統運動の為力芸」となっているのは比較して興味深い。力芸とあるからには、角力か、力石の持上げでも競ったのかの如く思われるが、そのような日本式のもの一つもなく、全部米人教師の案になる洋式の種目であった。

当時の記録少く、その盛会知るに由なけれども、⁽³³⁾ 実際に行われた場所は、現在の時計台附近の空地或は停車場通りの現山形屋旅館前⁽³⁴⁾などで行われたようである。

競技種目は、⁽³⁵⁾ ダッシュ (Dash) を電奔と訳し、「電奔百碼」「電奔二百碼」「疾走幅飛」「疾走高飛」の如き純然たる競技より、芋拾い、豚追い、二人三脚競争等の興味本位のもの迄挿入⁽³⁶⁾されていた。

回を重ねるにしたがって、種目も工夫され、百碼電奔、二百碼電奔、^(ママ)四分一英里競争、^(ママ)半英里競争、一哩競争、兵装四分一哩競争、疾走幅飛、疾走高飛、疾走棒高飛、背面競争、鉄槌抛競争、障害物競争、一足競争、三脚競争、韓信競争、竹馬競争、戴囊競争、蛙飛競争、提灯競争、薯拾競争、食菓競争、髻競争等が行われ、この外に学士(卒業生)来観人、市内各学校生徒、来賓児童、来賓等の競争も加えられ、その当夜は寄宿舎食堂の上の広間に各教授及びその家族を招き家族的

な親睦会を催し道化芝居などをして一夜を楽しく過すを例としたとい⁽³⁷⁾う。

恵迪寮史にも、北海道大学創基五十年史、同八十年史にも、第一回遊戯会については記録、資料が少いため詳しくは載っていないが、明治15年頃からのものは、当時の在校生の記事が各回にわたって記載されている。次に明治15年の志賀重昂氏の描写を転記しておく。

(恵迪寮史 66頁)

明治十五年六月三日

「緒てさて今日は愈々遊戯会に当たりたれば、昨日より色々の用意あり、午前九時より射的あり、皆々得意の秘術を顯はした、予は不中なり、頃刻(しばらく)にして森校長(明治14年2月調所校長退き、森源三校長兼務となる)始め井川氏臨席して、半英哩奔走あり、大中根一等賞を得ぬ、それより帰りて待つ程に11時に午食し、鈴木の小僧などと戯れて居る中12時より又開会臨席には校長、教頭教員「サンマース」夫人なり、(明治12年12月ホイラー教頭帰国し、13年2月、ジェームス・サンマース James Summers 氏教頭となる)三足奔走、飛びこ袋入、奔走、百碼電奔、薯拾い等すみて雨天近ければとて漸く戯を早めぬ、捕豚は仕掛けの大層にもかかわらず面白からざりき、ベースボール終りて綱引きあり、予は白を得たり、卒業生も思い思いに各組に入りぬ、最初に白勝、次に紅勝なくして終り、旗取あり、この組もまた前の綱引に同じ、小野田白に入る予は白軍の寄手となりぬ奮戦数刻遂に倭見足立氏諸教員の仲裁に依りて仲直りしたり、一時は皆々死力を尽したり、高岡、杉山等は大疲労なりし、これにて会も全く終り見物人も散じ又午後5時皆晩食に就く、平常のものの外に豚肉、焼薯等の供あり、食後、岡、結城と散歩、7時鳴鐘全生徒復習堂に集り賞品授与式あり、大中根は一番多く得たり、校園主小野田、大塚、河南も来席尋で皆蒸餅等喰いたり、山口の室にて衆と飲酒したり、それより中川、本土等の踊りを始めとし、吉田、安岡の手踊り、柵野、中川等の物語り、小野、本土の劍舞、山口の三番叟、安岡の主人形、大町の飴売り等ありて止みぬ」

この記録で大体当時の遊戯会の種目や方法、当夜の娯楽会等の様子が知られるが、全寮制で、生徒、教師及びその家族等が和気あいあいたる融和の中に行われ、札幌市民もこれを楽しみにしていた様子が読みとられるであろう。北辺の一農学校に発したこの遊戯会は、毎年生徒の自主的積極的な態度によって盛大に行われ永く続けられたので、その後の日本各地各学校の運動会にも少なからぬ影響を与えた筈である。また恵廸寮史の 157 頁に、

「此頃の遊戯会は札幌神社大祭と共に、市民の待望する二大催物の一となっていた、この前日には寄宿舎側の“オンコ”の葉や円山附近の原始林のエルムの枝を採ってグリーン・アーチを作り、或は仮装に使用する赤や青の着物を整えた、又ある年の如きは市内の寄附を仰いで百円以上も集めた事があると言われている」

と。校門に緑のアーチを前日から大段的に作り上げ、市民の協力を得たことなどにも触れている。

このようにして最初は、米人教師の案によるマサチューセッツ農科大学の Athletic meeting の直輸入から始まり、その後学生の創意や自主的運営によって札幌農学校独特のものがつくりあげられた。前記の海軍兵学寮の競争遊戯会は英国海軍士官等の案によって指導実施された Athletic sports で何れも陸上競技が日本に最初に紹介されたものとして、スポーツ史上重要な意味があり、学校体育上からは運動会の始まりとしての意味をもっている。

兵学寮の方は 4 年も早かったが、只一回だけで終ってしまったという点が弱く、札幌農学校の方は、陸上競技種目として前者より整っていたこと、その後長く続けられたことなどで意味がある。しかしこれらの元祖はともに英国であり、当時英国式陸上競技が欧米においては、かなり普及して国際化されており、やがて国際オリンピック（第一回は 1896 年、明治 29 年）に発展したわけである。

なお、札幌農学校初期の兵式体操については、明治 11 年 10 月 16 日に演武場（二階建 229 坪余）が竣工し、兵式体操の指導者として、士官学校第一期卒業生の加藤重任少尉が、11 月に開拓使兼任を命ぜ

られて東京鎮台第一連隊から赴任して来た⁽³⁸⁾。実際には練兵と称して行われ、科目として重視された。これは明治 17 年 7 月には、卒業生に歩兵操練科卒業証書を授けることになり、その翌年 3 月には、文部省御用掛森有礼が黒田顧問に、札幌農学校の教練はわが国体育の先駆であり、これを模範にして全国に及ぼしたいとの希望があったということで、遊泳及び操舟術を加えることになり、従来本科のみに限っていたものを、予科にも一週間二時間ずつ柔軟体操、器械体操を行うことになったという。

質実剛健の気風を教育界に注入しようとして兵式体操を学校の教材に取り入れようとした森有礼の意図によって、早くも札幌農学校では練兵という週二時間の教科の中で、遊泳、操舟、柔軟体操、器械体操等が行われた。

その他のスポーツも札幌農学校で比較的早くはじめられている。それは開校に当って米人教師を招聘したこと、その後も何人かの外人教師が赴任して紹介したためである。

野球は明治 14～5 年頃やはり米人教師によって紹介され、試合は放課後演武場前の校庭で行われ、硬球を使用した、ルールも現在のものと大した差はなかった⁽³⁹⁾。

蹴球は英国式アソシエーション法を用いてなされ、米式ラグビーは行われなかった。

冬には山滑りと氷滑りが行われた。山滑りとはスキーの事でなく臀にむしろを敷いて滑るという遊びであった。又 2 月の中旬頃積雪が凍り始めた頃には山野を跋涉して地衣（岩や木の幹などにつくコケ類）採取を行うということも多く行われたという。

氷滑りは、はじめのうち豊平橋下流で試みられていたが、明治 18～9 年頃から工事に着手した中島遊園地が完成すると共にこの公園内で行われるようになり、後に第二回卒業生の新渡戸稲造氏が外国留学から帰朝の際（明治 24 年）スケートの道具を持ち帰ったことを契機として、これから後札幌のスケートは急速に普及するようになった。

慶応義塾の体育とスポーツ

日本近代思想の啓蒙、開拓者福沢諭吉の創立による慶応義塾は、進歩的に西洋文化を早くから取り入れたことはいうまでもない。体育、スポーツの分野においてもこのことは例外ではなかった。

福沢諭吉が学校における体育を重視し、その設備の重要性に着眼していたことは、慶応2年に出版した著書「西洋事情」初編、の学校と題する項に次の如き一節があることでもわかる。

「学校の法は最も厳正なり、教授の間言語せず、法を犯す者は罰あり、然れども時間は随意に遊ぶを禁せず、是がため学校の傍には必ず遊園を設けて花木を植え、泉水を引き、遊戯奔走の地となす、又園中に柱を立て、梯を架し、綱を張る等の設をなして学童をして柱梯に攀り、或は綱渡りの芸をなさしめ、五禽の戯をなして四肢を運動し、苦勞の鬱閉を散じ、身体の健康を保つ」

当時の古学者は、神聖なる学問所においては、謹言、端正、一挙手一投足をも軽々にすべきではないと考えていた程であるから、学生が、柱に攀じ上ったり、綱渡りをしたりという「五禽の戯」を自由にしてよいなどということは恐らく、考えも及ばなかった位であろうが、福沢先生は慶応義塾の規則の中に、

「午後晩食後は木のぼり、玉遊び等ヂムナスチックの法に従い種々の戯をなし、勉めて身体を運動す可し」

という一項を加えて、邸内の空地には、ブランコ、鉄棒、シーソー等の運動具を備え、又時々は学生を伴って郊外へ遠足に出かけられる等早くから体育の奨励に意を用いていたし、三田へ移転の後は自ら乗馬、居合、米搗、散歩等によって、常に運動を怠らないと同時に、学生に向っても盛んに運動を奨励され、義塾に種々の運動具を備え付けただけでなく、専門家を雇って学生に運動を教えさせたという。

明治初年の義塾の図を見ると、今の大会場のある辺に鉄棒その他の器械体操用具の設備もあり、又構内の一部に馬場も作ってあったようである。明治12～3年頃になると、乗馬、器械体操は衰え、これに

代って剣術、柔術が盛んになった。17年頃には、ベースボールが学生の間に行われ、だんだん盛んとなり、三田ベースボール倶楽部ができたのは明治20年頃であったという。

22年春には端艇部ができ、ボート四隻を備えて練習を始めた。

このように慶応は、日本ででのスポーツの最初の試みというわけではないが、東京大学、高師、一高、高高等に次いで比較的早く外来スポーツを取り入れ、これらのスポーツ団体を組織統一する必要を感じ、明治25年5月に慶応義塾体育会なるものを組織し、剣術、柔術、野球、端艇の各倶楽部をこれに所属させ、その後、弓術、操練、徒歩部などが加わった。

又明治20年の頃からは毎年一回づつ、陸上運動会を催すことになり、後には水上運動会も年中行事の一つとなり、春は水上、秋は陸上と他校と同様な行事を開くようになった。

東京大学の運動会 (Athletic Meeting)

東京大学で行われた最初の運動会は、明治16年(1883)6月16日で、前述の海軍兵学寮や、札幌農学校よりも数年遅かったのであるが、兵学寮ではただ一回だけで後が続かなかつたし、札幌農学校は北海道という離れた場所だったので、歴史的、全国的には割合に知られず、日本での運動会の最初は東京大学であると思われ、各種の記録にもそのようになっているものが多い。例えば、北海道大学の恵迪寮史(昭和8年版)の66頁に「遊戯会とは Athletic meeting の訳であつて現代の競技会、運動会の如きものであつた。従来我国におけるスポーツの起りは明治16年の東京帝国大学の前身である大学予備門であるとされていたが……」⁽⁴⁰⁾とか、武田千代三郎が大正12年(1923)2月号から5月号の4回にわたって「Athletics アスレチックス」というスポーツ雑誌に寄稿した論説「本邦運動界の恩人、ストレンジ師を想う」の中にも2月号12頁に「明治十六年六月と言うに突如として我が国の教育界に実に破天荒の大事件が発生しました、日本における陸上競技の産声^(ママ)が此の時始めて一ツ橋大学校庭(これは当時、東京大学法

理文学部と大学予備門が一ツ橋にあって、その合同の競技会であった。当時は東京大学をその所在地名から一ツ橋大学とも呼んでいた。現在の学士会館付近であった) のただまん中より三百健児の大歓声となって日本国中に轟きわたったのであります」とあり、また、3月号の126頁に「我国始めてのアスレチック・ミイト」と題して……「明治十六年の六月とばかりで、何日であったか、ここに之を明記しかねますのは残念ですが、記録もしておかず、記憶もしていませんので申上げられません、大抵六月の二十日頃から学年試験が始まりましたから、その一週間程前の十日過ぎだったと思っています、唯今では陸上競技会などは珍しくもありませんが、この日のミイトこそ実に我国開闢以来始めての催しでありましたから私は今記憶して居ります限り、当日の実況を事細かにここに書きしるして、本邦運動史の資料に供したいと思ひます、……昨大正十一年十一月四日駒場における全国競技会の当日理学博士山口銳之助氏(41)より、このミイトは六月十六日で、明治十六年六月十六日と連想しておけば忘れる事がないと教えていただきました。ここで申上げておきますが、我国の大学ボートレースの第一回がその翌年明治十七年十月十七日で、我国水陸二大競技の始まりは、この連想法によってたやすく記憶することができますのも亦何か奇しき因縁でありましょ(42)う……一ツ橋大学の構内は本郷移転後は市街地となり、その時の運動場は唯今の神田区錦町三丁目の八番地と九番地の全部にまたがって、東西七八十間、南北は五十間もありましたろう、一面美しい芝が植えてあって人夫が絶えず手を入れておりましたから今日どこへ行っても見られぬ程の立派なものでありました。そして只今の商科大学の筋向いにありました、……この芝生の丸形の一周三百碼たらずのトラックが臨時に設けられました……」

更に5月号12頁にも「我国における始めてのこの運動会は、俄の思いつきで先例もなければ経験もなく、役員の手合せも足らず、走者の練習も不十分でありました……」と何回かにわたって書いている所を見ると、武田氏は、兵学寮の競争遊戯会も、札幌農学校の遊戯会も知らなかったようである。

真行寺朗生著の「近代日本体育史」の70頁には「聯合体操会は明治十五年頃に体操伝習所で既に行われたが、今日の所謂運動会なるものは、明治十六年一説には十八年に東京大学が競技運動会を起したのに其の端を発している、そして此の本邦最初の運動会も、前に述べた^(ママ)ストレンジが重に尽力して成立したのである。何しろ始めての運動会だといっているので、朝野の貴顕紳士や知名の士が多数来会したといわれている」とある。

更にまた、明治31年12月の中学世界という雑誌の「運動の沿革……破浪生」の中に「日本において、戸外遊戯が運動会の形式をそなえて起りしものは、実に明治十八年における東京大学競技運動を以て最初となす」とここには明治十八年としてあり、木村毅氏の日本スポーツ文化史の302頁には「春になったら、どこの学校でも運動会がある。あの運動会というものを初めて日本の学校でおこなさせたのがストレンジ教授だ」とある。

以上のように東京大学の運動会は、兵学寮よりは9年も遅く、札幌農学校よりは5年も後であったが、しばしば日本最初のものとされて来た。それは、その後の日本における各学校の運動会は、ほとんどこの東京大学の運動会を範としその刺激を受けて行うようになったことと、体育、スポーツ界への影響が最も大きかったという理由によるものと思われる。東京大学が日本の最高学府であり、日本の中央に所在し、卒業生が各地に散らばって活躍指導的地位に立ったということによるものである。

そもそも東京大学で体育が実施されはじめたのは大へん古く明治5年まだ南校と称していた頃の⁽⁴³⁾舎則に(南校規則、舎則及び学科課程は明治5年4月に発布された)、「朝第六字ヨリ夜第十字迄ヲ課業時間トス午前前三字間午後二字間ヲ正課時間トス正課後ノ二字間ハ体操及ヒ外出散歩ノ時間タルベキ事」とありまた、英、仏、独語の各科の学課程表には日曜以外の毎日、「九字ヨリ九字半迄」体操という時間が割当てられていた、その一例を示せば次の如くである。⁽⁴⁴⁾

英 二 の 部							教師 フエルベッキ ギリフヒス ウイードル ハウ 教官 宇都宮少教授 柳本大教授 高橋 浩
時	月	火	水	木	金	土	
7 字 8 字	ハ 文 典	ギ 地 理 学	高 図 画	ハ 文 典	ハ 歴 史	ウ 窮 理 学 柳	
8 字 9 字	ギ 化 学 字	ギ 文 学	ウ 窮 理 学 柳	ギ 化 学 字	ハ 読 方	ウ 算 術	
9 字 9 字	ヨ リ 迄	体 操	体 操	体 操	体 操	体 操	
9 字 10 字	ギ 生 理 学	ハ 読 方	ウ 窮 理 学 柳	ギ 化 学 字	ハ 読 方	ウ 算 術	
10 字 11 字	ウ 算 術	ハ 作 文	フ 修 身 学	ウ 算 術	ハ 作 文	フ 修 身 学	
11 字 12 字	ウ 幾 何 学	ハ 歴 史	ハ 書 取	ウ 幾 何 学	フ 代 数 学	ギ 文 学	

余談になるがここに使用されている「字」は、おそらく時間、時刻の「時」として用いられているのだと思う、どうしてこの文字を用いたのか理解に苦しむが、規則第四条に、「生徒午前ハ第九字午後ハ第一字半ニ各其教場エ出席スベシ若シ故ナク十五分時以上遅刻スル者ハ半日ノ課程ヲ省クベシ午前ハ第九字ヨリ第十二字迄ヲ正課時間トシ第十三字ヨリ第一字半ヲ午飯並休息ノ時間トス第一字半ヨリ第三字半迄ヲ又正課時間トス正課時間ハ猥リニ外出スルコトヲ許サザル事、但第十二字ヨリ第一字マデ休息ノ時間午飯等ノタメ退校スルハ苦カラズ」第五条「暑中休業前後ハ朝第七字ヨリ第十二字マデヲ正課時間トスベキ事」また日課十二条に「三字外来生既ニ退校シテ後ハ入舎生モ五字迄ノ二日間ハ歩行運動勝手タルベシ」等の文書からもうなづかれる。

この明治5年に定められた体操の実際内容はどうなものであったか全く知るよしもないが、勉学の間こうした時間をおき、規則にまで

定められていたのはその必要性が認められていたからに外ならない。

元来日本には戸外ゲームといったものが貧弱であり、学校等でも教材としてどんなものがあるのかもあまり知られていなかった、明治5年南校で作られた「樹中体操法図」⁽⁴⁷⁾は室内で行う体操の実際的説明図解であった、そしてこれは成人又は上級学生を対象としたものであった。この図の左下隅には次の如き解説文が載せてある。

「凡学者ハ思ヲ精微ニ尽スヲ以テ務トシ凝然踞床輒モスレハ身体ノ運動ヲ闕ク是ヲ以テ縦ヒ功等躡ニ踰ル者アルモ或ハ痼疾ニ係リ往々天下無用ノ人トナル者ナキニ非ス亦閑然ナラスヤ況ヤ其功未タ半ナラスシテ疾ヲ致ス者ニ於テヲヤ夫身健ナラサレハ其業勤ムヘカラス業勤メサレハ其功何ヲ以テカ成ラン是体操ノ已ムヘカラサル所以ナリ然而体操ノ法タル極メテ多ク天晴ルレハ之ヲ外ニ操シ天雨フレハ之ヲ内ニ操ス此表皆之ヲ内ニ操スル者ナリ学者苟モ能ク奉守墜サス身ヲシテ強壯事ニ從ハシメハ他日大成以テ為スアル可キ者皆ナ其此ニ基スルヲ知ラン

表スル所ノ順序ニ随ヒ日々其姿制ヲ変換ス可シ

回数ヲ表シ三段トナス者上段ハ起業ニ当テ修スル所ノ数ナリ中段ヲ二週間後修スル所ノ数トシ下段ヲ八週間後修スル所ノ数トス但シ按頭支脇呼吸法ハ必日々四五回ス可キナリ

^(5年)
明治壬申五月

南校

この樹中体操法図は（樹中とは室内とか屋内のことである。樹には講武館、道場等の意があり、武技を講ずる部屋で現在の体育館の如きもの、屋根つきの射場という所から、室内稽古所の意に移ってきた）ドイツの運動医学者シュレーバー⁽⁴⁸⁾（Daniel Gottlob Moritz Schreber 1808—1861）が1855年（安政2年）に著したAerytliche Zimmergymnastik（医療的室内体操）の巻末の付図を翻訳したものである。

この「樹中体操法図」が南校で翻訳され出版したことは、当時西洋文化を取り入れる窓口は何と言っても東大の前身たる南校であったということからで、翻訳出版の必要と価値が認められたということから意味が深い。この図説の内容としては、頸、上肢、手指、掌、下肢、

肩、胴体、跳躍、歩行、呼吸運動等体の各部、全身の回旋、挙振、屈伸、側転、捻転など四十五種目⁽⁴⁹⁾を合理的に構成したもので徒手体操の基本的なものは全部含まれていると見てよい。日本におけるそれ以後の学校等の徒手体操は殆んどこれを基礎として行われたと云ってもよい。各体操の名称もこれを基本として名付けられたと見てよい。すなわちこの榊中体操法図は大変よく作られていて、その後の日本の徒手体操に大きな影響を与えた。

南校はその後、明治6年4月10日開成学校と改称、翌7年5月7日には東京開成学校と称するようになり更にまた明治10年4月12日に東京大学法学部、理学部、文学部となり東京医学校を合併して、東京大学医学部とした四学部の大総合大学となった。このようなめまぐるしい改革の中で、体育、スポーツ面には特記すべきものは見当らない。この間に輸入された野球、サッカー、テニス等が同好の学生間で幾分行われたが、それらについては稿を改めて述べたいと思う。

明治16年東京大学の運動会が開かれるまでに他方では、明治11年に米国の体育学教師リーランド⁽⁵⁰⁾(George Adams Leland 1850—1924)を招いて神田一ツ橋に「体操伝習所」を設立して、12年4月から体操教師養成の授業が始まり、14年7月に第一回の卒業生21名を出した。リーランドは本務の合間に、東京女子師範学校、東京師範学校、東京大学予備門等の生徒に体操術を指導したり、米国よりテニスの道具を取よせて指導したといわれている。リーランドは14年7月任期が終って帰国した。

武田千代三郎の手記によれば(アスレックス、大正12年2月号12頁)「明治十三四年頃には折にふれて幅飛び、高飛び、棒飛びやらベースボール用の毬投げの競べ合が催されて粗末な賞品などが出た事があった。これも年に何度ときまって行われたのではなく、よく覚えぬが不定期であったようだ、土方法学博士よりきいた」とあり、この事から察すれば、その頃「幼稚な運動会の如き催し」があったものと思われる。また武田氏は「明治十五年頃、大学の運動場には、只今ならば陸海軍の学校でもなければ見られぬ程の器械体操の設備がしてあ

りましたが、教える人もなければ、習う者もなく空しく雨ざらしとなって朽果つるに委せられました。同年秋その運動場のくされかかった器械をとりくずした跡に並行棒と水平梯子が新規に設備されて、ここに初めてストレンジ師の姿を運動場に見るようになりました。師は時々放課後に教えて下されましたが、余り熱心に稽古する者がなかったので何時の間にか、この器械の運命も又々立腐れと定まってしまった。書き落しましたが、大学では古くよりフットボールやベースボールもやっておりましたが毬をを使いつぶすとわざわざ横浜まで買いにも行けず、いづれも断続常なしで盛んには行われませんでした」と。

この手記に見られる如く、明治 10 年過ぎ頃に、陸上競技、野球、テニス、フットボール等のスポーツが幾分日本に入って来たが、珍しいので横浜の外人が行うのを見たりして、外国帰りの人とか、学生の間に多少行われた程度に過ぎなかった。特にその用具がたやすく手に入らなかったことは普及に大きな障害であったようである。野球のボール一個にしても、もちろん当時はまだゴムの軟球はなかった外来の皮製の硬球だから値段も高いし、横浜の外人関係の店まで行かなければ手に入らなかった。これについては、野球大観（旺文社編）49 頁に「米国から最初に野球のボールを持って来た人は木戸孝正であるが、只一箇の貴重なボールは破れ始めると幾度か縫合せつつ大切に使用された」とか、木村毅の日本スポーツ文化史の 56 頁にも「木戸孝允の養子木戸孝正は、岩倉使節一行について渡米して、帰朝したのだが、彼は幸いにしてボール一箇を持ち帰っていたから、さかんにそれを打ったものである、当時の護寺院が原だから時には草原の中にかくれて見えなくなる。そうすると敵の仇でも求めるように、みんなで血眼になって球をさがした。使用すること久しきに渡ると、縫糸が切れたが、それを何度も、かがって縫いつくろって使ったということである」と外来用具の貴重さについて述べている。

東京大学と大学予備門共催の運動会が、どのような目的で、どのような経過をとって開かれたかは明白ではないが、考えられる事は、当時はまだ衛生思想も低く、地方から箆を負うて都会に集る書生間には、

脚気、肺結核などの罹病者が多く学業半ばにして仆るものが比較的
 多⁽⁵¹⁾かったので、青年の健康、体力の増強ということが当然考えられて
 のことと思われるそれに洋行帰りの教授もあり、西洋文化の輸入と共に
 体育、スポーツ面においても、その影響を受けたことなどで、帰朝
 後間もなかった。服部一三大学幹事、ストレンジ御雇教師、菊池大麓
 教授、杉浦重剛予備門長等が中心となって開催の運びとなっただけ
 しい。

武田氏は「学校当局に如何なる評議があったか知りませんが、愈々
 明治十六年六月と言⁽⁵²⁾うに突如として……陸上競技の産声が」とこの間
 の事情を述べている。

実際運動会を開くことに決定してからの、ストレンジ師の張切りと
 活躍は大したものので殆んど彼一人の準備と指導と尽力でこの運動会が
 開かれた観がある。

6月に運動会を開くという事は4月下旬頃に決定したらしく、5月
 に入ると学生達もその練習をはじめ出場の準備をした。その様子を武
 田氏は細かく述べている。⁽⁵³⁾ それによれば、

「五月に入ってから、近々フットレースやジャンピングのやりっ
 くらがあるそうだが、という噂が立ちました。運動会だの競技会だの
 という日本語は、まだなかったのです。その頃の書生仲間の話の中
 の名詞や形容詞や動詞は大抵英語で学校の控所に貼り出される。今
 なら校友会の掲示ともいべきものは皆英文で書いてあったもので
 す。

“外国では自分よりも背の高いフェンスを飛び越す者があるとよ”
 “ハンドレッドヤードをテンセコンドで走る馬のような奴がいると
 いうじゃないか” “sixteen pound ^(ママ)もあるカンメンボウルを片手で
 forty feet も投げ飛ばすえら者がいるってことじゃないか” 誰かが
 外国教師や洋行帰りの先生にきいて来た話が、その晩の中に寄宿舎
 中の数百の目を丸くさせ、翌朝は早くも通学生全体の耳をつき破り
 ました。話は、それからそれと、きけばきくほど人間業とは思われ
 ぬことばかりで、天下の豪傑をもって任じていた何糞主義の三百健

児が、これがため幾たび血を沸かせ肉躍らせたかは読者の想像に委せておきます。」

と。当時外国の陸上競技の隆盛さと、驚異的な記録がこんな形で学生の中に流布吹聴された様子を伝えている。競技に使用する用具が外国から充分入って来ていなかったの、それを揃える事も大変だったが、予備門のストレンジ先生がいろいろ苦心して準備した様子を武田氏⁽⁵⁴⁾は、

「ある日の放課後、ストレンジ師は長い竹竿を五六本肩に負い抱車夫に何だか重そうなものを持たせて運動場にやって来られまして、この竹の棒はポールジャンプのポールで、どこかの材木屋で買求めここまで自分がかついできたのです。抱え車夫の話に、材木屋から学校へ来る途中異人さんが長い竹をかついで行くので何にするんだらうとて大勢ぞろぞろついて来て困りましたと笑っていました。車夫の持って来たものは、その頃でも既に旧式の鑄鉄製球形中空の海軍砲榴弾が大小一個宛と真鍮の玉に長さ三尺余の白樫の握り太の柄のついたものが一つ、これがすなわちハンマーなるものであった。ストレンジ師は、ポケットから輪切りの大根のようなものを二つ三つ取出して軽くこれを空中に投げますと、スルスルスッと真白な吹流しが折柄の風にさそわれてヒラヒラと波を打ちました“これはテープというもので太い方はウィンニングラインの目標に、細い方はハイジャンプやポールジャンプの飛越しに用いるもの、それに実際はこうして使用するのだ”とて“今日はいにく拵えておいた袋を忘れたから”とハンカチーフを二つに裂いて、その中に車夫が持って来たピストルの弾丸を一つつかみ宛包み込み細いテープの両端に結びつけて、新調の標高柱に吊り下げて示されました“外国は万事が進んでいるためジャンピング用にわざわざこんな真田紐のようなものまでできている”テープの付いた肌着など見たこともない当時の豪傑連の感想は可愛いらしいではありませんか。大道手品師を取囲んだような若武者は、やがて三方に別れて、ジャンピング、ショット、ハンマーのプラクチスははじまりました」

と。

ここで、ストレンジ先生が苦勞して集めて来た種々の用具を我れ先きにと使って練習しはじめたものの、各々自己流で、あまり見た事もない正式の陸上競技にとりかかったのであった。既に何年か前海軍兵学寮や、札幌農学校でのそうしたものは彼等には知る由もなかったわけだ。その珍練習振りは嘸かし見物であったろう、武田氏はこれを次の如く述べている。⁽⁵⁵⁾

「わしづかみに榴弾を引つつかんでベースボール同様に投げようとする名ピッチャーや老キャッチャーもありました。ブッテング（砲丸投は Shot-put という）はスローイングにあらず、投げんとはすべからず、足の裏と手の平を貫く最大の弧を描いて衝つ放すべし、との説明を承って我も我もとやってみる。終に源平に別れて落ちた所より投否衝き返して領土争奪戦をすることになった。勢よくとばすと火口の穴がヒュウと笛のように音を出すので皆が非常に興がりました。標高柱のピンを二寸も三寸も出して、これに例の真田紐を引っかけて飛んで体がさわってもテープが落ちなければよいものと心得て、おのがじし功名を誇っていた連中はストレンジ師よりフェアプレーの講釈をきかされ、ピンの長さはテープの幅限りと申渡されてオォオと頭をかいたのも愛敬でした。一方ハンマーの稽古は四方お人払いとあって投げた当人さえ両手で頭を抱えて骨稽に入交り立代りこの怪物と組打ちとなって引下る。当分は体を廻転せずに真向きにベンデュラムさせて手を放つことにし、ここでも源平の両軍互にヤッキとなってかっとなすわ、かっとなすわ。放課後の運動場、教授も学生も全校総出の大賑い、日を経るにつれて各技の would be winner の予評もついて運動場の空気がいやが上にも益々緊張して来ました。小使、炊夫の末までも銘々ヒイキ勇者を陸乍ら心にバックしてその勝戦を祈らぬはありませんでした。」

と。

練習中からこの第一回の大会が如何に熱気を含んで盛り上りを見せていたかを如実に書き表している。当時若い血をわかして各地から未

来の大員、学者を夢見て集った一騎当千の秀才のうち特に体力にも恵まれ腕に覚えのある若者達が、客観的記録により各自の力が数量的に明確に示される新しい外来スポーツを珍しがり興味をもったのも当然のことであったと思われる。期日が決定し、出場者の希望を募集したがその方法は次の如くであった。

「アスレチック・スポーツ挙行の日が定まりました。当日のプログラムも出来、出場者は各自志望の種目を選び、一種目につき金三銭、全競技に申込むものは金二十銭の申込金を添えてストレンジ先生の許に申込みという掲示が出ました。」

ここに述べられているように、学校の運動会に出場者から申込み金をとっている事は、現在の学校運動会とは全く違った方法であるが、おそらく当時の英国式の競技会の方式をストレンジ師がそのまま取り入れたのだと考えられる。そしてこれは運動会というよりは、アスレチック・ミイトという純粋な陸上競技会という考え方であったらしい。この競技会が、その後毎年行われるようになった場合、娯楽的・余興的種目が加わって運動会という形に変わって行ったわけだが、この第一回は全く陸上競技のみの種目であった。プログラムはストレンジ師が横浜あたりで印刷させたものらしく、英語で印刷され、その裏面には、審判規則が刷ってあり、みんなに一枚つづ配布された。そのプログラムは次のようなものであった。

(56)
Athletic Sports.

June 16 th. 1883

Programme.

- | | |
|--------------------------------------|-------------|
| 1. 100 yd Race. Trial Heats. 1 p. m. | 100 ヤード競走予選 |
| 2. Throwing the Cricket Ball. | クリケットボール投 |
| 3. 100 yd Race. Final | 100 ヤード競走決勝 |
| 4. High Jump. | 高跳 |
| 5. 220 yd Race. Trial Heats. | 220 ヤード競走予選 |
| 6. Long Jump. | 幅跳 |
| 7. 220 yd Race. Final | 220 ヤード競争決勝 |

- | | |
|-------------------------------|---------------|
| 8. Putting the Shot. | 砲丸投 |
| 9. 440 yd Race | 440 ヤード競走 |
| 10. Hurdle Race. Trial Heats. | ハードル競走予選 |
| 11. Throwing the Hammer. | ハンマー投 |
| 12. Hurdle Race. Final. | ハードル競走決勝 |
| 13. Pole Jump. | 棒高跳 |
| 14. 880 yd Race. | 880 ヤード競走 |
| 15. Consolation Race. | (負けた者同士の慰安競走) |

The Prizes will be distribute after the sports are over.

このプログラムは武田氏が、ずっと後になってから記憶をたどって書いたものなので多少番組の順序や種目に違いがあるようだと述べている。⁽⁵⁷⁾ 今村氏の「十九世紀に於ける日本体育の研究」⁽⁵⁸⁾の中には、明治18年6月6日の種目として Putting the Shot を「大砲玉抛げ方」とあり、Throwing the Hammer を「槌ノ抛げ方」Hurdle Race は「飛走」としてあり、前記種目の外に「来客競走」「教員競走」「一足競走」の三種目が入っている。そしてこの18年6月6日の競技運動会における、競技者心得として、

- 一. 競走ハドラノ音ヲ以テ発スルコト
- 一. 競走ハ長サハ埒ノ内規リニテ測ルコト
- 一. 各競技ヲ始ムル前ニ鈴ヲ鳴ラシムベシ
- 一. Pole jump. Long jump. High jump. Throwing the Cricket ball, Putting the shot. Throwing the Hummer ハ各競技者二度宛其技ヲ試ムルヲ許ス
- 一. 競技中故意ニ他ノ競技者ノ妨ヲナスモノハ当日中総テ他ノ競争ニ入ルヲ禁スベシ

と言う五ヶ条が記されている。

第一回の際のトラックや賞品の準備として、武田氏は、

「芝生の丸形の一周三百碼たらずのトラックが臨時に取設けられました。二間おき位に丸太の杭を打込んで、その上端に青竹が結びつけられました。ケガがあってはと竹のうらを元の太い所にさし込

んで人夫が熱心に丁寧に作ってくれました。トラックの幅員は四間程もありましたろう。ハードルは通学生控所のベンチで間に合せ、その他の器具は、ストレンジ先生が集めてきた前述のものが用いられました。このトラックの埒外便宜の所に椅子やベンチをならべて先生方や学生生徒の見物席といたし、Competitors は適宜の手近い樹木の下で身仕度をいたしました。幕一枚、旗一旒あるではなし、素より演奏所も来賓席も新聞記者席などありませんでした。唯々職員席の中央一段高く据えられた机の上に当日の賞品として、沢山の書物がならべられたのと、竹埒の内部に掲示用の黒板が一基据えられたのが場内の設備の全部で、御茶菓子一つお茶一杯出るでもなく処々にヒシヤクのついた手桶がおいてあったのみで他人まじらずの一家団らん、万事が質素簡単で一貫していました」

⁽⁵⁹⁾
と述べ、

当日の役員、審判等については、

「審判の役員は、ストレンジ先生自らアムパイア兼ジャッジとなって教授や上級生の学生が之を手伝い、スターターは大学幹事服部一三氏が、これまた学生の助手を率いて之をつとめられ、故理学博士菊池大麓先生が参謀長の格で全般の指揮監督に任せられました」

⁽⁶⁰⁾
と述べている。

服部氏が、原始的とでも申すべき大変振ったスターターを演じた様子については、

「スターターの服部幹事は、この時既に出発線につき、第一予選の走者を整列させて嚴重に石灰線の瓜先を檢分して、ちょっとでも出過ぎたものは容赦なく後へ引けと申渡す、成程これではなくては公正は保てぬと云う実施の教訓が、深刻に各自の頭に印象されました。“ヒイ、フウ、ミイと言って、自分が振り上げたコウモリ傘を下へ下げたらそれを合図に駆け出すんだ、その合図のない前にもしあわてて飛び出すと一ヤード後へすざらせるよ、解ったのう、まだ一時迄には一分少しある、落付いて”とはやり切った武者振りに息をはずませ胸を躍らす若武者達の気を落ちつかせておりました。一方決

勝線の準備如何にと見れば、ストレンジ師は着順判定に万が一にも
 錯誤がないようにと、各人の受持を定めて自らは一番難局に当ること
 にし、部署既になって、サア来い来れと待構えている。戦機將に
 熟して満場シーンとして人語を絶ち第一線に立てる走者の顔には今
 し決死の血相が現れて血の色さえも変⁽⁶¹⁾って来ました。」

と、最初のスタートの様子を伝えている。当時の新聞記事を調べて見
 ると、6月18日の「郵便報知新聞」の記事に「競伎会」と題して
 「東京大学にては、先頃より予備門、本費御雇教師ストレンジ氏の発
 起にて競伎会を設け教授外山、菊池、穂積、小島氏並に服部幹事、杉
 浦予備門長等が会幹となり、ストレンジが教授にて学生生徒の有志者
 を聚めて、高躍、長躍、抛球、抛槌、抛弾並に種々の距離を以て競走
 を試習せしめられしが、去る十六日午後には其大演習会を開き各伎^(ママ)
 にて優等の人々には、夫々洋書を賞品に与えられたり」
 と載っている。

当日の催しが、如何に時間が厳守され、競技の進行が整然と行われ
 たかは、武田氏の手記でもよくわかるが、これは、スポーツ精神を重
 視していたストレンジ先生の英国式の指導振りが如何に徹底していた
 かを物語るもので、競技進行の助手をつとめた学生達への先生の訓育
 の現れであった。学校としての正式の行事でなく、有志者の催しで、
 しかも第一回のこの競技会がこの様な形で開かれたことは、その後各
 学校でも開かれるようになった先例として非常なよい模範を見せた事
 にもなり大成功だったと思われる。

当時、数え年17歳で大学予備門二年生であった、スポーツマン武
 田千代三郎の純真な眼に印象づけられた有様の手記が詳細にわたって
 残されているので、少し冗長になるが、当時の風習やその競技会の精
 神を理解し得る重要な資料であるので以下関係深い部分を載せておく。

「ストレンジ師を中心として其の周囲を犇々として取囲んだ健児
 の一群こそ実に我運動宣伝の先鋒隊を承わったる勇猛な花の如き初
 陣の戦士であったのです」

とこの競技会を開くに当ってストレンジ先生に協力して、競技の方法、

会の準備、当日の進行、審判の助手等をつとめてくれた役員について非常に美しい讃辞を先ず贈って、当日の状況については、

「愈々当日となりました。前日よりの快晴で、アカシアの花の香を吹き来る風も心地よく、申分なき運動日和でした。

午前の授業を終えて、昼食もすみ、定刻少し前までに招集掛のスターターの助手は百碼の走者を Heat 順に数列に並べて発線の埒外に控えさせました。その手廻しの小気味よさには私共一同舌をまいてしまいました。“何でも今日はパンクチュアルでない者は集合に一秒でも遅れても斟酌なしにデスクオリファイ (desqualify) させられると言う事だが”と呼ばれて返事のない者のクラスメイトは四方八方駆け廻って探し歩きました。こちらでは“貴様もこの組か、悪い奴と一緒にされたなあ”とつぶやく美少年もいれば、彼方では“シメタゾ先ず先ず俺が一番乗りだ”と喜色満面もある。見渡せば、シャツ、股引を短く切り縮めた軽装もあれば、普段着の単衣物そのままの腕まくり、袴のももだち高くとって、グルグルと兵児帯にからげつけ脛毛のハバキに鉄よりも丈夫な足袋穿いて身を固めたのもあって、意気天をついて勇氣凛々開戦おそしと待ちうける。午后正一時を報ずる校庭の隅からのベルの第一声で決線には白いテープがスルスルと引かれると死せるが如き沈黙は岸打つ波の怒れるどよめきと化して来た。ストレンジ師の右手は高く挙げられて用意はよしと見てとった服部スターターが振り下す傘影一閃十矢均しく弦を離れて一時に起る大歓呼の音波を押破って大地をゆるがす鉄脚の轟き我国最初の競技会の幕はかくして切って落されました。一陣未だ競程の中に達せざるに二陣は早くも発線につき、一隊纔^{ワズカ}に去って一隊忽ち又到り流石の審判長も野帳記入に目を廻さんばかり、氣遣はれたる時間の厳守も日本健児の間には日常茶飯の一些事に過ぎませんでした。」

競技会の最初の短距離百ヤード競走の場景をこのような美しい文章におさめ、更に続いて投技の状態を、

「空に漂ふ雲あらば、そが上までも打込んで見しようものをと、

投げるは、投げるはクリケットの投手、絶えず落ち来る着痕に一々名を書き入れてはベッグを刺し込む助手の忙しさ、後より後よりと偉ら者に知られては、次々とおのが名札を引抜かるる天下国家の苦笑い、場内に起る関の声に何事ぞと外柵には忽ち鈴成りの人の頭、板塀に穴のあくことその数を知らずでした。一巡済んでその測定の嚴重さ。百碼の発線には走者が既に並び終って決線にはテープさえ白く光っている。理学部長と土木工学の学生はあとに残って投距離の実測、弓弦の如くに緊張せられたそのテープには、よしや時のフラクション (Fraction) たりとも我等に誤測ありてはとの赤誠の発露もありありと見えて、ますらをが命をかけての腕競べ此くてこそ至公至正とは言うべけれ、神と言えども此の上には出でじと観る者感嘆せざるはあらず。百碼の決勝は瞬く間にすんで、次ぎはハイジャンプの競合です。審判のスタッフは、この技に用のある者のみを留めては他は悉く退場させた。争者は記帳の順序に蹲居させて一切佇立を許されず起てるは審判長外両三名でそれさえ上席の方には背を向けず展望を妨げまいとの用意の程、しかるべき筈は筈なれど、流石に奥床しくと行き届けるもの哉と観衆又々感服す。」

この行届いた競技役員のマナーは、現在に於ける各スポーツ大会でも範とするに足るものであろう。当時ストレンジ師がここまで学生を指導訓育していた事は実に驚嘆の外はない。一方高跳の方はどのようなであったか。

「足ならしにとの、3呎6吋より、4呎までに、早くも打死せる者5~6人、屍は即時埒外に移され、明いた席は順々に詰める。4.4→4.5と次第に死傷を増して、残るはバッタの如き長脛彦3~4名、体の煽りだけにても落ちそうに見ゆるテープの危さには、観る者先づ手に汗して息を詰む。

220碼の選抜も手早くすんで次は唯今言うブロード・ジャンプでした。ストレンジ師、菊池、服部の三先生以外には何れも厳に佇立を戒しめ、人足二人丁字形の土均しを手にして砂地の西側に蹲まる。砂煙一過、砂面只見る平坦元の如しで、流石気転のきいた江戸の火

消しと人夫までも観衆を感服させた。この時ストレンジ師の審判長振りとは見れば、手頃の竹ムチを手にして砂面を凝視し、飛び来る見向きもやらず、かくしてこそかくしてこそと人皆嘆称せざるはなし。220 碼の決勝もすみ、ショットの審判もクリケット同様、嚴重の丈量(測定)があつて、これが済むと440 碼でした。予選に分けずに何でも3~40 人一度にワッと飛び出す途端に押されて打倒れる者数知らず、されども屈せず撓まず後を追っかけて一人残らず決勝に飛び込み“ころびさえしなかつたら無論我輩のものだったのに”と口々に笑い興ずる真の無邪気さには兼ねての訓への“善き競技者たれ”がここにも著しく認められました。

次がハードルの選抜で、十箇所のハードルは人夫と学生の手伝いにて瞬くうちに整頓せられ次から次ぎと数番の予選も従隊突貫の早さで忽ちに片付きました。この間ハンマーの天狗連は今日こそと日頃練磨の腕を扼して場の一隅に陣取ってハードル勝者の記帳終つてストレンジ師が挙げる右手を合図に早くもその一弾がとばされた。一発毎に距離をはかる助手の学生は砲弾投げの時と同じくテープを拇指と食指との間に滑らせて、弾痕の中心に拇指の爪先をあてて、シッカと押えて読み声を出さず、次弾前弾に及ばずと見れば振向きもせず前に押えた寸尺を読み上げ、次弾速しと見れば馳せ行つては之を計る。悠々として又敏活に無益な事には露程も労力も時間も空費するものかとはと落付払った其の面構え、初めての人とは思われずと、ここにもかしこにも驚嘆の声が起りました。

ハンマーの投返し後、疲れ果てて、リレーの制を案出しました。ストレンジ師は暫くは笑つて見て居られましたが、まだるこきに茶目を出されたのか、その槌我にまかせよとばかり引摺んで一と振りもせずそのまま飲みさしの煙草でも投げるやうに無雑作に投出されたそのハンマー飛ぶは飛ぶは、キリリッと見上げるばかりの空を舞つてやがて選手溜りの彼方に地響き打つて柄までも埋まるかとばかりに突立ったり、右往左往に散乱する争者、呆気にとられて呆然たる観衆、我に帰つてのその大喝采は何時止むべしとも見えなかつた。

ストレンジ師は顔赤らめて双手を振りつつ之を押留め由なき戯を為したりとばかり、此の日はそれ切り止められました。」

ストレンジ先生は、外人としてはそれほど大きい体格ではなく、身長 1 m 74 位であったが運動は何をやっても万能選手、ハンマー一つ投げても、速く学生達の及ぶ所にあらず以上の如き有様であった。

「ハードルのペッチは蹴倒す者は無論ありませんでしたが、慣れぬこととて足取りの都合わるくやり場に窮して止むなくその上で曲芸を演じ観衆を喜ばして賞品を受けた仕合せ者もありました。

ポールジャンプは今と変らぬ当日の呼びもので、時刻は早く、緩っくりやれと行う者も見る者も悠々閑々と落付き払う。此の技は我国古来より敵城の木戸に檜の力に乗っ掛ける戦術の一つとして若侍などが折々はケイ古した事がありましたものか、地方によりては其の余風でもありましたろう一般に子供の遊びとなって居た処もありまして、その頃の書生中には堪能なものも少くなかったのはじめから仲々よくとぶ人が多かった。高さ八尺の標柱一杯を飛んで始めてとして意外の好成績を挙げました。」

我が日本の棒高跳は三段跳と同様一時はオリンピック大会でも好成績を挙げ世界の注目を浴びた種目であるが、敵城侵入の武術の一つでもあったという伝統からか、第一回競技会からも予想外のよい記録を残したと述べてある所はこれ又大変興味ある所である。次には長距離競走について、

「半哩の大競走は“健康に害あり”“心臓を損うべし”など憶病論にも頓着せず出走者約五六十名、敵方に突貫する実方阵の如くドッとばかりにスタートしました。忽ちバタバタと打重って打倒るるは雨と降る矢丸に中った猛卒の如くミリミリッと音して竹埒の中ころげ込むは好き敵と引組んで両馬の間にどっと落つる勇将にさも似たりと言う壮絶の観を呈しました。中にも唇をかみ切り膝頭を摺りむき、血みどろとなり乍らもめげず臆せざころんでは起き、すべっては立ち落伍は恥辱と駆け通しましたので、しまいにはドコが先頭か後尾か分らぬ程の大混雑、今は大阪住友家の重鎮鈴木左馬也君

が我国半哩勝者の筆頭として重く勇名を大学運動史に遺されました。この競技までの第五位を占め得なかった面々の為に一周の慰め競走と言うのがあって、この日のスポーツは滞りなく大成功を告げてあれ丈の長いプログラムも正味四時間とはかからず五時少し前にすんでしまいました。たしか番外か又は番組中に職員競走があったように覚えてますが、残念乍らハッキリとは覚えていません。一同は賞品陳列棚の前に円陣を作りました。ストレンジ師が組々に名を呼び上げる毎に破るるが如き拍手を浴びつつ加藤総理の前に進み出て賞品を受取りました。全部英書で辞書もあり、詩集や論文集、ノベルズやトラベルズもありました。私もたしかハンマーの二等でジュウル・ベルタの八十日世界一周と、何か五等でポケット本のアディソン伝を貰いました。

賞品授与式を終わって一同は誰かの音頭で英国風の Hip! Hip! Hip! Hurrah! の三唱が幾度か繰返されてこの日のスポーツは成功と満悦と祝賀の裡に芽出度く閉会を告げられました。

万事早手廻しとあって、授与式の間に椅子やベンチは何時しかその影も見えず、トラックの埒も大方は既に取払われて居りましたのには驚きました“オイオイあとをよく片付けてくれ、天狗の鼻のかけらがそこら一面に落ちてるからみんなよく拾っておくんだよ”と誰かが人夫をからかって一同を笑わせました。」

このようにして、全くはじめての運動会が、ストレンジ先生の勝れた指導監督のおかげで、実に整然と、時間もよく厳守され、用具の出し入れも小気味よく素早く行われ、盛り沢山の種目が僅かの時間で成功裡に終わったことは現在各学校で行われている運動会に決して見劣りしなかつたようである。学生達もこうした新しい催しに大変興味をもち熱心に全力を尽く嬉々として参加した様子が目に見えるようである。更に武田氏はこの日の運動会を総括、批評して次の如く述べている。

「第一回アスレチックミイトの活きた教訓」と題して、「我国における初めての運動会は俄の思いつきで、先例もなければ経験もな

く、役員の打合せも足らず、争者の練習も訓練も不充分でありましたが、なおよく前記の如くに始めとは思えぬ程の大成功を勝ち得たるのみならず、あとへ遺した有形無形の教訓は実に測り知るべからざるものがありました。

私は当時やっと十七歳の小僧でした。素より深く事物を考察するの知も周密に観察するの明もあった筈はありませんが僅かにこの一回のミイトに参加して、先生方の教訓と指導とのうちに何とも名づくる事は出来得ませんでした。深刻に私共の脳裡に印象づけられた何物かがあった事を感じました。口では言い得ませんでした。心に銘じて忘れることのできない或物にふれたように思いました。その感想を述べてみましょう。

第一に私共に要求されました事は、“立派なスポーツマンたれ”ということでした、これを具体的に申すと、

- ① 定日、定刻を厳守せよ、……競技申込の期日に遅るる者あらば準備は為にその先づ第一着よりして支障を生ずべし、相談会に遅刻する者あらば全員為に時を失い気を腐らすべし、定刻既に過ぎて争者未だ来らざるが如きことあらばスポーツのプログラム是一片の廢紙に過ぎざるべし、苟もこのためし易きをよくせざる者あらば煩勞多くして諸事挙らず故に擯斥して断じて事に与らしめずと言うのです。
- ② 男子事に当るよろしく奮闘力戦斃れて後やむの概あるべし、敗れて負惜みするは懦夫怯者の亜流のみ。
- ③ 技を闘わず須らく公明正大なるべし姦譎（カンケツ……いつわりあざむく）早劣は丈夫の恥づる所なり。
- ④ 審判に服従せよ（Don't dispute the umpire）人は神に非ず、裁定よく当を得ずと信ずべき理由ありとも敢てこれを議せざるは競士の大をなす所以也。
- ⑤ 技を楽しみ、己よりも強き者、優れたる者に師事せよ（Enjoy the game）之を敵視するは蛮人の勇而也。
- ⑥ 賞品は記念物のみ、之を獲るを目的として技を公衆の前に演ず

べからず。

- ① 儉はスポーツマンの第一信条たるべし、人の金品の憐みを乞うて迄も美服し美食し、車行せんと欲する勿れ。
- ② 技を練る須く学芸の余暇を以てすべし、之に耽らば心身共に疲憊せん、学に忠なりという可からず凡そ競士の練習場に立つや銳意努力一気に其技を練って速に去るべし、久しく留まらば気倦み力弛みて却て練習の功を空しくす生理の識を利用して技の上達をはかり衛生の法を察して堅く飲酒喫煙を戒め、筋骨を鍛え心身を養い以て各自の全能を發揮せよ。過労は人をスティル (Stale) たらしめ、暴食は人をステュピッド (Stupid) ならしむ、曰く克己、曰く節制、曰く制慾、曰く忍耐、曰く勇敢、曰く沈着、海浩にして機知、縦横明快にして氣宇雄大、凡そ此の如きの氣質徳性は天がスポーツマンに授与する至高至貴の賞品に非ずや、戦い敗れてよくコンソレーション (慰安競走 Consolation Race) の走者たるもの又何ぞ其の数奇を嘆ずる愚を学ばんや、威容を正しうし品格を重んじ誓って市井売技(マ マ)の徒と同一視せらるるなかれ、
- “Be you own myrter; be you own champion. Do what is right; what is just Do about all, what is noble!”

以上は武田氏が、当日の運動会についての感想、批判をずっと後になって記憶をたどり乍ら述べたもので、当時入ってきた新しいスポーツとその競技会のやり方について、若人として感じたことを卒直に書き記したものである。

武田千代三郎⁽⁶²⁾は、慶応3年(1867)4月24日、福岡県柳河に生れ、明治15年大学予備門に入り、22年東京大学法科を卒業、在学中は陸上競技、漕艇等で活躍しストレンジ先生の指導を受けた師の愛弟子の一人であった。卒業後は官界に入り、明治32年に、33歳で秋田県知事を拜命、その後山梨、山口、青森の各県知事を務め大正2年退任、更に神宮皇学館長を経て、大阪高等商業学校長を大正7年より昭和3年まで務めた。余技として学生時代に鍛えた技倆を活かし、陸上競技のコーチャーとしての名を高からしめた。また大日本体育協会副会長

としてもその令名が高かった。明治 37 年、「理論実験・競技運動」なる大著を発行し、競技書に乏しかった当時権威ある斯界唯一の宝典として多くの人に珍重せられた。⁽⁶³⁾更に同年、少年のために競技運動を平易に解説したポケット型の小冊子「心身鍛練・少年競技運動」を出版した。武田流のコーチ法は「脂肪抜き」と称した一種の鍛練主義で氏は常に「すべての事は何のくそという気概で勇往邁進しなければならぬ」とか「トレーニングをなしたる者の優勝を占めるのは脚力ではなくして頭脳の力によるのである」「スポーツのできる人でなくて、スポーツもできる人物を社会は望んでいるのだ」という持論をもって⁽⁶⁴⁾いた。昭和 7 年 (1932) に歿した。この武田氏が恩師ストレンジ先生を思い出し、ス師がその技術的方面のみでなく、精神面に力を入れて指導された事を強調しながら第一回競技会の様子を、武田氏も人生の大半を過し、スポーツ批判家としても一家言をもつようになってから、この稿を書いたわけで、明治 16 年と言えばストレンジ先生は 29 歳で最も脂の乗り切った時代であった。然しス先生は決して体育専門家ではなく本務は英語の教師であった。余技としてのスポーツ指導にも本腰を入れて熱心に事に当たった英国紳士の面目躍如たるものがうかがえる。もう少し武田氏の手記を引用してみよう。

「緑蔭に汗を拭ふ間にも、更衣所に足を洗うひまにもかういう話が誰いうとなく言いかわされて、スポーツマンシップなる説明しにくい言葉の意味が何時とはなく不知不識の間に私共の心に深く染み込んでしまったのであります。」

スポーツの真の目的は、精神の鍛練を重視することだという事を絶えず強調していたことがストレンジ師の精神であり、それがだんだん学生の心にしみ込んだようであった。

この競技会当日もトラックレースの時、自分を追い越そうとした相手に不正を働こうとした競技者を非難した場景を次のように記している。「殴ぐれ、殴ぐれ」観衆は総立ちになって憤怒の声を振り立てました。中には罅を越えて飛びかかろうとする者もありました。「馬鹿野郎、殴ぐれ、殴ぐれ」「大学の恥辱だ、我れわれの面よごしだ」そ

それはそれは大騒動でした。審判の助手が飛んで来て「何をするっ、外へ出ろ」と袖を掴んで引立てて行きました。その時の光景を想い出しますと今でもゾットする位です。三百健児が何れも血相をかえて怒髪天をつかんばんかり、殊に平素物静かに見受けた先生達が最も盛んに憤怒の声を発せられたのには恐ろしい様な感じに堪えませんでした。この学生は深く己の非を恥じて大学在学中再び競技場の芝を踏みませんでした。更に続けて……私の級友にもう一人よく走る者がありました。が断えず後をふりむく癖がありましたので「狐、狐、引込め、引込め」とみんなからひどくからかわれました。賞品を受けとる時迄も「ソラ狐が出たぞ」として大拍手を浴びせられましたので、本人も痛くこれを気にして次回には首尾よく名誉を恢復いたしました。当日の失敗事件は、前記の反則一つ丈であとは誠によくフェアプレーが行われました。私はこの事件に依りて我が大学の上下を通じて如何に正義の観念が強大であるかを知り当然の事とは申し乍ら何だか心強く頼もしいやうな感じを禁じ得なかったのです。と競技中の反則はきびしくこれを責め、競技は正々堂々となすべき事を強調した気風を伝えている。

以上、東京大学の最初の競技会を、武田氏の記録を引用して細かく述べたが、これが後の全国各学校の運動会の先蹤となり、各種スポーツ大会のあり方、運動会の方法、運営等に大きな影響を与えたことは言うまでもない、この中にストレンジ師の身についたスポーツ精神、熱意等の現れが準備、進行、役員の態度などを通して観衆、学生に好影響を残したことは最初の催しだけに重要で幸運であった。

この様な会の開催に当って、米国流なら、無暗に多数の役員をおき、人のために役を設け人が多すぎて会務が渉らず、いわゆる木戸御免の役員が得々として会場を歩き回るのに対し、ストレンジ師のとった英国流は、責任ある少数の熱心な手利きの役員によりテキパキと好成績を挙げ得た事もよい先例を残してくれたのであった。

明治初期日本スポーツの導入に貢献した人々

明治の初期，日本に外国スポーツが導入されるに際して，その紹介指導に尽力してくれた人々には，帰朝の日本人，来朝の外国人等幾多の人達があった。

例えば，陸上競技では，前述の如く明治7年海軍兵学寮の御雇英人⁽⁶⁵⁾教師エドウィン・シントジョン，ウィルリエム・シブリン⁽⁶⁶⁾，ウィルリエル・ヘンリー・チップ^(ママ) (Chipp, William H. 在日 1873—1879 海兵寮船具運用⁽⁶⁸⁾)等の海軍士官，また明治11年に札幌農学校の米人御雇教師ホイーラー⁽⁷⁰⁾ (William Wheeler)，ペンハロー⁽⁶⁹⁾ (David P. Penhalow)，ブルックス⁽⁷¹⁾ (William P. Brooks)等があり，野球ではホレース・ウィルソン⁽⁷¹⁾ (Horace Wilson)，E. H. マジエット⁽⁷²⁾ (東京大学予備門米国教師，明治8年5月雇入，11年7月15日解任)，アルバート・ベーツ⁽⁷³⁾ (Albert G. Beats. 1873—76の間開拓使仮学校の教師で自国から持参したボールとバットを所有して学生に野球を指導した)，平岡熙，木戸孝正⁽⁷⁴⁾，牧野伸顕，久原躬弦等があり，テニスでは明治11年来朝のリーランド⁽⁷⁴⁾ (George Adams Leland 1850—1924)，ポートではストレンジ⁽⁷⁵⁾ (Frederick William Strange 1854—1889)，ノット⁽⁷⁶⁾ (Knott, Corgill Gilston 1856—1922)，アベスト⁽⁷⁶⁾ (工部大学の外人教師で，ボートを一隻所有していて，学生にも使わせ指導した)等，スケートでは，前述の札幌農学校のブルックス等があり，また明治6年には，英人教師ライメルジョンス⁽⁷⁷⁾が工学寮⁽⁷⁷⁾ (後の東大工学部で当時は赤坂にあった)においてフットボールを紹介し，その翌年には，この工学寮で，スコットランドより招いた教師からホッケー⁽⁷⁸⁾ (スコットランド名ではシンティー⁽⁷⁸⁾ Shinty と呼んでいた)の手ほどきを受けている。

このように新しいスポーツが導入されるためには多くの紹介者の尽力が必要であった。

これらのうち，明治初期日本スポーツの黎明期の最高の功労者として何といっても，フレデリック・ウィリアム・ストレンジ氏を挙げなければならない。

ストレンジ氏について

氏の来朝までの略歴

ストレンジ (Frederick William Strange 1854—1889) が日本に來朝した以前の経歴は十分明らかではない。また文献によっても多少の差異が見られる。⁽⁸¹⁾ 1854年イギリスのデボンシャー州 (Devonshire) に生れ、⁽⁸²⁾ イートン校 (Eton College) を卒業し、⁽⁸³⁾ 明治8年、菊池大麓の帰朝の際氏に伴われて來朝したというのが正しいようである。

菊池大麓は1855年生れでストレンジよりは一歳年少であり、明治3年二度目の渡英でケンブリッジ大学に留学したのであったが、ストレンジと、どのようなきっかけで知り合ったかは明らかでない。しかし彼の人物を見抜いたのか、日本に連れて帰れば役に立つと考えたのか、⁽⁸⁴⁾ 兎に角明治8年ストレンジ氏が21歳の時、日本に同伴して帰った。菊池大麓がケンブリッジ大学数学物理学の留学が終ったのは明治10年であるからおそらく留学の途中で帰って来た時の事であろう。

ストレンジは明治8年4月に国立東京英語学校の外人教師となり、⁽⁸⁵⁾ 東京大学予備門、第一高等中学校の英語教師をつとめた。武田千代三郎氏の言を借りれば、

「諸生に接すること頗る親切でありました、剛健であった為でもありましようか。精励恪勤在職十七年（明治22年7月在職中急病にて死去……この事については後に詳述する）間會て一日も休んだ事がなかったそうです。厳格な先生は兎角生徒に好かれぬものですが、師は何人からも畏敬され欽慕されておりました」

と述べている。

ストレンジ氏はイートン校時代、ボート、陸上競技、水泳、野球、馬術等多くのスポーツをやった万能スポーツマンで特にこのうちの前三者は最も得意とする所であつたらしい。その上イートン校の教育方針が完全に身につけて、スポーツマンとしての精神を充分体得していたので、指導に当っては勝敗を度外視してスポーツの精神を教育する

ことに主眼をおき、立派な人格者をつくることを眼目とした。日本が、外来スポーツ黎明期にこのような指導者を得ることができたのは実に幸運だったという外はない。

ストレンジ先生の授業振り

氏の本業は英語の御雇外人教師ということであった。然し内に秘めたる宿望をもって常に勉強していた。それは法律学の勉強で、武田氏は次のように述べている。⁽⁸⁶⁾

「師は私が大学におりました頃より（明治 18 年前後）法律学の研究をしておられました。バリスタア（Barrister）の試験を受け法科大学の教師に転じたいのが師の宿望であったのです。それで絶えず法科の外国教師について研鑽を重ね、また独乙人の法科教師と英語と英語の教えっこをして居られました。私が形見に貰いましたノートブックの中に、スミス氏契約法を抜粋したのが一冊あります。これが師の遺墨の中で筆致の最も美しいものでありました」

と。師は英語の教師で傍ら法律の勉強を絶えずしていたということであるが、その余暇を利用してスポーツを楽しみ、学生にも熱心に指導していた。本稿ではその事について述べるのが目的であるが、師のスポーツ熱心について、三宅雪嶺博士（本名は雄二郎、明治 10 年に開成学校に入学）⁽⁸⁷⁾は

「外国流の運動は大学で数学受持のウイルソンが世話したこともあるが、それよりは東京英語学校、後の大学予備門の教師ストレンジというのがあり、これが熱心に教え、そこで学んだのが後に大学に入って運動を盛んにしたことになる。このストレンジは顔が一種特別で、名詮自性（名はその体を表すこと、名は自らその性質を表す事）人にストレンジ（strange 奇怪）と呼ばれ、自らストレンジをもって任じておったほどであり、本式の課業よりも外国流の運動を日本に適用したというストレンジな功績がある。初め開成学校が開校した頃、クリケット、又はベースボールが行われ間もなく優等生が外国に留学し、総じて沈滞の色を呈し、尚幾らか運動場で遊ぶ

のは前の惰性とも見えたが、後に大学予備門から年々新生があり、更に運動が盛んになった。世間一般の気風に伴いもしたがストレッチに教えられたところがあずからぬとしない。」

この話だけでもストレッチ師が如何に熱心に外国スポーツを指導し、大なる影響を与えたかが了解できるであろう。

また、明治文化発祥記念誌（大日本文明協会、大正 13 年 12 月 7 日発行）の「明治文化に寄与せる欧米人の略歴」編の 11 頁に、⁽⁸⁸⁾ “ストレッチ (Strange) nationality はアメリカ, works は “physical training — 予備門, 体育” としてある。これによれば、職業は大学予備門の体育教師であったことになる。スポーツに熱心で、学生をよく指導したり、競技会、ボート大会の運営等を一手に引き受けていたので、これが本業と見られたのであろう。

さて氏が本職の英語の授業をどのように行ったかについては、武田氏が入学最初の授業を大変印象深く記録している⁽⁸⁹⁾ので、それによってよく知ることができる。

「私が一ツ橋東京大学予備門本費第三級に入学を許されましたのは、明治 15 年の 7 月、数え年 16 歳の時でした、当時大学の総理は加藤広之先生、幹事は服部一三先生、予備門長は杉浦重剛先生^(ママ)でありました。9 月 11 日生徒の心得べき廉々の中渡させられ教科書の借受けやらで、愈々その翌 12 日から授業を受け初めてストレッチ師の教室に列しましたのはよく覚えておりませんが、その日か又はその翌日のことでしたらうと思います。

出欠簿の氏名を順次に読み上げながら一人一人穴のあく程私共の顔を見詰めてニコニコしておられました。師はやがて点呼が済むと直ちにチョークをとって黒板の上にスラスラと Do you understand? Important. Commit to memory. など、と実に美しい見惚れるような文を大書しておいて長さ四尺にも余る籐の鞭を振上げ、ピシャリ、ピシャリと二つ三つ黒板を叩いて、アッテンション、ボウ、ザイシャ ナウ……何とか何とか英語に似たわからぬ言葉で立て板に水の如くにしゃべり始めました。一同呆気にとられています

と、前列の右翼を占めていた古参の生徒が、師の言付けで、起って私共のために通訳の労をとってくれました。ピシャリと黒板を叩いた直ぐ後のが、Attention! Boys! だそうで、それから、これは重要だからよく覚えておけという時には、イムボオタントだのコミットトウ メモリイだのと言う言葉を使う。解ったかときく時には、ドウ ユウ、アンダスタンドと言うから、その時分らぬ者は、no と言へと言う事などを、これから先きの心得のために黒板に書いて示されたのだと言う事でした。

何しろその頃の英語には、正則だの変則だのと言うのがありまして、私共がそれ迄に教わった先生達には、この変則即ち蘭学から英語に化けた方が多かったので、ヅウ ユウ オンデルスタンド流に教えられて来た上に、この日生れて初めて外国人という者に出っくわし、はいり込んだ部屋からが何となく変に脂臭いやうな臭がしていた位ですから面喰ったのも無理はありません。

“夷狄め、けしからんことを言いくさるぞ、おれ達をボウイズだと、乍弾、天下国家を以て任じてる我輩をつかまえて、ボウイズとは何だ” 私共より四つ五つも年上の者がこう言って所謂切齒扼腕して憤慨はして見たものの……お断りしておきますが、その頃はまだ昔風の学問が盛んであったために地方より大学へと志してやって来た書生の中には、漢詩、漢文でも作らせようものなら、今日の国漢の先生もトテも及ばない程の人が多くおりました……。さて肝腎の英語ときては、向うの赤ん坊にも及ばないのですから致し方ありません。“しかし、アッテンション ボウイズは仕方ないとしても、その後の、オウロビユウ たあ何の事だろう、オウロビユウなんて英語があるかい、何ッ、all of you と書くんだと。ウソつけ、そう書けや オウル オフ ユウと読んだんだ、何がウソだ、本統なんんか、オイ誰か、スト公にきいて見ろ。スト公が日本語を知ってるなら俺が直かにきいて見るんだがなあ……”，天下国家を以て任じていた流石の豪傑も英人の教室では……あわれ一言もなかったのです。「スト公」とは上級生よりの申し伝えて、私共がまだ師の顔さ

え知らない内から覚えてしまった渾名です。嗚呼スト公忘れ難きそのスト公、40年前始めて私共の鼓膜を破ったその純英国アクセントのオウロビユウ連は最後の学成り業遂げて朝に野に学界に南海に各々志を得て時めき栄ゆる者今やまさに千を数うる程となりましたろう。想えば遠い昔となってしまいました。」

この武田氏の手記は、大正12年のことでそれより40年前の懐古談であるので、明治22年7月5日に35歳という働き盛りで惜くも急逝した尊敬する恩師との最初の出会いの想い出をこのように感慨深く語っている。更にその授業に熱心だった事については、⁽⁹⁰⁾

「Attention! Boys! you are very dull on monday! チュッ、チュッ(舌打ちの音)ピシヤリ, you stupid boy! How often must I repeat it to you! “A noun in singular must have an article before it”? 日々のように代る代るどなりつけられて、この冠詞使用の第一則を脳裡に深く刻み込まれたのは、独りかく申す私のみではありますまい。

師は皮肉な悪口の名人でした。その頃の書生は今日の学生と違い銭湯へ行くにも着流しはせぬ位に威儀品格はやかましう言うておりましたが、髪も髯も伸び放題、破れ袴にちんばの下駄というようになりふりも一切構わず一心不乱に勉強するという風でしたから、初めて大学に聘せられて来た外国人教師などは非常に驚いて薄気味悪く思っていたようですが、師は長く我が書生に接しておられましたからそんなことは何とも思わずに時々私共をつかまえて、ヤレ生国は丹波かの、頭によく鼠の巣をくわぬこと、だのとてからかって面白がっておられました。徳望のある先生は得なもので私共はかく罵倒せられても、それが却って嬉しいような心持がしたものです。師は筆跡の極めて見事な人でありました。黒板にすらすらとなくり書きした其の文字の美しさは、むぎむぎと消してしまうのが惜しい位でした。予備門が高等中学と変ってから師は生徒に和文英訳を練習させる為に苦心して短い興味ある英語の一口ばなしの如きものを集め、その頃生徒であった伊藤幸次氏をして之を和文に翻訳させこの

翻譯文を課題しては生徒に英訳させて居りました。師の丹誠になれるこの短文集数冊は師の死後未亡人より形見として寄贈を受け、今でも手許に所蔵しております。明治 22 年にその頃の第一高等中学校の一学年を卒えられた方までは必ず一度はこの文集の中から課題させられた事とおありの事と存じます。スリを捕うる新工風、ペントリロキイの鼻祖、連隊長軍鼓を修理す、こう言う話は定めてこれ等の人々の記憶に新たな事と思っています。」

ストレンジ先生の授業は、なかなか厳格であったことは前にも一度触れた筈だが、木村毅氏は「日本スポーツ文化史」で、次のようなことを述べている。⁽⁹¹⁾

「堺利彦の“売文集”の中で末延直馬という人物の思い出を述べる条下に“末延君の特色はどもる事であった。そのくせ口三味線の義太夫など、よくうなっていたが、教場の論講の番になると、膝を叩いて拍子をととり乍ら四苦八苦してやっているが、気の毒にもあればおかしくもあった。ストレンジ先生が出席簿をつける時など、同君はプ、プ、プ、プといて、しきりに苦しんでいるので、見るに見かねて隣席の者がプレゼントの代言をしてやると、自分で返事をしないのは不都合だといって、ストレンジ先生が怒った事がある」と、出席を厳格にとった様子が述べてある。

ストレンジ氏の著書

ストレンジ先生は、明治 16 年 6 月 11 日に、丸善書店から「Outdoor Games」という書を出版している。⁽⁹²⁾日本スポーツ文化史には

「私はまだ見た事がないが、ストレンジ教授は明治十六年ごろに水泳に関する著書があって、これは明治における水泳の専門書の第二冊目である。またその翌年の明治十七年に野球の書を著述している。これは日本で最初の野球書だとかいう話だ。大阪の田尾氏（このコレクションは西宮図書館に移ったとも聞く）の蔵書か、東京なら斉藤三郎氏などの書架に珍藏されてはおるまいか。以上の事から推しても、ストレンジ教授がわが水陸両スポーツの恩人であること

が分る」

と述べてあるが、多くの体育、スポーツの関係書、当時の新聞などを見てもこの水泳と野球に関する著書のことは書いてないし、国立国会図書館にも秋父宮記念スポーツ図書館等にも蔵されていないので、このような著書はなかったのではあるまいか。「Outdoor Games」は、国立国会図書館及び秋父宮記念スポーツ図書館に貴重な古めかしい一冊として蔵されている。55頁の小冊子だがその奥付には、明治16年6月11日版權免許、同日出版、定価金貳拾五銭、著者東京大学予備門御雇教師英人、エフ、ダブリュー、ストレンジ、出版人、府下平民丸家善七とある。

この著は、日本においての最初の競技紹介の書であり、陸上競技の外、多くのスポーツや遊戯等の方法、規則等が載せてある。氏が当時の日本の若人、学生に接して見て、このような書を書かねばならぬ心境になった理由や必要性をこの序文から要約すれば次のようなことになる。

1. 長年日本の青少年に接して見て、(氏は明治8年に日本に来了ので、この書の出た明治16年まで既に8年間、英語教師として学生に接して来たが、この間は、京浜在住外人達で作っていた倶楽部に入出入して自分ではスポーツを楽しんでいたが、学生には指導した様な記録がない。武田氏もこの事については「師が大学のために運動の鼓吹や指導を始めたのは明治16年からの事である」⁽⁹³⁾とはっきり述べている。おそらく大学や東京英語学校“明治10年からは大学予備門と改称”には場所や施設、用具がなかったので何とも指導するすべもなかったのであろう)学生、生徒達は運動場で運動をあまりしないし、やるべき戸外ゲームというものを知らないのだということがわかった、そこで何とか戸外ゲーム、スポーツを紹介指導してやらねばという決心を固めたい。
2. 身体運動というものは単に身体健康という一面的な目的でなく、精神教育上にも欠くべからざるものであるという堅い信念

をもっていた。

3. この事はギリシャの昔から、医師や哲学者等も信じていたことで、心身は分離できるものでないから、身体を通しての精神教育が重要であると考えた。
4. 新鮮な空気の中での戸外運動が健康上大事であり、それは精神にも好影響を与えるのである。
5. 健康を保つ為の運動の分量は、その人により様々で、各人の適切な運動量をよく知って行うべきである。
6. 日本の青少年はもっと身体運動をしなければならない。そのためにこの本を書いたのである。

以上の如きことを、その序文で述べられている、この Preface をそのまま次に載せておく。

OUTDOOR GAMES

By

F. W. STRANGE

Preface

An association of many years with Japanese boy, has convinced me that games suitable for the playground are almost, if not quite unknown to the youth of Japan. This may be and most probably is the reason, why school-boys in this country make so little use of the play ground.

There are two kind of exercise, Mental Exercise and Physical Exercise. Scholastic Education is mental exercise, thought directed to any object is mental exercise; gymnastics and all kind of Outdoor games constitute physical exercise. In ancient times the Greek doctors and philosophers believed that mental and physical exercise went together. One of these doctors, Asclepiades by name, declared that health could be preserved by physical exercise alone, he also said that if good health

were lost, it could be restored by physical exercise. He made a public declaration that he would give up all claim to the title of doctor, if he should ever fall sick or die but by Violence or extreme old age. He kept his promise, for he lived for more than one hundred years, and then died from the effect of an accident. There is no doubt that Japanese students take a sufficiency of mental exercise, but they do not take enough physical exercise. Fresh air is a part of a human being's daily food and by far the most important part. The purity of the blood depends chiefly on the purity of the air one breathes. Out-of-door the air is much purer than the air indoors. Dr. Oswald says: "The beneficial effect of outdoor exercise is not limited to the respiratory organs: their quickened function reacts on the nervous system, and through the nerves on the mind; true mental and physical vigor in any form can be maintained only on a liberal allowance of life-air; those who feed their lungs on miasma become bare existence a luxury"

It is a very difficult thing to say how much exercise is necessary to preserve health, as different people are differently constituted. What is one man's food, is another's poison. But the following is a good general rule; an hour of exercise to every pound of food. In order, therefore, to induce Japanese schoolboys to take more physical exercise, I have compiled this little book.

I have to tender my acknowledgements to the respective authors of "The Boy's Own Book," "Every Boy's Book," and "Spalding's Baseball Guide," from which works I have freely borrowed.

In conclusion, I beg to state that I shall be most happy to explain practically, as far as I can, any or all of the games

described in this volume, and more especially to the students of Dai Gaku, and Yobimon.

F. W. Strange

Tokio May 1883

この書の内容は、当時日本で行われていなかった遊戯的種目、陸上競技、スポーツ等でおそらく氏の育った英国では盛んに行われていたものを、日本の若人の戸外運動として紹介しようとしたものであろう。その Contents を示せば、

- 1 Rounders
- 2 Prisoners
- 3 Warning
- 4 Touch
- 5 Follow my Leader
- 6 Hare and Hounds
- 7 Leap Frog
- 8 Fly the Garter
- 9 Steeple chase
- 10 French and English
- 11 Buck ! Buck !
- 12 Catch Ball
- 13 Hockey
- 14 Football
- 15 Lawn Tennis
- 16 Cricket
- 17 Base Ball
- 18 Athletic Sports
- 19 100 Yards Race
- 20 200 Yards Race
- 21 440 Yards Race

- 22 880 Yards Race
- 23 High Jump
- 24 Long Jump
- 25 Hop Step and Jump
- 26 Pole Jump
- 27 Three-Legged Race
- 28 Consolation Race
- 29 Throwing the Cricket Ball
- 30 Putting the Shot
- 31 Throwing the Hammer
- 32 Hurdle Racing
- 33 Training
- 34 The Laws Athletics

といったようなもので、遊戯的な種目、幾つかの球技、陸上競技各種について、その価値、内容、方法等を説明している。これを書くに当っては、“The Boy’s Own Book” “Every Boy’s Book” “Spalding’s Baseball Guide”等を参考にさせてもらったと断つてある。

次にその代表的なものを何種目か原文のまま載せておく。

「French and English」というのは「綱引き」のことで、この命名も当時の国際情勢をうかがい知られて面白い。その原文は、

FRENCH AND ENGLISH

This game is played by two parties, whose numbers are equal; they all take hold of a rope, and the object of each party is to pull those belonging to the other across a line on the ground, by means of a rope. When all the players on one side are thus pulled over, or made prisoners, the other party wins the game. This is a very lively sport; it is most reasonable in cold weather when it affords capital exercise and much amusement.

である。これによって見れば「綱引き」が日本の各学校の運動会に必

ず行われる種目になったのは、この書による Strange 氏の紹介による所が多いものと思われる。然し又一方古い時代に中国から伝わっていたもので、日本における最も古い記録としては、112 代靈元天皇の延宝 8 年 (1680 年) に、江州の三井寺の門前で行われたことが日次紀事にある。それ以後各地に祭礼などの神事としても行われた。(遊戯大事典, 480 頁)。綱引きは英語で「tag of war」といい、オリンピックの第七回アントワープ大会までは陸上競技中の雑種競技として行われていた。日本でも大正初期に陸上競技会に行われたことがあった。

「Buck! Buck!」は、そのまま直訳されて「鹿ヤ鹿ヤ」とか、「鹿遊び」として各地で子供達の遊戯として普及した。各地で名称が異りその内容から「鹿鹿角何本」とか「馬乗り遊び」とも言われている。

(民族学辞典, 251 頁, 体育辞典「木下, 寺岡」602 頁, 遊戯大事典, 281 頁参照) 原文は,

Buck! Buck!

This a sport for two boys only, with a third, who stands by as umpire. The games commences by one of the players giving a back; that is, placing his arms across his breast, or resting them on his knees, stooping forward so as to bring his back nearly horizontal with his head, which he supports against a post, wall, but not necessary, for the player who gives the back to be blindfolded. The first player having thus taken his position, the second leaps astride on his back, holds up as many of the fingers of one hand as he pleases, and says, "Buck, Buck, how many fingers do I hold up?" The player who gives the back makes a guess; if he name the right number, the other player becomes Buck, and gives him a back. If, however, his guess be an incorrect one, the rider remains on, holds up some more fingers, and asks the some question as before; this is repeated until the Buck names the true number. Sometimes umpire is made third player; so that

when Buck's guess is correct, the rider gives a back, the umpire becoming rider, and the Buck umpire.

である。

球技としては、ホッケー、フットボール、ローンテニス、クリケット、野球、ラウンダース等が解説してあり、クリケット、ラウンダースというようなものは野球の元祖的なものなので、野球の隆盛に押されてしまったが、その他のものは皆よく日本に普及した。

陸上競技各種目の転載は略し、「Consolation Race」について述べれば、これは明治年間の運動会などでは最後の種目としてよく行われたらしい。本番組の競技で上位入賞できなかった者を集めて、最後にもう一度入賞の機会を与えてやろうという敗者復活戦に類した種目で200ヤード位の競走をさせた。すなわち、Consolation Race. として、

This sport is always the last on the programme. Two hundred yards is a good distance. All Competitors who have not won a prize during the afternoon may run in it, but winners may not.

と述べている。

最後に「Training」と「競技規則」については次の如く書いている。

TRAINING (ママ)

All of these sports require practising, or as it is called training. Training for running consists in running certain distances every day, and being more careful in the diet. As little liquid as possible, certainly not more than one quart per day, should be drunk; nothing sweet, oily, or indigestible should be eaten. Not less than six hours of sleep each night should be jumping or any kind of athletic sport, is in the afternoon and evening, not too soon after a meal. Suppose dinner to be eaten at noon, then 2 p. m. would be a good time to begin

(ママ)

practising; as a general rule, an hour should elapse between the end of the meal and the practice. If a boy is training for 100 and 200 yards races, he should begin by practising starts, and gradually increasing the distance at top speed up to that of the race itself. The distance should then be run twice a day. In training for $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$ and 1 mile races, more exercise is necessary. The best plan is to begin by running the distance slowly, and increasing the speed day by day. The distance should not be run more than once a day, but a great deal of walking exercise is necessary to strengthen the muscles of the legs. For all long distance the great things are wind and endurance. The only thing requisite in training for all kinds of jumping, is practice, no change in the diet being necessary. The same may be said of 'putting the shot,' and 'throwing the hammer.'

練習中は食事に注意し、睡眠を充分とること、食事と練習時間との関係などにも触れ、短、長距離走の練習法、跳躍、投技等についても述べている、当時としてはこの程度でも全く初歩の学生にとっては大事な指針となつたのであろう。

The Laws of Athletics

1. No attendant to accompany a competitor in the race.
2. Any competitor starting before the word to be put back one yard.
3. Jostling running across, or wilfully obstructing another so as to impede his progress, to disqualify the offender from further competitions.
4. All cases of dispute to be referred to the committee of management at the time.
5. The decision of the judges in all competitions to be final.
6. In pole jumping & high jumping, three tries allowed at

- each height, Displacing the bar only to count as a try.
7. In long jumping, putting the shot, throwing the hammer, and throwing the cricket ball three tries allowed.
 8. In long jumping, putting the shot, and throwing the hammer crossing the scratch line in the attempt, to Count as "no try"
 9. "No tries" count as tries.

以上の競技規則も現在では、特に規則として挙げなくても誰でも知っている常識的な事項に過ぎないが、陸上競技がはじめて行われた当時として、この程度のことが「The Laws of Athletics」として記載されていた事を思うと、Strange 氏の「Outdoor Games」なる著は当時としては貴重なる唯一の宝典であったと言えるのではなからうか。

先生の大講演

前にも述べたように、ストレンジ先生は、大学予備門の英語の先生で、発音法や英作文を受持ち、大変美しい筆跡の持主で工夫した熱心な指導法で学生を魅了したようである。

ところが、スポーツに堪能で、学生をよく指導し、確固たる体育的見識をもっていた事が認められ、明治 16 年時の東京大学加藤弘之総理から依頼され大学の教授学生及び予備門の教授生徒一同の前で大演説会を開いたことがあった。氏は同年 6 月に「Outdoor Games」という書を出し、その Preface にも幾分 Physical Exercise, とか Mental exercise について述べているが、若人に対しての「Outdoor Games」の必要性を強調している。この講演会の様子について、武田氏は次の如く述べている。⁽⁹⁴⁾

「ある日ストレンジ師の教室に入りますとこは如何に、黒板という黒板は例の美しい筆跡にて、^(ママ)透き間なく細々と何か書いてあったではありませんか、師は一同を顧みて徐ろに説いてきかせました。次の土曜の午后、加藤総理の依頼により、大学及び予備門の職員生徒一同に講堂で運動に関する講演をすることになったのは自分の光

栄である。お前達にもぜひ書いてもらいたいが、自分の演説がわからぬようなことがあっては遺憾だと思って、ここに自分の address 中に出てくる難文字を順を追って書いておいた、代る代る読んで見てくれ、分らぬ所は説明しよう。知らぬ字や忘れそうなのは写しておけ” 一同代り代りに読んで質問もいたし説明をも願いました。何しろ3~40年も前の事ですからハッキリ記憶はしていませんが、Physical education, Mental exercise. ^(ママ) discipline-pluck, moral courage-pedestrian. draught. athlete——などという言葉は今でも確かに覚えています。中にも、in” str-men-tal’i-ty という単語にわざわざ綴りを切り、アクセントをつけて説明されたのは一同深く師の親切な教えぶりに感服いたしました。

体育宣伝の大演説

講堂には、加藤総理をはじめ、大学の教授学生、予備門の教諭生徒、一人残らず着席してストレンジ師の入場を今やおそしとまち構えました。ストレンジ先生のこの日の扮装(いでたち)は、フロックコートに絹帽子、新婚の夫人を伴い、しずしずと高壇に上りて先づ夫人に席を与え、進んで演壇に立って、揖一揖された。日頃の背広姿とこと変り、私共の始めて見た洋服の礼装に一しほ威厳が加わって平素には似ず少し昂奮されたかの其の面地、やがて拍手の静まるを待ち、大版数十枚の草稿を手にして音吐朗々として我国始まったの体育宣伝演説の口を切られました。最下級生の悲しさには、演説中の用語をさえ前以て教えられまでした私共には師の講話を味わってきくだけの力とはありませんでしたが、大体の筋だけは、おぼろげながら会得することができました。

「運動は人の体力のみを練るを目的とせず、吾人の知徳を磨かんが為なり、運動は手段にして、目的に非ず、吾人の体軀を練るは病を防ぎ寿を得んが為のみには非ず、期する所はこれ以上にあり、運動場における訓育の遙かに教室内における教化に勝るあればなり、必ずしも運動場における Exercises とのみいわず、秀靈なるこの帝国は都門を出ずる僅か一步到る処風景に富み、又史蹟に充てり、

一例を京浜八里の間に取らんか、品川の湾の月は泉岳寺の棟にも憩い、生麦の雨は弘法大師袈裟掛の枕にも降りかからざるや、運動場に將た郊外に諸君は学徳をみがき、胆を練り以て美しきこの帝国に対する諸君が至大なる使令を完うせよ」というにあったのです。

一言は一言よりも凱切に、一句は一句よりも熱烈に諄々として説き来り、切々として説き去ること約一時間でこの大演説は講堂も崩れんばかりの喝采のうちに終りを告げました。私はいつか師に請うてこの時の演説の草稿を見せて戴きたいと思っていましたが、師の暴死に遭うて其の望を果さなかったのは、今でも常に残念に思っています。もしこの草稿が今日存していましたならば、実に我が国教育史を飾るべき貴重な材料ともなったでしょうに思えば誠に残りおしい極みであります。

その次の土曜日にアスレチックミイトがありました、一週間おいての月曜日からその年の学年試験が始りました、学年試験前の大運動会、獅子の児を千仞の谷に蹴り落すような痛快なるその頃の強教育法、今の人に言わせましたら果して何と評するであろうか、私には何人の考えか、深い深い大きな謎がこの奥深く内蔵されていたものと思われません。」

と述べている。

さてこの講演は、競技会の一週間前の土曜日に行われたとあるから、明治 16 年 6 月 9 日だったという期日が割り出せる。「Outdoor Games」の出版が同年 6 月 11 日であったことから見て、ストレンジ氏の体育思想が確立し、その理論的根拠を基礎として本業英語教育の傍ら、体育、スポーツ教育の実践が最も充実したのは、この頃から氏の急死までの間であったわけである。

この武田氏の手記から推察できるストレンジ氏の、体育・スポーツ観は、次のようなものと考えられる。

1. 運動、体育、スポーツといったものの目的は単に身体を鍛練するというにとどまらず、それを instrumentality として、精神面に及ぼす影響を忘れてはならない、体育は知育、徳育の手段

でもあるということ。

2. 従って、運動場における訓育は却って教室内における教化以上のものが期待されなければならない。
3. 風光明媚な郊外に出て自分の足で、自然の山野を跋涉し、浩然の気を養い心胆を練るの重要性を強調した。

武田氏も述べているように、その講演会の草稿が入手できず、40年も前の記憶によることなので、ストレンジ師の講演趣旨は明確に把握できないが、この手記からは以上の三点が抽出される。東京大学の大讲堂で全教授学生を前にして体育の大講演を行ったのは、空前絶後、ストレンジ氏ただ一人であるかも知れない。

体育・スポーツへの貢献

ストレンジ氏が明治8年に、日本に渡来し、22年急逝するまで14年間、殆んど1日も休むことなく、東京英語学校→東京大学予備門→第一高等中学校と、学校名は変わったが後の第一高第学校に一貫して英語教師として精励格勤したということは前にも述べたが、その後半明治16年頃より、当時の日本の青少年に適切なる戸外運動のないことに気づき、本業の余暇に熱心にこれを指導奨励した。若い育ち盛りの青年に体育・運動の必要は今更ここに論ずるまでもない、ストレンジ氏の誘発によって、体育運動を身体的にも、心理的にも渴望していた学生達の間には、急にスポーツ熱が高まり、中でも氏の特技であったボートと陸上競技の発達は特に目立ち、各学校にも広まって行った。この日本におけるスポーツの黎明期にストレンジの果たした役割は誠に偉大なるものがあった、その功績を述べるに当り、これを端的に物語っている武田千代三郎著、理論実際競技運動（明治37年）の巻頭の『恭しく本書を先師故ストレンジ先生の神靈に献ず』として師の写真をかかげ、その生涯を叙し、偉大なる功績を称えた追悼文を載せてみよう。

「嗚呼これ実に本邦運動の『鼻祖ストレンジ』先生の像なり、先生は英国デヴォンシャイア州の人、明治8年4月遙かに聘せられ

て国立東京英語学校の語学教師となる。爾来旧東京大学予備門及び第一高等中学校に歴任し、精励格勲多くその比を見ず、官賞して勲五等に叙し双光旭日章を賜う、明治 22 年 7 月 5 日暴に病んで卒す、人痛惜せざるなし、先生人と為り、真率にして豁達、道を教うる厳正にして懇切、真に英国紳士の模範たり、且諸生を愛する子弟の如く、師弟の間交り水魚の如し、先生夙に本邦体育術の振はざるを慨き、時の大学総理と計り、明治 16 年始めて競技運動を興し、同年又競漕会を墨江に举行せり、是れ実に本邦に於ける水陸競技運動会の濫觴とす、爾来常に運動奨励を以て己の任とし、学余親しく諸生と伍し、或は樹蔭に流汗を拭うて運動の理想を説き、或は艇上手づから橈を執って学理の応用を口授し、懇篤丁寧到らざるなし、常に諸生を誡めて曰く、競技に専ぶ所は極力相闘うて憾を遺すなきに在り、成敗の如きは意に介するに足らずと、又曰く、運動の奥義は情意の鍛練に在り、筋骨を練磨するが如きは抑々末なりと、此に於て諸生漸く走漕の技に熟し、又深く心身鍛練の本旨を会得す、先生視て欣喜措く能はず、益々力を斯道の発達に竭し、或は私財を擲って諸生の為に運動の具を供し、或は京浜外客の間に遊説して内外人競技の機会を開く等、周旋尽力到らざる所なく、將に大に為すあらんとするに当り、上天無情忽焉としてその寿を奪う、遺恨何ぞ堪うべけんや、然れども先生逝くもその遺法は遺れり、即ち先生の名と先生の功績とは、永く本邦教育史に特筆せられて千歳朽つることなかるべきなり、憶い起す当年の競技場、先生礼装威儀を整え、端然として場の中央に起ちて諸生を麾けば、短袖半袴輕装の健児等、馳せて先生を囲む、先生諸生を一瞥し訓告を垂れ助言を与う、令嚴にして意温、諸生唯々として黙聴数刻、忽ちにして歓呼の声その四圍に起り、健児勇躍去って各々その地に就く、これより天鳴り地震い、竜虎相搏って一奇一正、拍手喝采湧くが如く、壯絶快絶、口言うべからず、筆記すべからず、この事相隔つる既に十有五年、温容髣髴として猶眼に在り、蘭の如き其言耿として耳に忘れ難し、ここに恭しく遺影を卷首に掲げ、謹んで先生の功績を頌し、聊か謝恩の微衷

を表す。」

以上、ストレンジ師の愛弟子であった武田千代三郎氏の追悼文は、切々として胸をうち、ストレンジ先生の毅然たる姿を未だ見ざる我々にまで彷彿とさせるような名文である。更に武田氏の思出話⁽⁹⁶⁾によれば、ストレンジ師は、身長5尺7~8寸(1m75)、体重は17~8貫(66kg)位で外国人としては、むしろ小柄な、ほっそりした体格で、イートンカレッジ出身だけに特に漕術には勝れていたが、その他の歩行、水泳、帆走、スケート、クリケット、フットボール、馬術、陸上競技等文字通りのオールラウンドのアスリートであったという。その健脚ぶりと言ったら驚く程で、芝の伊皿子に住んでいて、一ツ橋(その間約7km)や本郷の学校(その間約10km)まで平気で徒歩で往復していたし、一緒に歩くとき普通の人なら小走りではなくはついて行けない程で、夏休みなどよく一日20里(80km)の徒歩旅行もしたという。明治の御雇外人教師というのは大変待遇がよく、その時代で月給300円以上も貰っていたので皆御抱えの車夫をやとっていたが、ストレンジ先生の抱車夫はいつも空車を挽いてフウフウ息を切らして御供をしていたという、仲間が“お前はいつも空車をひいて給料を貰い結構な身分じゃないか”とひやかすと“羨しけりやあ、1日俺に代って見てくれ”と答えたという話も残っている。

明治12~3年頃には、学生は課業の余暇に体育的なものとして「遠足と舟遊⁽⁹⁷⁾」をしていたらしい。その頃から明治15~6年頃までの遠足会のやり方は、“月に一度ずつ「遠足会」というものが催されて、会費は3銭、毎会の参加者が少くとも140~150人位で、「浩然」「正気」と大書した白旗二旗を押し立てて、鉄脚軽く淡塵を蹴って十余里の遠きを踏破した”と武田氏が述べている。更に“その頃神田今川小路に、速歩術の先生がいて、60余歳という老体にも拘らず、日和下駄で、日帰りの鎌倉八幡まで月参りをしていた。この先生について歩法を学んだ人も大分あり、この先生には「速歩術」なる著書があり東京高師(東京教育大学)の書庫にこれがある筈”と述べている。このように当時は、身心鍛練の方法として遠足が重視され、夏休みの徒歩旅行、高

山の跋涉なども学生の間には行われていた、ストレンジ師もはじめはこの方法を学生にすすめていたようである。

向島の（当時は南葛飾郡須崎村 15 番地）東京帝国大学（明治 19 年 3 月 1 日、東京大学は東京帝国大学と改められた）の艇庫は、明治 20 年 4 月に完成したが（東京高商の艇庫は 39 年完成）その頃の学生は神田から向島まで皆歩いてボート漕ぎに通ったという、この間の距離は約 6~7 km で、現在の学生などにはとても考えられぬ事であろう。ストレンジ氏が、大学講堂にて体育奨励の大講演をした際、都門を出ずる僅か一歩到る所風景に富み、史蹟に充てり学生は大いに徒歩旅行をして、新鮮なる大気の中で大いに身心を鍛練すべきであると強調したのは決して口先だけでなく、先生自らも日常出来る限り歩くよう心掛けていた実践力の表れの一端である。

氏は単に大学予備門において体育運動を奨励指導したのみでなく、早くより京浜在住外人の間で作っていたスポーツ倶楽部に関係していて、その熱心さにより推されて、死に至るまで、クリケット倶楽部のキャプテンを務め、外人間でも好評を得ていたという、このため、ストレンジ氏が東京大学や予備門のために画策した運動奨励の諸計画が在留外人によって熱心なる援助を与えられたり、両者間に親善試合が円滑に行われたりしたのも蔭になって働いた氏の尽力があったからである。

氏の体育的活動が実際に実現したのは明治 16 年の東京大学競技会以後で、それ以前は見るべきものがなかった。この事については、「スポーツ八十年史」に「ストレンジは常に学校で体育の必要を説き、⁽⁹⁹⁾スポーツの趣味を鼓吹しようとしたが、最初のうちは彼の説に耳を傾ける者は少く、困難を感じたものの、大学予備門ではじめて陸上運動会を開いたのは明治 16 年 6 月 16 日で、翌 17 年 10 月 17 日には競漕会を開いている。この時の競技のプログラムや練習当口の審判まで一切ストレンジの一人舞台であった。」とあり、この陸上、水上両競技会はストレンジ氏の尽力によって開かれたようなものであった。

武田氏は「それから 22 年に死去するまでこの 6 年間、師はその至

誠と熱心とを傾けて我大学及び高等中学のために英国風の運動の理法や技術と精神とを移し植えられ、本邦運動の基礎を開きたる功績は実に偉大なるもので、僅かこの6年の間に我が大学生が学び得たるものは実に大きかった。」と述べている。⁽¹⁰⁰⁾

このようにして、教育の中に競技運動の果たすべき重要性を確信して、遂に学生生活の中にスポーツを取り入れたストレンジ氏は、氏自身英国育ちの紳士的な優秀なスポーツマンであると共に、勝れた指導者であった。本業の余暇に連日スポーツをコーチし、技術の外にイギリス流の競技の精神を教え込んだ。これがいわゆる「スポーツマンシップ」であって、“競技において最も尊いのは、最善をつくして戦い心残りのない努力をすることである。勝敗は第二の問題である”，“運動の奥儀は情念を鍛練することにあつて、筋骨を鍛練するだけのものと思つてはならない”等、その他いろいろ人生教訓を学生と共に汗しながら指導した。このスポーツの黎明期にストレンジ氏のようなよい指導者があつたことは日本のスポーツ界、教育界にとって誠に幸運なことであつた。ただ惜しむらくは、氏が明治22年35歳の若さで急逝し、其の後の東大の運動会は精神的の支柱を失ひ、素質的に足の強い者は大した努力練習をしなくても勝つといった状態にまで墮落し、その後のスポーツの発展には一頓挫を來した觀が見られ、明治30年代に入って立直しを必要とする状態であつた。ストレンジ氏の教導を得て、⁽¹⁰¹⁾後年日本の運動界に尽力した人に岸清一、⁽¹⁰²⁾武田千代三郎、山口⁽¹⁰³⁾銳之助等が挙げられる。

氏が、私利、私欲、自分の時間というものを無視し、家庭生活を犠牲にしてまでもスポーツのため、学生のために熱心に尽力した逸話が多く残されているので、ここにその二三を拾ひ挙げてみよう。

第一回の運動会の数日前に出版された氏の著書「Outdoor Games」は、学生に限り特別大割引(25錢を20錢にしたらしい)で売らせ、運動会の賞品にも沢山寄贈して、各競技毎に2~3冊を配当していたという、この著書は辞書は別として、⁽¹⁰⁴⁾我が国で発行された英文書籍としては最初か、2~3番目位のものであつたらしい。

日本のボートの草分けは、長崎在住のオランダ人だとの説もあるが、はっきりしているのは、横浜開港間もない慶応2年、山下町の海岸通りにバージというボート倶楽部ができて、英本国から滑席艇数隻を取寄せたということがわかっている。このバージ倶楽部が、明治から大正にかけて、日本の大学選手と、しばしばレースをした横浜アマチュア・ローイング倶楽部の前身である。⁽¹⁰⁵⁾

東京の学生達が廃品に近い艦載カッターを格安で払下げ、面白半分に漕ぎ回ったのが明治10年頃で当時はバッテリー⁽¹⁰⁶⁾（ポルトガル語でボートを Bateira といった）といていた。

このボート熱が盛んとなり、大学南校でも学生等の希望を容れ、アメリカの捕鯨船の「ハシケ」を買入れ学生に使用させた。これが東京帝大端艇会のそもそもの起原となったわけである。これについては、岡山兼吉の言行録「梧堂言行録」⁽¹⁰⁷⁾に、“東京に来りても科業の余暇には、君の愉快とせる所は、遠足と舟遊の二つにてありし……その舟遊には、即ち墨江に溯り、品海に棹し、或は端艇を操りて終日帰るを忘れたることありぬ”とか、“何時頃にてありしか、同学砂川雄峻、立花安次郎、橋槐二郎及び梧堂等相醜して、拾五金（15円のこと）を集め得たれば、之にて端艇一隻を購入し、続いて開成学校に勧告し、校費を以て三隻を購はしめ、以て競漕の具に供せり、これぞ今日、世人の知了せる帝国大学端艇会の濫觴なり。”と、岡山氏は明治9年11月開成学校入学、14年7月法学部卒業なので、この話は明治10～11年頃と思われる。これらの学生が「舟行組」というボート倶楽部をつくらしたが、競漕でなく単なる舟遊びであった。

明治16年頃はボート熱の普及に対し使用ボートの不足（当時大学所有のもの二隻）から、毎土曜の夕方は、翌日曜の使用者を決定する舎監室での抽せん会はいつも大騒ぎを演じた。こんなことから新艇建造の議が出て、学生、職員から寄附を募集することとなり、20銭、50銭と集めたが、この時ストレンジ師は5円を寄附し、その建造についても、種々助言を与えた⁽¹⁰⁸⁾と言う。これに最も熱心だったのは、吉武栄之進と山口鋭之助で毎土曜品川の結明造船所まで出かけて建造の

監督、催促に當った。その結果、17年秋全学生待望の新艇三隻が見事に竣工し、これを機に、17年10月17日の吉日を卜し、日本最初の学生ボートレースを挙行了したのであった。

正式には「東京大学走舸組競漕会」という名称であったが、なにしろ本邦第一回のボートレースというので、開会前から大変な評判で、当日は朝から詰めかける観衆で一ぱいになり、来賓だけでも数百名に上ったという。教授の寄贈による海軍の楽隊の奏樂で景気をつけ、十何組の競漕が行われたが、最も呼び物だったのはプログラム最後の番組で、それは最優秀選手を二つのチームに分け、ストレンジ先生とノット先生の両英国仕込みの教師が舵手となつての模範競漕であった。その時の状態は当時の新聞記事に詳しく述べてある。

明治17年10月16日、東京日日新聞記事、「昼夜を分たず内外の書籍に目を晒すは学生の本職なれ共、常時身体の健全を心掛けるも亦必要なり、然るに我国の学生の勉強することは欧米にも恥じざる所なるも、身体の健全に至っては、往々之を粗略に付するの弊あり。東京大学の人々は此弊を匡濟せんものとして、数年前より学生の中には学業の余暇漕舸を勉強する輩もありしが、兎角盛大に至らざりしに、此度大学並に予備門の学生生徒並に大学に縁故ある人々の発起にて、東京大学走舸組と称する一会を起し、会長は加藤弘之君にて首事には服部一三、穂積陳重、矢田部良吉、外山正一、杉浦重剛の諸君を推して、新に数隻の小舸を構造し、平素体育の要に供し、毎年春秋二回適宜の場所を選び、大競漕会を開くの規則を定め、即ち其の第一回は明17日午前9時半より、隅田川の上流、吾妻橋の上にて都合13番の競漕を催し、其外に番外の分もある由。其の発舸並に判定者は英人、F. W. ストレンジ君之を勤む。右に付き当日は水上警察に依頼して他船の障害を制し、向島植半、言問の両亭を以て招待賓の見に充つるなど、余程の盛況なりと云えり。」

更に18日、同新聞記事は、其の結果を伝えて、

「前号にも記載せし通り、昨17日午前9時半より、隅田川上流にて走舸の競漕を催されたり、舸長漕手熟れも余程の奮発にて、互に勝

敗を争いたれば中々の見栄えありし、但し走舸の操縦は未だ十分の熟練とは申難き所あれど、往復十余町の流を漕通してきまで疲労の様も見えざるは、概して忍耐の強きに依るべく、瘠骨蒼顔の学生輩にしては感服の至りなり。番数の中、大学物理学教授ノット君と、同予備門教諭ストレンジ君との競漕は、1マイル以上の長きに渉りたるが、双方とも此の技には熟達の名のある人なれば、両舸艫をならべて走り何れ劣るとも見えず、兩岸見物の喝采は山をも崩すばかりなりしが、今1~2間にて帰着の処に達せんとする時、ノット君は一声掛けて漕手を励ましたるに、果して数尺をストレンジ君に先んじれば、一呼吸の遅速にてストレンジ君の敗れとなりしは最も残念なりき。すべて勝者へは首事服部君が銀の賞牌を与えられたり。当日来観者は頗る多く大学の諸先生は申すに及ばず、文部の大小書記官其他数百名の来賓あり。河上には海軍兵学校、商船学校、体操伝習所等の諸生徒は各々数隻の小艇を繋ぎて見物なし居たり、因に記す当日の競漕は大学生のみに限りたれば、言わば仲間中のこと故自から競争心も薄き気味もあらんが、行く行くは工部大学、商船学校、体操伝習所、師範学校、諸学校等の生徒と合併して優劣を試むることとなしたらば、各部生徒の意気込も一入にて、平素の勉強をも奨励するの効あらんと思わるるなり。」と、この時ノット氏のボートには整調として山口鋭之助が、ストレンジ組のボートには武田千代三郎が乗っていた。また優勝組の貰ったメダルは、実費1個五十銭で先輩の寄附金で作り、表に、TDGRC (Tokyo Dai Gaku Rowing Club) と 17, 10, 84, (1884年10月17日) と浮彫してあり、このデザインはストレンジ氏の手によったもので、これが我が国で最初のボートレースのメダルであった。

翌18年には、ブルジョアの多い医学部で寄附金を集め5隻の新造艇を作ったので、4月12日第二回のボートレース大会を開いた、この時は各学部対抗とし、法、文、理、医の4学部の外に予備門本校、予備門分校を加えて、第一回合同競漕大会の名称で開催した。会長は加藤弘之、浜尾新、穂積陳重、首事として、矢田部良吉、三宅秀、外山正一、杉浦重剛、発艇並に判定者として、F. W. ストレンジの諸教

師が名を連ねたが、既に前年の経験で学生は自主的に計画、運営し役員は名ばかりの形式的のもので、ストレンジ師もこの時はすっかり学生にまかせ、実際スタート役やゴール判定旗掲げ役は皆学生がやった。⁽¹⁰⁹⁾ところが各部対抗の決勝戦で問題が起った。このため加藤総理は競艇の使用を制限し、今後対学部レースは絶対罷りならぬときつい禁止令を出した。せっかくボート熱が高まり、若人に好適なスポーツが普及しかけた時だけに、つまらぬ勝敗争いで、応援者の興奮の渦中に巻き込まれた形の選手達の気の毒な様子を見たストレンジ師は、日頃、手塩にかけて教えていたボーイズ達の困っているのを見かねて、自分の滑席艇を提供して練習させることにした、ストレンジ師はこれを機に滑席艇を仕込み、横浜のアマチュア・ローイング・クラブと試合させて見ようと計画した。師の再三の交渉尽力により、これが同年 11 月 3 日を期して横浜港内のグランド・ホテル前の 1000 m コースで行うことに決定したのが 9 月であった。このとりきめから試合当日まで、選手の選定から、スライデング・フォアの漕法、試合の心得等師の熱の入れようは異常という程で、家庭生活を犠牲にした 6 週間の猛練習で、これが後に述べる家庭悲劇の遠因ともなったらしい。選手は徒歩で、先生はお抱え車で毎日本郷から浅草や品川海岸まで通い厳格なスケジュールの練習が実行された。師の夫人が「夫は私よりもボートの方が大事のようです」と他人に愚痴をこぼしたのもこの時であった。選手も固定席から尻の滑る座席は勝手が違いこっそり紐でレールに結びつけたのを師に発見されてひどく叱られたというようなことがあったり的一幕もあって、毎日の通い練習は血の出るようなつらさだった。然し武田、山口等の選手が本当にストレンジ先生の人格に触れたのはこの練習中であった。指導は英国オーソドックス漕法によったが、師の強調点は、

1. Eyes in the Boat (オールを見るな、自分の前の漕手の肩を見て漕げ)
2. 首を振るな、醜い姿勢をするな
3. “quick of chest”, Feathering (オールの回転を早く)

4. Space を長く（櫂先の引きを長く）

5. 浪のない所では、櫂先は水面三吋以内浪のある所でも五吋以上高くしてはならない。即ち“Don't Sky”……櫂先が孤を描くように、高く舞い上らないようにすること

というようなことで、合宿のような毎日の練習でどうやら漕法も会得したが、試合当日は波浪が強く、主に川だけで練習していた選手達には悪コンディションという不利もあって高波になやまされ全くの惨敗に終わった。然しここで滑席艇クルーを組織して外人クルーと対抗レースをしたということは、日本ボート史上特記すべきことであった。

第一高等学校寄宿舎編集の「向陵誌」の、「校友会各部史」を見ると、野球部、端艇部、陸上競技部の記録にストレンジ師の尽力の様子が載せてあるので、関係ある部分だけを抜萃して見よう。

⁽¹¹⁰⁾
野球部史（野見山俊雄・御影池辰雄執筆）

吾部の開祖とも称すべきはストレンジ氏にして、氏は東京大学法学部教師として在職中、同校ボート会と共にベースボール会を起せりという。明治 19 年 4 月東京大学予備門を改めて第一高等中学校と称せらるるや、法学部工学部のベースボール会を合併して始めて第一高等中学校野球部はなりしなり。然りと雖も当時我部の技たるや未だ世目を引くに足るものなく世目は翕然端艇部に集り吾部は時に試合を催し、ノックを行うに過ぎざりき。

⁽¹¹²⁾
陸上競技部史（大木操・原田憲次郎執筆）

我が国における陸上運動の沿革を見るにその外国より輸入せられて、これが継承をなし、同化し、以て今日の隆盛を期すに達せしは、甚だ短時日の発達に基くものにして今を去る（この発行は大正 9 年）約 30 年前東京大学が本郷台上に移りし際、故 Strange 氏の熱心なる尽力により、始めて戸外運動競技なるもの開催せられ、世人をして陸上運動の如何なるものなるかを会得せしめ、ここに陸上運動は公式的に我が日本帝国の地にその根をおろせしなり、明治 19 年東京大学は東京帝国大学と改称せられ予備門は大学と分離して独立の組織となり、第一高等中学校と称するに至りてより吾が第一高等

中学校に於ても体育奨励の具として陸上運動の諸技を入れて之が研鑽を積み、高商等と偶ま技を闘わずに至りても、只我をして名を成さしむるのみにて大学以外に敵を求むる能わず独り天下に雄飛せしが、明治 23 年頃より我が高中も好敵なきに苦み従って其技能を練磨するの熱心を失い……翌明治 24 年陽春の候を期して我部大運動会を挙行するの機運に際会するに至れり。

⁽¹¹³⁾
端艇部史（飯沼一省執筆）

抑も吾部の草創は、本校がなお一ツ橋に在りて東京大学予備門と称し、東京大学の管理に属したりし当時であり、すなわち明治 17 年、当時の講師ストレンジ氏の指導と、武田千代三郎、岸清一氏等の幹旋奔走によりて九隻の端艇を新造するを得て、其の保管を現今の明治橋附近、及び浅草橋際に依託したるは、実に吾校端艇部の前身にしてまた同時に本邦端艇界に燦然たる曙光を放ちたるものという可く、当時走舸組と称へるもの即ち之なり。

これを見ると、ストレンジ師は、少くとも上記の三運動部の設立に当って、熱心に尽力・指導したことは確かである。当時は大学と予備門が、はっきり分離していなかった時機であった、この頃、各運動部で活躍した人達が社会に出て、その後のスポーツ界の指導的役割を果たしてくれた。

以上の如き、ストレンジ氏の体育・スポーツ界への尽力、功績を総括称讃した批判が、氏の歿後 9 年程過ぎた明治 31 年 12 月号の「中学世界」という雑誌に「運動の沿革」寄稿者「破浪生」の名で、次の如き一節が述べられている。

「日本に於て、戸外遊戯が運動会の形式をそなえて起りしものは、実に明治 18 年に於ける東京大学競技運動を以て最初となす。是よりさき大学学生は運動欠乏のため、顔色蒼白体力気力薄弱にして、他日雄飛の事も覚束なしと認められしかば、先ず寄宿生徒に体操を課し、後に通学生徒にも及ぼせしが、当時は制限すらも一定せず、長袖にたすきをあやどりて棍棒をふるうなど、その体裁甚だみにく

かりき。明治 18 年、大学が一ツ橋より本郷に移るや、時の外国教師ストレンジ氏は熱心に運動を奨励し、予備門と合併して始めて運動会なるものを催したりき。運動場の整頓など不完全のこと多かりしも、貴顕紳士の来場するもの多く、運動好きな外国人などは、公使プランテット氏を始めとして知名の士多く来観したり。明治 19 年に東京大学は帝国大学と改称され、予備門は大学と分離して第一高等中学校となる、第一高等中学校は、予備門時代の運動を継承してますます発達せしめ、今日に至るまで優に運動界の覇者なり。帝国大学の運動会は、其の形体上の組織は、時の総長渡辺洪基氏これを完成し、学術上の元祖は故外国教師英人ストレンジ氏これなり、大学の運動会が今日に至り、第一高等学校の勇名が運動界裡にどどろくに至りしも、これが元祖となりて指導せしものは、実に故ストレンジ氏の力なりとす。日本運動界に於ても金鷄勲章を作るとせんか。功一級は故ストレンジ氏に贈らざるべからず。」

と。

このように、日本のスポーツは、その黎明期に、期せずして偶然にもストレンジの如き熱血漢を英国より迎えて、幸運なる門出をしてより、その後ますます長足の進歩をとげ、遂に昭和初期の黄金期を迎えて、世界にもその優勢を誇るまでになった。然しこの金鷄勲章功一級にも匹敵すべき氏の名は一般にはあまり知られていない。私のこの小論が氏の埋れたる功績の幾分かを発掘し、幾人かの人々の注目をひく事にでもなれば幸である。

ストレンジ氏の急逝

明治 8 年より、22 年まで 14 年間もの長い間、殆んど一日も休まず英語教師として、国立東京英語学校、東京大学予備門、第一高等中学校に勤務していたストレンジ先生が 35 歳という若さで急逝した詳細については、「ボート五十年」及び「ボート百年」に幾分物語的な部分がないでもないが述べてある。既に述べた所と重複する箇所もあるがそのまま引用させてもらう。

「わが国のボートの育ての親として、その短い生涯を、日本の漕艇の発達に捧げたストレンジ師について是非一言しなければならない。それはこの一青年によって、叩きこまれたボート精神が、今も日本のオアズマンの血管に、脈々として流れているからで、つまり日本のオアズマンは直接間接、師の息がかかっているといつてよいのである。

かつてボートの本場所であるテムス河畔のヘンレーを訪れた時、そのリアンダー倶楽部で、ストレンジ師の写真を見せて、日本のボートの恩人として、同氏について語ったことがあった、ところが席に列した全部の英人が、ケゲンな顔をして、そんな人は知らないといわれたのは、少しガッカリした。しかしこれは無理もないことで、イートン校を出ただけで大学選手として本格的なレースをしたことがなかったのだから、知らない方が本当であろう。それにしても十七、八の青年が、完全なオーソドックス漕法と、ボート精神を身につけていたことは、まことに驚くべきことで、ストレンジ師を通して、英国のスポーツマンに改めて敬意を表さざるを得ないのである。

フレデリック・ウィリアム・ストレンジ師は 1854 年英国デボンシャーで生れた。名門イートン校を卒業すると、大学への進学をあきらめて、はるばる日本へ渡って来た、明治六年、十八歳の時である。

初め横浜にいたが、その間、横浜アマチュア・ローイング・クラブのメンバーとして、一通りの修練を積んだらしい、同八年、菊池大麓博士の推薦で、そのころ神田一ツ橋にあった外国語学校の英語の講師となった、時の校長は肥田昭作、副校長は服部一三であったが、同十年、服部一三が大学南校の幹事に転ずると、ストレンジ師もまた大学予備門に移って、英語と体育を担任した。

ストレンジ師はイートン時代、いろいろの運動をやったものと見えて、ラグビー、陸上競技、馬術、水泳にも一かどの見識をもっていた、それで黎明期の日本のスポーツで、ストレンジ師の指導をうけないものはないといわれた。しかし一番力瘤を入れたのは何といつてもボートで、それがためには学校も家庭も顧みなかったほどである。

ストレンジ師の指導方針は、技術よりも精神に重きをおき、特にス

スポーツマンシップを強調した、「スポーツで最も大切なことは、互にベストを尽して戦うことで、勝敗は問題でない」といった、また「スポーツの究極の目的は情意の鍛練で、筋骨の練磨はその手段にすぎない」ともいった。それでレースに勝った時は、必ず「よく漕いだ」といって、相手をいたわれと説いた。こうしてストレンジ師によって、吹き込まれたスポーツ精神が、当時の学生に与えた影響は非常に大きく、師の教えを受けた学生たちが、後年、大官として、紳商として、社会の各方面から尊敬されたのは、その教えを身につけ、心の支えとしたためにほかならない。」

ここまではストレンジ師の大体の略歴と、師のスポーツの指導精神に触れているわけであるが、その指導精神の紹介の点については全く同じで、日本のスポーツの黎明期において、ともすると勝敗にのみ拘泥しがちな若人の指導に、このような人を得てその立派な精神をたたき込んでくれた事は実に有難いことであった。若し氏が居なかったら、日本のスポーツはその出発に当って、これほど思わしい実績を挙げ得なかったであろう。

同書は更に続けて、

「明治 14 年といえば、ストレンジ師が 26 歳の時である、ひと夏を元箱根に送って、美しい芦ノ湖に、毎日ボートを浮べるのを日課のようにした。

ある日、例の如くボートを出して、鏡のような湖面を、蜻蛉のようにスイスイと漕いでいた、そこへ日本郵船会社の外事支配人の米人ハウ氏が、姪のエディス嬢に舵を引かせて、漕いで来た。多分、今日のお椀ボートであったであろう。二人は顔見知りであったから船の上からちょっと挨拶を交わした後、二つの艇はもつれるように、湖心へ湖心へと漕いでいった、その時である、一天にわかには掻き曇って、十国峠方面から吹きつける激しい突風が、サッと湖面をかすめた。その途端、アオリを食ったハウ艇が、アッという間に転覆してしまった。風だけでそう簡単にひっくり返ったとは思われないが、伝説では、とにかくそういうことになっている。

ハウ氏とエディス嬢は、マリのように水の中に放り出されて、しばらくもがいていたが、目の前にボカリと浮んだボートを見ると、夢中になってとりついた、驚きのあまり真青になったエディス嬢は、オロオロしながら「助けてー」と金切り声を振りしぼってしきりに救いを求めた。まさに危機一髪、生死の境というところである。その時早くストレンジ師は、突風の中を巧みに漕ぎぬけて、船底を甲羅のようにさらしているボートの側まで来ると、オールを棄ててザンプとばかり水中に飛び込んだ、間もなく失心のエディス嬢が、ストレンジ師の腕に抱かれて、大急ぎで助けに来た船に引渡されたことは説明するまでもあるまい。ハウ氏もむろん助けられたが、しかし不人情のようだが、こんな場合、男なんかどうでもよい。

その時、エディス嬢は芳紀二十四歳、非常な美人で、在留外人の間で明星のように輝いていた、もちろんストレンジ師は、美人であるが故に、危機を冒して助けたわけではないが、しかし助けられたエディス嬢にしてみると、この騎士道精神の持主が、とても頼もしく、胸一ぱいの感謝の念は、尊敬の念とゴッチャになって、急に胸のときめきを覚えた。つまりこの英国紳士にボーッとなったのである。この日から湖畔を散歩する美男と美女のアベック姿が、独り者を悩ましたというが、とにかく水に結ばれた二人の愛情は、日に日にこまやかになって、遂にその年のクリスマスごろ、多くの友人知己の祝福をうけて、めでたく結婚へとゴールインした。

今から 40 余年前、オーソドックス漕法に叛旗を翻して、フリースタイルの新漕法を唱えた革命児フェアバーンは、その著『ローイング・ノート (Rowing Note)』の中に、「オアズマンは、そのボートの取扱いを、特に丁重にしなければならぬ、なぜならボートは女性 (Her) であるから」といっている。これはボートの取扱いは女性の操縦以上にむづかしいことを暗示するものである。ところがストレンジ師は、フェアバーンに先立つこと三十余年、すでに女性とボートの取扱いを十分心得ていたから、それだけでもボートの先覚者としての資格十分といわなければならない。

二人の新家庭は、見る目も羨しいぐらい、幸福にあふれていた。ストレンジ師は夫人を、こよなく愛し、ボートにそそぐ熱情を、そっくり夫人にそそいだ。もし「愛情はボートのごとく」というような文句があるとしたら、この家庭にうってつけの修飾句であろう。しかしストレンジ師の愛の対象は、夫人とボートの外に、もう一つあった。それは学生で「ボーイズ、ボーイズ」といって、自分の子供のように可愛がった。教え子の武田千代三郎を、毎日、本郷追分町の新居に呼びよせて、その頃としては珍らしい英語の速記術を、手をとって教えたという心温まるような話もある。明治18年、大閤、大閤といって、またなく可愛がった長男フレデリックが生まれた。ストレンジ師は秀吉とワシントンをも崇拝していたので、そう呼んだということである。その頃がストレンジ師の生涯における最良の時代であったろう。

その秋、わが国最初の国際レースである東京大学と、横浜アマチュア・ローイングクラブとの競漕の話がまとなり、ストレンジ師は東大のコーチとして、三週間、人力車で隅田川に通ったことは前に述べた。その頃から夫人とボートに対するストレンジ師の愛情が、バランスを失って、偏向的な傾向を示した。米国育ちで派手好みのエディス夫人と、じみな英人氣質のストレンジ師とが、性格的にしっくりしないことを、どちらも感ずいたからであろう。エディス夫人の美貌は、年とともに磨きがかけて、その美しさは鹿鳴館の花といわれた。しかし社交場に顔を出すのを好まないストレンジ師は、書齋に引きこもって読書にふけるか、そうでなければ大概、ボートの尻を追って、“Eyes in the Boat”と、メガホンで怒鳴っていた、そうなると夫人も内心おもしろくなく、いつも浮かぬ顔をして、親しい仏国大使館付武官ブリアン大尉に、「夫はボートに目がありませんから、困ったものです」とか「夫は私より、ボートの方が大事のようです」とか、よく愚痴をこぼした。夫人はフランス語の勉強のため、神田三崎町の仏和女学校へ通う傍ら、ブリアン大尉の家へもよく出入りしていたので、特に親しかった。

東大と横浜外人とのレースが終って、久し振りにわが家に落ちつい

たストレンジ師は、夫人との愛情に既にヒビが入っていることを感じた。それ以来ストレンジ師は、哲学者のような沈痛な顔をして、朝から考え込む日が多かった。ある時は日本の料亭に上って、好まぬ酒を口にして、何も知らぬ学生を驚かしたこともあった。

それから二年、気分的にはとにかく、生活の上には何の変わりもなかった。明治 21 年には長女ノラが生まれた。翌 22 年の 6 月 20 日、ストレンジ師は答案整理のため、二児を東京に残して、久し振りで夫婦水入らずの旧婚旅行を、伊香保に試みた。そして一週間ばかり湯治気分を味わった後、月末、独りで帰京した。夫人は 4~5 日おくれで帰ってきた。

7 月 5 日の午後、ストレンジ師は書齋に閉じこもって、黙々として答案を調べていた。4 時頃、エディス夫人がコーヒーとトースト、それに日本のお茶をもって入って来た。ストレンジ師は黙ってお茶を受取り、一息にグッと飲みほした。しばらくすると、急に胸苦しくなっていて、しきりに身をもがいたが、一時間ばかりすると、ゴクリと首を垂れて、そのまま息が絶えた。驚いた夫人は女中のお松を呼んで遺骸をベッドの上に運んだ。急をきいてスクリッパ博士、ベルツ博士、ブリアン大尉らが駆けつけて、注射をしたが、何の反応も示さなかった。

訃報に驚いた一高教授鈴木知雄を始め、武田千代三郎、岸清一、池田賢太郎、柴野是公、志田鉀太郎、日下部三九郎といった東大、一高のボート選手 14~5 名が宙を飛んで来た。そして変り果てた恩師の姿にしばし茫然としていたが、やがて臉を閉じて合掌すると、みんなの目から大粒の涙が、ポロポロとこぼれた。武田千代三郎は慟哭して、いつまでも顔をあげることができなかった。

享年三十三、死因は心臓麻痺、葬儀は 7 月 7 日に行われ、青山墓地に埋葬された。

それから丸 1 年たった、明治 23 年の夏、エディス未亡人は、ブリアン大尉と築地明石町のフランス教会で、花々しい結婚式をあげた。しかしわれわれは名医スクリッパとベルツ両博士の診断に信頼して、故人の名誉を傷けるような想像を逞しうすべきでない。むしろ二人の

遺児のため、新しい生活を求めたエディス夫人の苦衷に同情して、神の祝福を祈るべきであろう。

こうして日本のボートの育ての親は、異境の地に、ひとりし寂しく死んだ。またその死を歎き、霊を弔うため多くの教え子たちも、次々に師の後を追って、今は一人も残っていない。しかしストレンジ師によって培われた日本のボートは、70 余年後の今日、見事に花を咲かせ、実を結んで、世界オリンピックの檣舞台で、有色人種唯一のクルーとして、活躍しているのである。かつては英本国に乗込んでマローで優勝し、またケンブリッジ大学選手を迎えて、これを破ったと聞いたら、地下のストレンジ師は、『ボイズ、よくやった』と、手を打って喜んでいることであろう。」

以上のように、ストレンジ氏の結婚、家庭生活、急逝の状態を大変詳細に伝えられている。

では、当時の新聞で氏の急逝がどのように報道されたか、東京日日新聞（現在の毎日新聞の前身）の明治 22 年 7 月 7 日の記事に可成り大きく、黒枠でストレーン^(ママ)ジ氏の死去と囲み「第一高等中学校雇教師ストレーン^(ママ)ジ氏は、一昨日午後 2 時其の邸に於て死去したり、氏は一昨^(ママ)年来病に罹り居たれど去りとて甚だしき徴候もなく去る 3 日の如きはいつもの如く学校にも出て散歩をも為したる程なりしが、一昨朝に至り心地勝れずとて学校を休みたるに疾急にすみ^(ママ)医薬効なく遂に墓^(ママ)なく最後を遂げたり、其原因は心臓麻痺にありという、氏は今より 15 年前即ち氏が 21 歳の時始めて我文部省に雇われて我国に來り元と大学予備門及第一高等学校にて英語学を教授し且生徒の為に戸外遊戯の事に力を尽し其の効少からず一朝其の死を見るに至れるも、平生の勞力過度なるにより來れりと言えは氏を知れる内外人は痛く其の死を悼み居るよし。」と、かなりのスペースをとって、渡來、功績にまで及んで伝えている。なおこれによると一昨年来病にかかり居たれどとあり、過勞により幾分健康を損っていたことが知られる。

更にまた、当時、毎月 2 回発行していた「少年園」という雑誌の第 2 巻第 18 号（明治 22 年 7 月 18 日発行）の 24 頁に、「ストレンジ

君逝く」と題して、

第一高等中学校教師英人、エフ・ダブリュー・ストレンジ君は去る 5 日病を得て、俄然長逝せられたり、君を知るもの誰か袖をしぼらざらん、君は早くより我国に聘せられ、15 年の久しき間、我国の青年教育に従事し、慈愛親切なる良教師として生徒の帰服する所なりき、君は又戶外遊戯に長じ、運動会競漕会等の催あるときは、自ら好んで奔走周旋し、大に奨励鼓舞せられたり、我国の少年社会に今日の如く、戶外遊戯の盛に行わるるに至りしは、君与りて力ありというべし、君の遺骸は遺言により、第一高等中学校生徒諸子の手を以て、日本風の葬式を用い、青山墓地に埋葬せられたり、柩を送るもの数百人、概ね君の薫陶を受けし人にて、皆痛惜せざるはなかりき、ストレンジ君又以て瞑すべし。」と。

この「少年園」という雑誌は、当時全国的に読まれた少年少女雑誌で（明治 21 年 11 月 3 日第一号発行）、毎月 3 日と 18 日の 2 回に分けて発行された約 30 頁位の小雑誌で、内容は「少年園」「学園」「文園」「譚園」「叢園」「芳園」の六つに分けて編集されていた教育的な雑誌で、1 冊 5 銭であった。

おそらく平常元気で、二人分の働き（正規の英語教師、課外の体育指導）をしたことが過労であった事と、夫人との性格上の違いからの家庭生活における精神的な悩み等が重なり合って死を早めた事と思われる。やっとな日本のスポーツも曙光を見出しはじめた時にこの偉大なる先達があまりにも唐突に天に召されてしまった事は惜しみてもあまりある事であった。愛弟子武田氏は「將に大いに為すあらんとするに当り、上天無情忽焉としてその寿を奪う。遺恨何ぞ堪うべけんや」とその無念の胸中を述べ、またその教え子の一人、岸清一氏は「先生は温厚なジントルマンで、我々と 10 歳位しか年齢が違わなかったせいか非常に親しみやすく「Boys, Boys」と呼んで競技やボートを教えてくれた、……先生はとにかく日本のスポーツ界の忘れてはならぬ恩人で、もっと長く生きておられたら日本のスポーツは格段の進歩をとげたものを惜しいことに頓死急逝されてしまった。」と語っている。確

かに惜しみてあまりあることであった。

注

- (ママ) 多少疑問はあるが、原典のままを載せてあるという意。
- (1) 統子規隨筆, 26 頁, 松蘿玉液の中にも、「戸外遊戯というもの古より我邦に存する者鬼事, 隠れ子, いくさ事, 游泳等小兒のすなるものを除きては其種類極めて少し. 其之れ有るは多く上等社会の欲娯に供する者にて蹴鞠, 流鏑馬, 笠懸, 犬追物, 打毬等なりとす. 其外の戸外遊戯は皆西洋より来りしものにて中に就きて今最も盛んに行わるるは端艇競漕とす」とある. ……明治 29 年 7 月頃の隨筆.
- (2) 古事類苑, 遊戯部を見ると, 明治以前に, 日本で行われていた遊戯的なものとしては, 竹馬, 独楽, 扇あげ, 鞞韃(ぶらんこ), 印地(石打ち), 競渡(ふなくらべ), 花火, 綱引, 手拭引, 帯引, 枕引, 頸引, 腕押, 競走(はしりくらべ), おてだま, 羽子板, 手鞠等があげられる.
- (3) 蹴鞠, 古事類苑, 遊戯部十五, 1039 頁古くは「クエマリ」又は「マリコユ」と言い, 後には「ケマリ」と言い, 字音を以て「シウキク」と言う. 即ち鞠を蹴て以て戯とするものにして, 人数は八人を以て限とし, その之を行う場所には砂を敷き, 四方に柳, 桜, 松, 楓等の樹を植う, 之を懸りと称す. ……以下 1142 頁まで百頁余にわたって解説あり.

支那伝来の遊戯(スポーツ)であって日本に伝わった時期は明確ではないが, 奈良時代以前なることは明かである, 用明天皇(586—587)から皇極天皇(642—644)の頃, 隋, 唐あたりから中国の文物輸入と共に入って来たものらしい.

日本書紀, 卷第 24 に, 「皇極天皇三年春正月乙亥朔以中臣鎌子連-
 拜神祇伯……偶預中大兄於法興寺槻樹之下打毬之侶而候皮鞋隨毬脱落取置掌中前跪奏奉」(皇極天皇 3 年の春正月キノトの亥ついたちの日に中臣の鎌子のむらじを以て, かむつかさのかみにめす, ……たま
 たま中大兄が法興寺のつきのきの下にて, クエマリのともがらにまじりて, みくつのまりのままに脱げ落つるをまもりて, たなうちに取りもちてすすみひざまづきてつつしみて奉る), とあり, この打毬は明らかに蹴鞠であった. これが日本の記録では最初のものである. 奈良時代では大宝元年(701)5月5日に蹴鞠會が奏せられたことが「本朝月令」に記してある, 平安時代には一段と盛んになり, 醍醐, 村上天皇の頃には, 待臣殿上人が召されて行われた. 源氏物語などから察すると, 平安時代の中頃には殿上人以外の一般貴族の間にも普及したようである. とにかく, けまりは宮廷, 貴族のみの遊戯であったが,

江戸時代になると富裕な町人の間でも行われたらしいことが、西鶴の作品にも見られる。

蹴鞠の起源、伝来、方法等については、侍従大納言藤原成通の「口伝集」や師範家としての祖、飛鳥井雅経の「蹴鞠略記」、同雅康の「蹴鞠簡要抄」「蹴鞠十ヶ条」「同十二ヶ条肝要抄」「蹴鞠条条大概」「同秘説条々」、藤原入道大納言為定の「遊庭秘抄」等の外、「倭名類聚抄」の雑芸四、「箋注倭名類聚抄」の雑芸二、等の文献がある。

(4) 日本スポーツ文化史, 木村毅, 16 頁.

(5) 打毬, 古事類苑, 遊戯部十五 1143 頁. 打毬は「マリウチ」と言い, 又「ダキウ」と言う, その法騎馬の人数を両班に分ち, 庭上に各班に属する毬子を置き, 馬上毬杖を持って所属の毬子を掬い, 相争いて毬門に投じ, 早く投入れ終りたるものを以て勝とするなり, と説明してある.

これは, 奈良時代聖武天皇(724—748)の頃, 遣唐生又は唐僧などの来朝によって持ち来たされたものらしい, 「倭名類聚抄」雑芸四には, 打毬は支那の黄帝がはじめ, 軍隊に行かせたとあるが, 支那の打毬は, 中央アジアで行われた「ポロ」によく似たていて, チベット, ベルシャ, トルコ等に発しているともいわれるがその関連については明らかでない. 日本の戸外遊戯としては, 蹴鞠と共に外来の古いものである. 武技的のもので馬上から毬杖を使って毬を打つものであるが, その後徒歩で行うものもできた. 我が国最初のものとしては, 聖武天皇の神亀4年(727)1月であったことが「万葉集」巻第六に, 反歌一首, 「梅柳過良久惜佐保及内余遊事乎宮動余」(梅柳過ぐらく惜しみ佐保の内に遊びしことを宮もとどろに), 「右, 神亀4年正月数王子及諸臣子等集於春日野而作打毬之楽」(右は神亀4年の正月オホキミタチ及びオミタチ春日野に集いて打毬の楽しみをなしき)と, 打毬を楽しんだことが載っている. 騎馬で行うものは, 貴族, 武家の間でなされ, その方法は騎馬の人数を二組に分け, 場内に各組毎に毬を相手の毬門に毬杖で打ち込む競技これは操馬訓練, 実戦的訓練の意味も兼ねた遊戯であったが, 中古以来は, あまり行われた記録がなく, 鎌倉, 室町時代は毬杖という遊戯で僅かに行われた程度だったが, 江戸時代に入って再び盛んになった. 規則, 競技場, 服装, 人数等も色々変化があり, 人数等は二組五騎になったり十騎になったりした.

(6) 古事類苑, 武技部.

(7) 明治以前に渡来したもの.

明治以前に, 海外より日本に入ったものとしては, 蹴鞠(蹴まり)・打毬, ネンガラ, オランダ羽子板, ポートなどがある. これはスポー

ツというよりは遊戯といった形のもので、前二者は、宮廷とか上流階級のみに行われたものであり、ネンガラはむしろ一般庶民の子供の間に行れた遊びである。蹴鞠は、用明天皇の御代（586—587）、あるいは、皇極天皇の頃（632—634）唐より渡来し中大兄皇子が興福寺において行った史実がある。

打毬は、奈良時代聖武天皇（724—748）の頃遣唐生、もしくは唐僧などの来朝に際してもたらされたもので、更にその源は、チベット、ペルシャ、トルコ等に発していると言われている。

ネンガラ、これは子供達が行う遊戯であるが、その起りはオランダ船が長崎に入った頃始まったと「日本スポーツ文化史」の5頁にある。すなわち長崎の出島のオランダ館に使われていた黒人達が、船釘などを拾い集めて、Aが地面にそれを投げつけるようにして打ち込む、Bがそれを倒すようにAの釘をねらって打ち込み、倒したら、倒れた釘を獲得する。倒れなかったらAがはじめの釘を抜いて又Bを倒すように打ち込むという方法で、個人戦や、両組の対抗で勝敗を決する。これを行ったのが「ネグロ」だったので「ネンガラ」となまって、日本の子供達に伝ったという説である。五寸釘でもできるし、重い硬い質の木（なるべく生木がよい、直径 2~3cm、長さ 30~35cm 位）の先端を尖らせて、少し軟かい地面でやっても面白い。しかしこの「ネンガラ」という言葉は「根木」「ねつき」「根つくい打ち」という言葉から出たもので、日本で室町時代から既に行われたという説もある（古事類苑遊戯部 1233 頁、遊戯大事典 555—556 頁、日本の遊戯 534 頁、体育辞典「木下・寺岡」314 頁等参照）

これは冬期の遊戯として、体育的にも価値があり筆者なども熱心に行ったもので、その「ネンガラ」という名称には常に疑問をもっていた記憶がある。

オランダ羽子板……紅毛雑話（森島中良、天明7年…1787）原本巻一、12 頁に「羽子板並羽根」と題して、「黒坊の弄もてあそびなり西洋館にて閑暇ひまなる時は、遣羽子をつきて遊ぶとなり、羽子板を「ラケット」という。羽根を「ウーラング」という。形図の如し。」とあり、12~13 頁に現在のバドミントンのラケットとシャトルコックに似た図が描いてある。図の説明に、ウーラングの図「大サ図の如し（9cm の大きさに描いてある）羽ハ揚弓の矢羽の如き白色の染羽なり 下の袋は白き革にて包み中ハ「キョルク」という朽木なり、蹴鞠の如く作りたり革の合目の上へ赤き毛織の笹縁を十文字に置きたり。ラケット之図…長サ一尺七八寸縁ハ曲物なり、縁柄ともに金唐皮にて巻たり両面とも三弦の革の如き薄皮にて張又アンペラにても張革にて張ハ古製なり、

此玩器吾家に珍藏する物先年田村元雄先生へおくる今彼家はごいにあり（昭和 18 年小野忠重編の現代書では 58—60 頁）、目次には「胡鬼板」という字が用いてある。この遊戯は現在のバトミントンの前身と見られる。長崎出島のオランダ館の黒人が最初に行ったらしい。ラケットは皮張にて現在法華経で用いている団扇大鼓の如きものであった。この用具が江戸時代には販売されていた、と日本スポーツ文化史の巻初のグラビアの解説にある。これで見ると先のネンガラと共に、オランダの伝来に伴って遊戯、スポーツの類も幾分日本に入ったことが考えられる。

ボートを我が国のスポーツとして最初に利用したのも、長崎在留のオランダ人だという口伝があるが正確なることは不明である（ボート五十年、9 頁）。「増訂明治事物起原」579 頁に、「短艇ハウスの始」と題して、横浜市山下町 12 番地海岸通りに、横浜開港後間もなき慶応 2 年に開かれし、バレッジと称するものあり、一夏一人の費用 12 弗ないし翌年は 10 弗に下げて多くの会員を集め、端艇やヨット（快走艇）をおきて競漕並に遊泳の場所とし、毎年 5 月より 10 月紳士の遊び場所となせり、会員 2 人以上の紹介なきものは入会は許さざりし、其後アマチュアルールクラブの附属となし月会費 2 円に下げ、日本人をも入場することに改めたりとある。

- (8) 日本スポーツ文化史、木村毅、314 頁。
- (9) 体育史資料年表、今村嘉雄、476 頁、学校体育制度史、井上一男、14 頁、学制八十年史、724 頁、737—744 頁。
- (10) 海軍兵学校沿革、第一巻、132—135、169 頁、スポーツ八十年史、日本体育協会編、125 頁。
- (11) 海軍兵学校沿革、第一巻、164 頁。
- (12) 同書、164—165 頁。
- (13) 同書、166 頁。
- (14) 図書館研究、550 頁。プリンクリー（Brinkly, Frank・1841～1912）英国人で、1867 年（慶応 3 年）日本に来朝し、海軍砲兵学校の教師となり後に新聞社に務む。1912 年日本にて死去。

海軍七十年史談（沢 鑑之丞）、7 頁。英国海士官で旧兵部省に招かれ、海軍士官の教育を担当せしめ、且つ砲術及び将帥術の教授を受けたせられた、海軍士官学校は築地四丁目の海軍兵学寮の隣に設けられた、部内ではこれを「プリンクリー学校」と称した。生徒には本科及び予科があった。

プリンクリーは元來語学力に長じ、邦語、支那語に精通していた。海軍兵学校に転じた後は専ら英語の教授を担当した。明治十年十月三

十一日満期になって辞め、その後は横浜メール新聞の主筆となった。

「語学独案内」を著し、大いに世の珍重を受けた。

- (15) 海軍兵学校沿革，第一巻，166 頁。
- (16) 同書，167 頁。
- (17) 同書，167—169 頁。
- (18) シプソンはシプリンのミスプリントらしい。同書 133 頁にウイル
リエム・シプリンとあり，スポーツ八十年 125 頁にもシプリンとある。
十九世紀に於ける日本体育の研究（今村嘉雄）992 頁注 57 にもその
疑問の点が記されている。ウィルリエムは William である。
- (19) チップも海軍兵学校沿革第一巻 134 頁に「ウィルリエム・ヘンリ
ー・チップ」とあり，これは Willam. H. Chipp が正しい，……図
書館研究 551 頁より。当時は外人名を原名のスペルを用いず，片仮名
又は漢字で書いてあるものが多かった。例えば Bain を倍因，Haven
を爰般，温度計の考案者 Fahrenheit 氏を華倫海氏（華氏）Celsius
を摂爾樹と書いた（略して Celsius 氏の温度計を C，摂氏という）。
- (20) 海軍兵学校沿革史，第一巻，169 頁。
- (21) Illustrated World history of physical Education（図説世界
体育史），302 頁。
- (22) 北海道大学創基八十年史，14 頁。
- (23) 恵迪寮史，58 頁。ことに吾等の敬服せしは，ホイーラーという
人にて，数学，土木学の専門教師たりき，この男は米国にては，かの
エマーソンと同郷人にして，かつその崇拜者にてありけり，品行も方
正，人物も高尚にして何となく威厳あり，顔こそ眼玉飛び出て，体は
少し前方に屈し如何にも美男子の評は下し難く，殊に赤鬚は頤に
のみ一寸生えて一時は山羊（ゴート）という綽名を負わされたまいし
が，それ等は小事にて人品と言えは身に締りあり，教場にて物言うに
も自ら主義ある如く，如何にもクラークの後を受けて教頭となりし価
値ありと吾々は感心したりけり。
- 北海道大学創基八十年史，53 頁。豊平橋の架設，長万部・札幌間
の山道の測量，創成運河の設計等に立派な業績を残した。帰国後ボス
トンで土木会社を起して成功した。
- (24) 明治文化発祥記念誌，106 頁。……札幌農学校にて明治九年より
十二年まで植物学を担当した。

恵迪寮史，59 頁。……ベンハローという人は年未だ若く当地へ来
りし時は二十四五歳と思われ，丈いと高らかに，容貌やさしく，頭顱
は一種特別に規則立ちて楕円の形をなし，当時開拓使の工業局にて製
造せられし「ストーブ」の体にいと能く似たりしかば，一時「ストー

ブ」先生の尊名を奉りしに、後には転換して件の「ストーブ」の事を「ベンストーブ」となん言い会えりける。この人家柄も良く随って人物も大やうにして、教場にあるも校外にあるも、人に接しては常に意味ありげにニヤニヤとして「ゴート」先生の如く恐ろしという威厳は更に無かりしかど、何となく憎気のなき才物にして、弁説にも達し講義も上手なりき、学問は博物学者たりしより特に植物と化学とはこの人の得所にして文学に至りては吾々兄子なりしより批評を下すは恐れ入りし次第ながら、あまり深く究めたまわざりし……以下略。

北海道大学創基八十年史, 53 頁。氏は鞣皮作業に興味を持ち当時北海道に多く産した鹿皮の製革を研究指導し又北海道産繊維の研究に努めた。帰国後モントリオール市のアツギル大学教授となった。

(25) 北海道大学創基八十年史, 22—23 頁。

(26) 同書, 50—51 頁。

(27) 北海道大学創基八十年史, 24 頁, 54 頁。William P. Brooks, —Bachelor of Science. 明治 10 年 2 月来校し専ら農学を担当した。

恵迪寮史, 60 頁。……ブルックス氏は、先の二氏に後れて来札せられ、年齢こそ勝りたれ、家柄は他の二氏に劣りてけりマサチューセツツ農学校を卒業せしばかりにて、学理には深く通ぜざりしかども氏の宅はもと農家にして、子供の頃より農事には経験もあり、年齢も長く居りしこととて、他の卒業ホヤホヤの輩とは些か異なる所なきにしもあらざりき、性質はまことに実着にして物事を気にかくる程精密ならん事を願い、吾々血気の書生輩より見し時は、如何にも小胆なる様思われたり、教場にて生徒等のあまり学科出来ざる時は——あわれ痛ましき事たりしよ——！ 鼻をすすりて涙ぐみたまひ且つ平素不勉強の学生輩は後に残していと懇ろに説き聞かせられけり、或は病気の為欠席せしものある時は自ら寄宿舎まで見舞に来りませり…中略…

氏は来札後、細君を米国より呼び寄せ十余年間当地に留まれり、夫妻共に札幌の氣候と札幌の社交とを愛し、この地を去ることをいみじう惜みたりしが、マサチューセツツ農学校の聘に応じ終に帰国したりけり……中略

先生は明治 21 年 10 月解約となり、母校マサチューセツツ農科大学の農学教授となり、後同州の試験場長も兼ねられ米国でも仲々有力な農学者となった。先生は約 12 ケ年在札中本校の農学の授業を担当し、明治 13 年以後は植物学も兼担し、その傍ら農園長と札幌県及び北海庁の勸業顧問となり非常に功労があった。このため官よりは勲四等に叙せられ、大正 8 年 7 月には我国農学博士会の推薦で農学博士の

学位を授与された。

- (28) 恵迪寮史, 66 頁.
- (29) 恵迪寮史, 66 頁. 北大創基八十年史, 48 頁.
- (30) 頃としたのは、雨天などで変更の場合を考慮したためであろう。
- (31) 恵迪寮史, 66 頁.
- (32) 海軍兵学校沿革, 第一巻, 166 頁.
- (33) 恵迪寮史, 262 頁.
- (34) 同書, 66 頁.
- (35) スポーツ八十年史, 125 頁には亀奔とあるが誤植らしい。
- (36) 恵迪寮史, 66 頁.
- (37) 同書, 157 頁.
- (38) 北海道大学創基八十年史, 45 頁, 331—332 頁.
- (39) 恵迪寮史, 162 頁.
- (40) 武田千代三郎 (1868—1932). 出生略歴については 47 頁参照のこと。

岸清一氏が死去の一年前、東京大学新聞に、武田氏を評して以下の如き文を掲載している。「明治 22 年東大分科レースの時、法科のクルーは、曾我、武田、都崎、岸、野村、島田、潮田である。私は前から 4 番を漕いで黙々として働いていたのがやっとストレンジ先生に認められたが、整調の武田千代三郎は何と言っても、先生直参の高弟だけあってすばらしいスポーツマンであった。しかも非常な研究者で手さきも器用で、海軍のボートにまけぬ立派なものを彫って作ったりした。スプリンターとしても活躍したがボートの方は武田がコーチ格で、かくれて酒でも飲んだことでもばれようものなら、明日からクルーを解散しろ、おれ一人で漕ぐと声涙と共に下る誠心の言をもって迫ったもので、だれも頭があがらなかった。技術の点においても、精神の点においても武田は日本のスポーツの恩人であろう。忘れてはならぬ一人である。」ボート百年, 210 頁, 体育大辞典, 682 頁も参照のこと。

- (41) 山口鋭之助 (1862—194?) 十九世紀における日本体育の研究, 966 頁, 日本スポーツ文化史, 306 頁, 東京帝国大学漕艇部五十年史, 18 頁.

明治 16 年 6 月 16 日東京大学及び大学予備門の競技運動会の際、ストレンジに協力してその競技会の役員を務めた。

工部大学在学中に走舸組としても活躍明治 17—8 年頃、田中館愛橘、武田千代三郎、岸清一等と共にボート選手として活躍した。

在学中、明治 16 年 3 月頃、ボートに不足していたオールを備えたいと希望し、大学の会計に依頼しても作ってくれない。所が会計では

寄宿舎の周囲に板屏を設け、門を作ったりしたので、そんな金があるなら、我々の希望をきいてくれるべきだという不平が高まり、遂に皆で新造の扉や門を叩きこわしてしまった。当時学校ではポートは暴動だと称し、その暴徒の張本人は山口銳之助だとして退学処分になったが、満1年で復学が許された。その17年3月には忘澁会が組織された。然しこのポート（暴動）事件は決して無駄ではなかった。学校側も大いに反省することとなり、ポートが健全スポーツで、心身鍛練の役に立つなら、できるだけ学生の希望を容れてやるべきだという教授もいて却って教職員が一致して援助する気運になったという。山口銳之助は、明治17年に東京大学を卒業し21年には第一高等学校の教師となり独、仏に留学し理学博士の学位をとり、体育スポーツ界の発展に尽力し、晩年は学習院長から宮中顧問官となり、スポーツで鍛えた六尺（1.8 m）近い巨軀で80歳以上の長寿を保った。著書に「祭政一致の制度」がある。

- (42) 前出 27 頁参照。当時の東京大学の通称であった。現一橋大学と混同しないこと。
- (43) 東京帝国大学五十年史，上冊，211～213 頁。
- (44) 同書，215 頁。
- (45) 同書，209—210 頁。
- (46) 同書，194—195 頁。
- (47) 図説世界体育史，281 頁。十九世紀に於ける日本体育の研究，834—840 頁。スポーツ八十年史，巻頭写真，7 頁。体育五十年，10 頁及巻末折込附図。Aerztliche Zimmergymnastik oder system の後半に 45 種目の解説あり。
- (48) シュレーパー。経歴，業績等については，体育大辞典，505 頁，十九世紀に於ける日本体育の研究，862 頁参照。氏の主著「Aerztliche Zimmergymnastik」の副題は，「A. Z. oder System der ohne Gerath und Beistand überall auführbaren heilgymnastischen Freiübungen als mittel der Gesundheit und Lebenstüchtigkeit für beide Geschlechtern, und jedes Alter und alle Gebrauchzwecke」「医療的室内体操即ち老若男女総ての健康と生活活動の手段として器械並びに補助者なしに，随所で実践できる医療的徒手体操の体系」というもので，当時としては素晴らしい体操の解説書であった。この書の附録の図説を「体操法図」として大学南校で翻訳出版したものである。したがって我国・徒手体操には大きな影響を与えたことになる。
- (49) 樹中体操図法 45 種目の種目名原語及び，日本語訳は次の如し。

1. 頭首環回 (Kopfkreisen)
2. 頭首左右転 (Kopfwenden)
3. 両肩聳卸 (Schulterheban)
4. 両臂環回 (Armkreisen)
5. 両臂左右高伸 (Armheben seitwärts)
6. 両手把腰 (Ellbogen zurüch)
7. 背後叉手上下 (Hände hinten geschlossen)
8. 左右按頭支脇呼吸 (Ungleichseitiges Tiefathmen)
9. 両手前衝 (Armstossen nach vorn)
10. 両手左右衝 (Armstossen nach aussen)
11. 両臂上衝 (Armstossen nach oben)
12. 両臂下衝 (Armstossen nach unter)
13. 両臂背衝 (Armstossen nach hinter)
14. 両臂胸前収縮 (Zusnomenschlagen der Arme)
15. 両臂左右関伸 (Auseinanderscklagen der Arme)
16. 伸臂回転 (Armrollen)
17. 両手 8 字形回転 (Achtenbewegung der Hand)
18. 手指屈伸 (Finger-Beugen und Strecken)
19. 両掌摩擦 (Handreiben)
20. 半身俯仰 (Rumpfbeugen vor rückwärts)
21. 半身左右欹側 (Rumpfbeugen seitwärts)
22. 全身直立回転 (Rumpfwenden)
23. 半身直立環回 (Rumpfkreisen)
24. 仰臥半身起立 (Rumpfaufrichten)
25. 隻脚環回 (Beinkreisen)
26. 隻脚側方高張 (Beinheben seitwärts)
27. 隻足回転 (Beinrollen)
28. 両脚集立 (Beinzusammenziehen)
29. 隻膝向前屈伸 (Knie-Strecken und Beugen nach vorn)
30. 隻膝向後屈伸 (Knie-Strecken und Beugen nach hinter)
31. 直立足尖俯仰 (Fuss-Strecken und Beugen)
32. 直立向前卓膝 (Knieheben nach vorn)
33. 一蹲一立 (Niederlassen)
34. 隻手握挺一前一後 (Stabkreisen)
35. 背挺兩臂前挾進歩 (Gehan mit durchgestreckten Stabe)
36. 兩臂前後伸張 (Armwerfen vor und rückwärts)
37. 両手左右投伸 (Armwerfen seitwärts)

38. 鋸切運動 (Sägebewegung)
 39. 横揮運動 (Schnitterbewegung)
 40. 斧伐運動 (Axthauen)
 41. 蹣跚運動 (Trottbewegung)
 42. 前後投脚 (Beinwerfen von und rüchwärts)
 43. 左右投脚 (Beinwerfen seitwärts)
 44. 両足越杖 (Stabübersteigen)
 45. 側臥左右反転 (Rückenwälzen)
- (50) リーランド George Adams Leland (1850—1924). 近代日本の体育に科学性と大衆性への方向づけをした人で黎明期の日本学校体育の開拓者である。

米国アマースト大学卒の医学者、明治 11 年 (1878) 日本の招きに応じて来朝し「体操伝習所」の教師となり、ダイオ・ルイス (Dio Lewis) の体操を指導し、体育論を講じた。14 年 7 月帰国した。概略は、体育大辞典、1170 頁。詳細は、十九世紀に於ける日本体育の研究、897—932 頁にあり。

- (51) アスレチックス、大正 12 年 2 月号、10 頁、武田千代三郎寄稿に、

「明治十五六年までは、医学の進歩は、一般の衛生思想も今から考えるとまるで嘘なくらい幼稚なもので、したがって書生の病死するものが極めて多く、夏休み毎に、僅か三十名足らずの級友中に一人や二人は必ず再びその姿を見せぬものがあつた位でした。肺病に脚氣これが書生の命取りで、東京へ来れば脚氣になる、勉強し過ぎれば肺病になる、一般に皆こう言つてひどく恐がつたものです。その頃の医学では肺病の原因はまだ判つておらず遺伝説と何だかわからぬが学問する者におこり易い病気だとして罹つたが最後助かる氣づかいなしと見做されてきました。運動とか保健などというものは全く識られない謎のようなもので、男子立志出郷関、学若不成死不還として笈を負うて千里を遠しとせざうつ橋 (当時の東大はうつ橋にあつた) を志して押し上つた当年の書生達に口にこそ“書生書生と輕蔑するな、今の參議は皆書生”と高唱して破れ袴で大道を闊歩し、意氣豪然として天下を睥睨はして居たものの、朝には涙と共に先輩の遺骨を拾ひ、夕には同室に衝心の唸り声をきいては明日とも知れぬ人の運命に悚然として怖れをなさざる者とはありませんでした。幸にその多数が出遊十年間、足も腫れず、血も吐かず首尾よくその志を遂ぐるを得たるは全く適者生存の原理に洩れず、生れつき至つて頑健たる上に汽車も電車などもなかつた時代とて、上京、帰省のその折は無論のこと、平素校外に出

歩くにも足を頼りにて、てくてく歩き廻ったのが自然に筋骨の鍛練にも亦平常の保健にもなってわずかに激甚なる心身の酷使に堪えしめたからではありました」と述べてあり、当時如何に脚氣、肺病（肺結核）が怖れられていたかと、汽車、電車に乗らず、すべて歩行に頼るしかなかったか、それが、人の健康に如何に役立ったか等を卒直に述べたものであり、医学的には進歩したが、交通機関の発達による運動不足、空気の汚染等による文明病になやまされている現在と、いつの世になっても人生とは、なかなか容易ならざるものであることを痛感させられる。

- (52) 雑誌アスレチックス、大正 12 年 2 月号, 12 頁.
- (53) 同誌, 3 月号, 122 頁.
- (54) 同誌, 123 頁.
- (55) 同誌, 124 頁.
- (56) 同誌, 129 頁.
- (57) 同誌, 129 頁.
- (58) 日本体育の研究, 966 頁.
- (59) 雑誌アスレチックス, 上記 3 月号, 128 頁.
- (60) 同誌, 128—129 頁.
- (61) 同誌, 2 月号, 12 頁.
- (62) 注 (40) 参照.
- (63) 近代日本体育史, 新行寺朗生, 144 頁.
- (64) スポーツ八十年史, 127 頁. ポート百年, 宮田勝善, 210 頁.
- (65) 海軍兵学校沿革, 第一巻, 132—135 頁.
- (66) 注 (18) と本文 12 頁参照.
- (67) 注 (19) と本文 14 頁参照.
- (68) 注 (23).
- (69) 注 (24).
- (70) 注 (27).
- (71) ウイルソン (Horace Wilson), 明治文化発祥記念誌, 66 頁.
 米人御雇教師, 初め大学南校の英語及び普通学教師として明治 4 年 8 月に招聘され 4 ケ年間その職に居り, 8 年 9 月より一カ年間数学教師となった. 10 年 7 月解任, 帰国に際して二百円及び卓毬一枚を贈与され, 尚 21 年 5 月には勲五等に叙せられた. 牧野伸顕が明治 7 年帰国して関成学校に入学した時, ウイルソン教師にベースボールの指導を受けたことが記録に残っている.
- (72) 東京帝国大学五十年史, 上冊, 927 頁.
- (73) スポーツ八十年史, 483 頁.

(74) 創立六十年(東京高等師範, 東京文科大学), 398 頁. 注(50) 参照.

(75) 明治文化発祥記念誌, 17 頁.

Knott, C. G. は英国スコットランドの人. 氏は 1856 年 Edinburgh 府に生れ、エジンボURG大学を卒業後同校の教授となり、物理学の講義をなし又同府ローヤルソサイテイの会員に推薦された人である. 氏は明治 16 年より同 24 年まで東京大学理学部の教師として、高等電気学、音響学、磁気学、力学等を講義し、ユーイング、メンデンホールの二教授と等しく熱心に理学研究を奨励し、我国物理学の発展に多大の貢献をした. 後年物理学中殊に磁気学研究の旺盛になったについては磁気専攻の氏の感化を決して見逃すことはできない. 尚、明治 23 年氏が本邦全土の磁気測量に従事したことも学界に対する大なる貢献であった. 明治 24 年 6 月特に拝謁を賜り勲四等旭日章を贈与された. 余技として、学生にボートの指導をしたことはよく知られ(東京帝大漕艇部五十年史, 10—11 頁参照)、運動会等にも役員をつとめ体育を奨励した.

(76) スポーツ八十年史, 247 頁. 東京帝国大学漕艇部五十年史, 7 頁.

(77) スポーツ八十年史, 772 頁.

(78) シンティ (Shinty). 近代スポーツ発展の系譜, 44 頁, 121 頁. 体育大辞典, 537 頁, 897 頁, 907 頁, 948 頁.

シンティはスコットランドで行われているホッケーの一種である. スコットランドの高地という地理的条件と、temper な民族性からつくられたもので、ホッケーと比べ、変化に富み、エキサイトし、荒く、スピーディである. この競技は、アイルランドで 3000 年も前に行なわれていたのが 1000 年程前にスコットランドに渡り変形したものである.

アイルランドでは、ハーリー (Hurly) と呼ばれ、イングランドでは、バンデイ (Bandy) と呼んでいるのがこれと同類である.

(79) スポーツ八十年史, 772 頁.

(80) Frederick のスペルが、体育大辞典 572 頁及び、十九世紀に於ける日本体育の研究 968 頁には Frederick とあり、図書館研究 568 頁に、Strange, Frederick, W. 英人、在日期間 1875~'89. 東大予備門. 一高英語教師とある. 氏の著書「Outdoor games」の表紙には F. W. Strange 奥付にはエフ・ダブリュー・ストレンジとしかかない. 又武田千代三郎著・理論実験競技運動、の写真の下に Signature が残っているがこれも F. W. としかかないので不明である. 然し人名と

しては Frederick というスペルはどこにもなく、Frederick が正しい筈である。

- (81) Strange 氏の生年月日についても、違った記載がある。「十九世紀に於ける日本体育の研究」967 頁には 1853~1889 年とあるが、体育大辞典 572 頁、ボート五十年 49 頁、体育史概説 249 頁等には皆 1854—1889 年とり、この方が正しい。
- (82) イートン・カレッジ (Eton College) ロンドンの西方 35 km Eton 市にある英国七大 Public School 中最も有名校で、全生徒寄宿舎に収容、寄宿舎は教師の私宅を兼ねている。貴族的中学校で徹底した教育法がとられ、古典的教科が教育課程の中核をなしている。これと並んで、集団的なスポーツ競技と伝統的な寮生活により生徒の人格形成に大きな影響を及ぼしている。スポーツは早くから学校教育の重要な一面として取扱われ、特に十九世紀に入ってからクリケット、フットボール等の集団的競技が盛んになった。長い伝統に支えられた厳格な規律に従って居り自由と規律の生活のうちに個性ゆたかな英国紳士が育成された学校である。ストレンジはここで、スポーツマンの精神をしっかりと身につけて卒業したものと思われる。
- (83) 前記と同じく、体育大辞典及び十九世紀に於ける日本体育の研究にはケンブリッジ大学卒業としてある。
ボート五十年の 49 頁には、イートン校を出ただけで……大学への進学をあきらめて日本へ渡って来た、とある。
- (84) ボート五十年の 49 頁には明治 6 年 18 歳の時とあり、体育五十年の 20 頁には 8 年で 24 歳としてある。明治 8 年 21 歳が正しいようである。
- (85) 東京帝国大学五十年史、上冊、927 頁。
 (86) 雑誌アスレックス、大正 12 年 2 月号、6 頁。
 (87) 日本スポーツ文化史、303—304 頁。
 (88) これはイギリスのミスプリントである。
 (89) アスレックス、前出 2 月号、2—4 頁。
 (90) 同書、5—6 頁。
 (91) 日本スポーツ文化史、307 頁。
 (92) 同書、302 頁。
 (93) アスレックス、前出 2 月号、8 頁。
 (94) 同書、3 月号、124—126 頁。
 (95) 東京大学で第一回の競漕会を開いたのは明治 17 年 10 月 17 日であったからこの同年は誤りであろう。海軍省の端艇競漕会は明治 16 年 6 月 3 日に行われた。東京帝国大学漕艇部五十年史、10—13 頁。

当時の東京日日、読売新聞記事等により明瞭である。

- (96) アスレチックス、大正 12 年 2 月号、6—8 頁。
- (97) 前出、漕艇部五十年史、4 頁。
- (98) アスレチックス、前出 2 月号、11 頁。
- (99) スポーツ八十年史、126 頁。
- (100) 前出アスレチックス、2 月号、8 頁。
- (101) 岸清一 (1867—1933)

武田千代三郎と同年齢であった。明治 16 年松江中学を首席で卒業し、17 年 1 月大学予備門二年級の補欠募集に応じて、122 名中ただ 1 人の合格者という秀才であった。22 年東大法科卒、在学中テニス、陸上競技(走、投)をやり、明治 20 年からボートもやった。卒業後弁護士となり、43 年法学博士の学位をとり、昭和 7 年勅選の貴族院議員となった。スポーツ界に於ては、大正 8 年日本漕艇協会設立の初代会長となり、大正 10 年 4 月には嘉納治五郎の後を受けて第二代の大日本体育協会会長となった。1924 (大正 13 年)に I. O. C 委員となり、内外のスポーツ界に貢献した。昭和 8 年 10 月 29 日 66 歳にて(心臓ぜんぞく)のため死去。遺志により岸家よりスポーツ界に、80 万円の寄附があり、日本体育協会はそれによりお茶の水に岸体育館を建造した。昭和 39 年にいたり、体協はオリンピック東京大会にそなえて、駿河台の旧岸体育館を日立製作所に 25 億円で売却、10 億円を天引きし、体協基金に当て残り 15 億円で地下三階、地上五階の豪華な新岸体育館(正式には財団法人岸記念体育会館)を旧代々木練兵場跡(神南町 25)に建設した。氏の遺志による 80 万の寄附が日本スポーツ発展のため如何に役立っているかは想像以上と言えよう。(ボート百年、参照)

- (102) 前出、注 (40)。
- (103) 前出、注 (41)。
- (104) アスレチックス、大正 12 年 3 月号、126 頁。
- (105) ボート五十年、9—10 頁。
- (106) バッテラ、ボート五十年史、8 頁、ボート百年、41 頁、外来語辞典、319 頁、東京帝国大学漕艇部五十年史、5 頁。

Bateira はポルトガル語で、ボートとか伝馬船、搭載短艇のことである。明治 10 年頃から数年の間は大学などでもバッテラと呼んでいた。本船が港に碇泊中、岸との解用に使われたもので、本船甲板の両舷に奇麗に並んでおかれていた。四人漕ぎが主であるが、二人漕ぎ、六人漕ぎもあった。鯖寿司のことをバッテラと呼ぶのは、そのすしを作る時の「船形の本製造具」の意から、それを用いて作ったのがバッ

テラズしであると外来語辞典には説明してある。食味研究家の多田鉄之助氏は、「鯖ずしのことをバッテラと呼び初めたのは大正に入ってからで、その形が明治初年のボートの形に似ているからである」と、ボート百年（宮田勝善著）41 頁に説明してある。

「増訂明治事物起原」の392 頁には、バッテラの始として、次の如く説明している。「洋式船舶を造ることを厳禁したる徳川幕府も漸く旧態に安んずべからざるを悟り、次第次第に、洋式を執るに至れり、バッテラ形船製造の始は、嘉永六癸丑にして、其五月、閑老阿部伊勢守より大船造り役々へ達せし書面に、異製端船の儀は当時松平土佐守小人中浜万次郎儀、異国より送越候節乗参り候船、長崎表より取寄候間、右船形に倣い、製造候様可被取計候（木村運舟談話）とあるぞ始なるべき。と。

(107) 東京帝国大学漕艇部五十年史, 4 頁.

(108) 同書, 5—6 頁.

(109) 学部対抗レースの紛争事件. 東京帝大漕艇部五十年史, 25 頁, 415 頁. ボート五十年, 35—6 頁. スポーツ八十年史, 249 頁.

第一回合同競漕大会は、東京大学走舳組春期競漕大会とも称し、明治 18 年 4 月 12 日隅田川上流で開かれたが、プログラム第 17 番までは無事に済んだが最後の、各学部（法学、理学、医学、文学、予備門本校、予備門分校の 6 クルー）対抗の決勝戦で大悶着が起った。上記 6 クルーの中、理学部と医学部は既に予選で落ち、予備門本校（赤）1 コース、文学部（青）2 コース、法学部（紫）3 コース、予備門分校（白）4 コースで決勝をすることになった。

元來東京大学では語学の関係から、英語系の法文理と予備門本校に対し、独語系の医学部と予備門分校の何か気分的にじっくりしない対立があった。所がこの決勝レースに於て露骨にも本校の赤組と分校の白組が殆んど同時にゴールインした。決勝審判の旗揚げ係の隈本君が両手に持っていた旗の赤の方をサッと上げた。すると「白、白」と怒鳴る声がきこえたので、あわててまた白旗を上げてしまった。赤と白の二旗が上がってしまったからどうにも始末がつかなくなってしまった。いきりたった両応援団は互に勝利を主張してゆずらず揉み合った。会長、首事、役員等が仲に入り何とか取しずめ優勝旗は杉浦予備門校長が預かることにしてやっと納まった。せっかく全学を挙げ、一堂に会して開催された第一回の競漕大会がこのような結果となり、以後総理命でボートの使用制限、学部対抗レースの禁止となったことは誠に不幸なことであった。

(110) 向陵誌, 641 頁.

- (111) 氏は英語の教師であったが前述(52頁)の如く、法科の教師になりたい希望をもって勉強していたので、幾分その関係の授業も担当したのかとも考えられる。
- (112) 向陵誌, 852 頁.
- (113) 同書, 928 頁.